文部科学省
大学教育再生加速プログラム
テーマⅣ

世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World

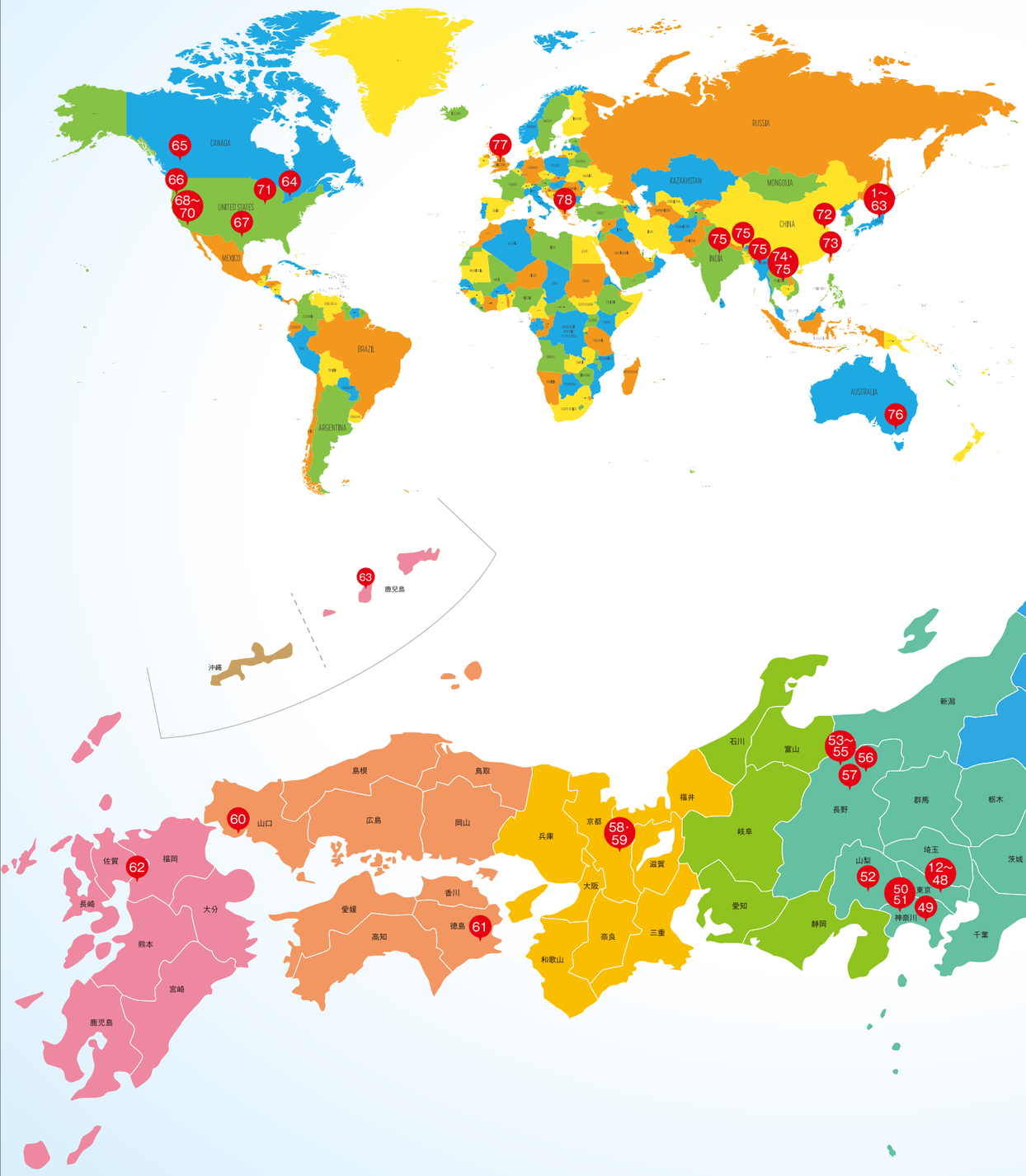
Musashino University
武蔵野大学

令和元年度
武蔵野大学 フィールド・スタディーズ
学外学修プログラム
事業報告書

武蔵野大学

令和元年度

武蔵野大学 学外学修 MAP



国内学外学修

1 北海道東川町役場地方行政フィールドワーク
2 秋田県鹿角市商店街元気UP&かつの版DMO体験プロジェクト―かつの暮らしで学ぶ地方活性化―
3 はばたけ秋田県上小阿仁村人口2,300人の小さな村が発信するアートプロジェクト～人口の4割が70歳以上の村～
4 秋田県上小阿仁村活性化支援プロジェクト
5 宮城県石巻市牡鹿半島ローカルリンクカレッジ体験プログラム(長期2学期)
6 宮城県石巻市牡鹿半島ローカルリンクカレッジ体験プログラム(長期夏休み)
7 宮城県石巻市にこいろクレヨン子どもの居場所づくり(長期2学期)
8 宮城県石巻市にこいろクレヨン子どもの居場所づくり(短期夏休み)
9 宮城県石巻市放課後デイサービス(障がい児)あっぷるじゃんぷ石巻
10 宮城県名取市閖上(ゆりあげ)～3.11を忘れない～自分で考える防災プログラム
11 福島県猪苗代町レイクサイド磐光
12 江東区役所(江東区文化コミュニティ財団)文化事業インターンシップ(中川船番所資料館・江東公会堂・亀戸文化センター)
13 江東区児童館インターンシップ(3児童館:東雲児童館・亀戸第三児童館・南砂児童館)
14 吉祥寺美術館インターンシップ
15 小金井市観光まちおこし協会インターンシップ(まちと遊びまちから学ぶインターンシップ)
16 小金井市地域の寄り合い所また明日(長期2学期)
17 小金井市地域の寄り合い所また明日(長期夏休み)
18 小金井市貫井北センター(NPO法人市民の図書館・公民館こがねい)インターンシップ
19 あきる野市役所図書館インターンシップ
20 東京特別区人事厚生事務組合・特別区協議会(東京23区特別区を知ってもらうプログラム)
21 西東京市役所インターンシップ(サマー子ども教室)
22 西東京市役所インターンシップ(児童館キャンプ、児童館ランチタイム)
23 エリアプロモーション入門プログラム
24 東京臨海副都心まちの景観づくり活動(花壇管理・球根植栽・クリーン活動)(短期2学期)
25 東京臨海副都心まちの景観づくり活動(花壇管理・球根植栽・クリーン活動)(短期夏休み)
26 日本の「神様」めぐり
27 1時間で行ける離島東京都八丈島で離島生活体験
28 江東区児童館インターンシップ(4児童館:江東区亀戸児童館・森下児童館・亀戸第二児童館・大島児童館)
29 武蔵野市福祉公社高齢者福祉支援インターンシップ
30 武蔵野市子ども協会子育て支援拠設・親子ひろば支援者実習(長期2学期)
31 武蔵野市子ども協会子育て支援拠設・親子ひろば支援者実習(長期夏休み)
32 小金井市役所インターンシップ
33 大成建設インターンシップ
34 NPO法人居場所コム(みんなの居場所づくり・コミュニティの醸成)
35 千川福祉会社会福祉施設サポートインターンシップ
36 あきる野市役所学童クラブインターンシップ
37 東京都八丈島老人ホームボランティアと観光モニター活動
38 武蔵野緑地保全活動(皆伐更新地の管理、樹木の択伐ち草刈、竹林管理)
39 Field Study in English (FSIE)
40 TOKYO GLOBAL GATEWAY(東京都英語村)運営補助
41 身近なバリアを探る
42 武蔵野地区空き家等状況調査(武蔵野市)
43 武蔵野地区空き家等状況調査(西東京市)
44 武蔵野地区空き家等状況調査(小金井市)
45 江東区の過去と現在―身近な経済問題を学ぶ―
46 社会保障をボランティアを通して学ぶ
47 出入国管理・税関視察プログラム
48 江戸東京都市史の試み
49 鎌倉・仏像・東大FS
50 作陶における伝統の創造(長期2学期)
51 作陶における伝統の創造(長期夏休み)
52 山梨県西桂町地域福祉推進プロジェクト
53 長野県信濃町地域産業の体験と課題発掘プログラム(短期2学期)
54 長野県信濃町地域産業の体験と課題発掘プログラム(短期夏休み)
55 長野県信濃町・ふるさと信濃町応援寄付金を通して地域振興を学ぼう
56 長野県飯綱町農業体験実習(りんご、トマト)
57 長野県長野市JAながの農業経済・流通体験インターン
58 京都・歴史文化フィールド・スタディーズ
59 京都・西本願寺を中心とした仏教フィールド・スタディーズ～仏教思想・仏教文化の源流を探る～
60 身近なバリアを探るin共生社会ホストタウン山口県宇部市
61 徳島県阿南市加茂谷地区総合振興ふれあこと体験実習
62 福岡県大川市モノ作りの魅力発信プロジェクト
63 鹿児島県徳之島町永吉ファームインターンシップ(畜産)

海外学外学修

64 ゲルフ大学(カナダ)(GLPプログラム)
65 CANADA-EDMONTON(オーロラ)(環境保護森林再生とサスティナブル・ディベロップメント)(カナダ)
66 Summer Study at Concordia University
67 Summer Study at the University of Texas at Austin
68 USA Los Angeles(教育研修)(アメリカ)
69 USA Los Angeles(グローバル・ビジネス研修)(アメリカ)
70 USA Los Angeles(医療・福祉・薬学施設視察研修)(アメリカ)
71 バイリンガルの専門家と一緒にアメリカ現地工場視察
72 世界を牽引するIT産業都市上海の今
73 台湾を知る
74 バンコク・きらめく仏塔の都
75 ブッダ慈悲の道(インド【コルカタ、ヴァラナシ、ラージギル、ダージリン】、ミャンマー、タイ)
76 ディーキン大学(豪州)(GLPプログラム)
77 語学留学プログラム(イギリス)グロスターシャー大学
78 オリンピックのスペシャリストと行く古代ギリシャ4大祭典競技の遺跡巡り

CONTENTS

武蔵野大学 学外学修 MAP ・・・・・・・・・・・・・・ 1

写真で綴るフィールド・スタディーズ・・・・・・・・・・2

学長挨拶／副学長コメント ・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

学外学修(フィールド・スタディーズ)事業総括 ・・・・・・8
- 学外学修導入の背景
- 学外学修事業の狙いについて
- 令和元年度 FS 実施一覧

FS 個別プログラムピックアップ ・・・・・・・・・・・・18
- 出入国管理・税関視察プログラム
- 江東区の過去と現在―身近な経済問題を学ぶ―
- 作陶における伝統の創造
- 宮城県名取市 閖上 (ゆりあげ) ～ 3.11 を忘れない～ 自分で考える防災プログラム
- 京都・西本願寺を中心とした仏教フィールド・スタディーズ ～仏教思想・仏教文化の源流を探る～
- 山梨県西桂町地域福祉推進プロジェクト
- はばたけ秋田県上小阿仁村! 人口 2,300 人の小さな村が発信するアートプロジェクト
- ブッダ慈悲の道
- バイリンガルの専門家と一緒にアメリカ現地工場視察
- USA Los Angeles 医療・福祉・薬学施設視察研修（アメリカ）
- 東京臨海副都心まちの景観づくり活動（花壇管理・球根植栽・クリーン活動）
- 学生が取材編集する中堅企業の CSR・SDGsレポート
- コピーライティングゼミ

情報発信活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
- 平成27年度～平成30年度学外学修シンポジウム
- 令和元年度学外学修シンポジウム
- FS 動画・プレゼンコンテスト「副学長杯」について
- 大学祭での FS 成果報告について
- ウェブサイトやリーフレットの活用について
- 各種新聞やテレビ等への掲載について

5年間の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
- 事業規模の推移
- FS 参加学生等へのアンケート調査について
- 入口や出口への効果
- まとめ

令和元年度 AP 事業報告書総括・・・・・・・・・・ 60

Photography of Field Studies

写真で綴るフィールド・スタディーズ

海外
フィールド・スタディーズ

海外フィールド・スタディーズ

1. オリンピックのスペシャリストと行く
   古代ギリシャ４大祭典競技の遺跡巡り
2. バイリンガルの専門家と一緒にアメリカ現地工場視察
3. バンコク・きらめく仏塔の都
4. 台湾を知る
5. USA Los Angeles（グローバル・ビジネス研修）（アメリカ）
6. 世界を牽引するＩＴ産業都市上海の今
7. Summer Study at Concordia University

国内／短期
フィールド・スタディーズ

国内／短期フィールド・スタディーズ

1. 徳島県阿南市加茂谷地区田舎暮らし丸ごと体験実習
2. 身近なバリアを探る
3. 北海道東川町役場地方行政フィールドワーク
4. 東京都八丈島老人ホームボランティアと観光モニター活動
5. 宮城県名取市閖上 (ゆりあげ)
   ～ 3.11 を忘れない～自分で考える防災プログラム
6. 長野県信濃町地域産業の体験と課題発掘プログラム
7. 武蔵野地区空き家等状況調査（小金井市）（西東京市）（武蔵野市）

国内／長期
フィールド・スタディーズ
（宿泊型）

国内／長期フィールド・スタディーズ（宿泊型）

1. 福島県猪苗代町レイクサイド磐光
2. 宮城県石巻市牡鹿半島ローカルリンクカレッジ体験プログラム
3. はばたけ秋田県上小阿仁村！
   人口 2,300人の小さな村が発信するアートプロジェクト
   ～人口の 4 割が 70 歳以上の村～
4. 山梨県西桂町地域福祉推進プロジェクト
5. 福岡県大川市モノ作りの魅力発信プロジェクト
6. 鹿児島県徳之島町永吉ファームインターンシップ（畜産）
7. 宮城県石巻市 にじいろクレヨン子どもの居場所づくり

国内／長期
フィールド・スタディーズ
（通学型）

国内／長期フィールド・スタディーズ（通学型）

1. NPO 法人居場所コム
   （みんなの居場所づくり - コミュニティの醸成）
2. 作陶における伝統の創造
3. 武蔵野市福祉公社高齢者福祉支援インターンシップ
4. 小金井市貫井北センター
   （NPO 法人市民の図書館・公民館こがねい）インターンシップ

学 長 挨 拶

武蔵野大学　学長

にしもと　てるま
西本 照真

東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻博士課程単位取得後退学　博士（文学）
武蔵野大学附属幼稚園長、学校法人武蔵野大学理事、武蔵野大学人間関係学部（現　人間科学部）学部長、武蔵野大学大学院仏教学研究科長等を歴任

武蔵野大学は1924年の創立から96周年を迎えることができました。令和元年度は新たにデータサイエンス学部、経営学部、大学院工学研究科並びに経営学研究科を開設し、11学部19学科12大学院研究科となりました。学生数では9,000人を超える総合大学へと発展してまいりました。いよいよ4年後の2024年には100周年を迎えます。長い歴史と伝統を重ねてきた大きな節目として、更なる発展の跳躍台となることを念じています。

教育においては、2050年の世界を担う creative な実践者の輩出を目指しております。2050年とは、今、大学で学んでいる学生たちが 50 歳前後になり、社会の中核で活躍する時期。その未来社会が、人類、世界、生きとし生けるものにとって幸せなものになりうるかどうか。今、大学で学んでいる世代に、世界が直面する課題に向き合い、解決していくための想像力、実践力を身につける教育が求められています。

そこで、本学では必修科目の学外学修プログラム「フィールド・スタディーズ」において、1年生2,000人以上が海外や国内各地を訪れ、フィールドワークや地域活性化支援、観光振興支援、地域福祉支援、インターンシップ等を実践し、自身の専門分野と社会とのつながりを体感する学外学修の授業を展開しています。このような外に出かける活動、実社会の課題に絶えず向き合いながら、学年が進むに従いそれぞれの専門的な学びを深めていく教育を、武蔵野大学の学びの基本スタイルとしています。創造性を養う実践的な教育を通して、2050年という未来に至る世界の諸課題を担い、他者と協同しながら主体的に解決していく実践力が養われてくることでしょう。

この本学の学外学修の取組みが、文部科学省の「大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅣ長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」に採択され5年目の最終年度を迎えました。本取組みの実績と検証・分析、再構築が、次代の新しい教育を創っていきます。この報告書が進化の契機になることを願ってやみません。

【本学の学外学修プログラムの変遷と主な教育施策】

平成25年（2013年）
- 主体的学びを促進するため、「武蔵野ラーニングスクエア」の開設（教育研究活性化設備整備補助金）

平成26年（2014年）
- 学修時間の実質的な増加・確保を目指した諸方策（コアカリキュラム化・シラバスの見直し・CAP制の見直し）の実施
- アクティブ・ラーニングへの授業改善、質的向上に向けた様々な試行を目的とした授業改善トライアルの実施（全学）

平成27年（2015年）
- 大学教育再生加速プログラム（AP）認定事業開始
- 学修の質向上とギャップイヤー活用のための4学期制一部導入
- 3ポリシーの見直し（DP精緻化のための企業人事調査、国内外事例調査等を実施しCP、DPとの連動性を図る）
- 教育課程体系化のための**カリキュラムマップ導入**
- 大学教育再生加速プログラム（AP）採択における、**フィールド・スタディーズ（短期学外学修プログラム）の全国展開**

平成28年（2016年）
- 学修の質向上とギャップイヤー活用のための**4学期制全学導入**
- 大学教育再生加速プログラム（AP）における、フィールド・スタディーズ（短期学外学修プログラム）の拡充
- 全学科のゼミ対象に**ルーブリック評価導入**
- 教育改革推進室（含：IR推進機能、学外学修プログラム企画推進機能）発足

平成29年（2017年）
- 1年次における**フィールド・スタディーズ（長期学外学修プログラム）の本格稼働**
- 学外学修プログラム別の学外学修者に対する事前・事後の成長実感調査開始
- DP到達度を図るための学科ルーブリック導入（3・4年次）
- 主体的学びを促進するためのクリエイティブ・ラーニングスクエア[CLS]の開設

平成30年（2018年）
- **学外学修推進センター発足**
- 大学教育再生加速プログラム（AP）における、**フィールド・スタディーズ（長期学外学修プログラム）の拡充**
- 全学アセスメント・ポリシーの設定

平成31年（2019年）
- 大学教育再生加速プログラム（AP）における、**フィールド・スタディーズ（長期学外学修プログラム）の質保証に向けたプログラム精査**
- 長期学外学修事業の過年度検証
- 学科アセスメント・ポリシーの設定

令和2年（2020年）
- 学校法人武蔵野大学中期計画開始
- 学外学修推進センターを中心とした学修者本位の質の高い学外学修事業の発展的推進
- 短期・長期プログラムと併せて、中期学外学修プログラムの開始
- SDGｓを実現するプログラム及び2020東京オリンピック・パラリンピック開催に伴う新規プログラムの開発・実施

フィールド・スタディーズを超えて
—FS進化論—

武蔵野大学　副学長

いけだ　まさお
池田 眞朗

法学部長、法学研究科長を兼務。専門は民法・金融法。司法試験考査委員、国連国際商取引法委員会作業部会日本代表、日本学術会議法学委員長等を歴任。
2012年紫綬褒章受章。

本学は、2015 年度から 5 カ年にわたる文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」のテーマⅣ「長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」に採択されて、「フィールド・スタディーズ（FS）学外学修プログラム」の取り組みを全学的に意欲的に展開してまいりました。ここに本報告書をとりまとめて、PDCAの観点からその展開を振り返り、検証することにいたします。

一大事業の開始と当初の反省

プログラム採択の当初、本学では全学 4 学期制を完全採用したうえで、FSを、薬学部を除く全学部の必修授業とするという大胆な方策を採用しました。そして、教員・職員総出でプログラム数を確保し、初期には 4 学期制の第 2 学期から夏休みにかけての長期FSも主眼としたわけです。今振り返れば、これは本学にとっての一大事業の開始でありました。

ただそこでは、当初、プログラム数の確保を優先させるあまり、内容の構築が不十分であったり、事前・事後授業の不足する例もありました。また、4 学期制の第 2 学期（6 月・7 月）から夏休みの終わり（9 月）までにかけての長期プログラムを想定したところが、我が国では秋学期入学は浸透せず、いわゆるギャップイヤーが実質的に定着しなかったことも事実です。

初期段階での反省としては、まず「外に出す」ことに主眼があったため、国内では農村等での勤労奉仕的なプログラムが多く、一方海外FSでは見学・観光旅行的なものもあった点です。そしてその実施意図についても、単に「何かに気づいてくれれば」という期待をするものでは、学生の満足度も低く、大学の必修カリキュラムとして不十分であることが感じられました。

専門の学びにつながるFSへ

そこから、改善の最大のポイントとして、「専門の学びにつながるFS」にするということが導き出されたのです。つまり、「何かに気づいて」ではなく、専門の学びに役立つ「必然の気づき」を与えるのが1年次必修で行う意味と考えました。この観点から①専門を意識した教員主導のプログラム設定、②教室での事前・事後授業の充実、③学科限定型プログラムも可、とし、さらに④地域連携、官学連携も図ったわけです。その好例としては、法律学科中心の空き家調査プログラム（武蔵野市、西東京市、小金井市と連携）等が挙げられます。

さらにいえば、アクティブ・ラーニングは、決して「教室外での行動」を意味するものではありません。実際、「学生には、行動的なアクティビティーと認知的な学習要素の双方が必要」といわれます。この観点からは、教室での事前・事後授業の重要性を十分に認識して、その期間を含めたものがFSと考えるべきでしょう。

まず、現場に出る前の問題意識の醸成が、学生にとっての必然性の認識に、そしてやりがい、満足感につながります。また、事後のほうも、たとえば現場で自治体の方々に報告会をして終了、では不十分です。大学に戻った秋の授業で、そのプログラムに参加しなかった学生たちに聞かせる報告会をするとか、成果を記録して発表するイベントを行うなどの、事後学修が重要になるのです。その意味で、2018 年からは、大学祭の中で FS 動画コンテストも開催しました。つまり、さまざまな形で、現場で得た実践知の「普及」をはかることが大切なのです。海外FSも、この事前・事後授業を充実させないと「現場で見る」ことの深い意義が得られません。

さらに受け入れ自治体との関係については、受け入れ側にも相応のメリットが得られなければなりません。「先方へのサポート」という意識ではまだ不十分で、実り多い持続的な官学連携事業とするためには、真の意味での双方の win-win の関係の構築が必要です。たとえば、町おこしの実践として、本学学生がその町で起業をするとか、本学学生が自治体紹介動画を地元メディアと協力して制作する等の、一歩進んだ付加価値が追求されなければならないのです。

今後の展開—「つながるFS」から「ひろがるFS」へ

そして、武蔵野大学は、今後もFSの取り組みを続けます。すでに、①武蔵野大学SDGs宣言を踏まえて、「武蔵野SDGs認定FS」という、FSプログラムの中で SDGs適合型のものを認定するプランや、②TOKYO2020 で武蔵野大学は有明キャンパスをホストタウンハウスに提供するわけですが、この機会にホストタウンハウスボランティアなどをFSプログラムに組み入れるプランなどが検討されています。

さらに、「ひろがる FS」として、たとえば、これまでの教員主導のプログラムから、学生が自ら創るプログラムへと進化させることが考えられます。学生たちが課題を議論して、それを実体験し検証するプログラムを計画して実施し、さらにそれを動画等に記録してその実体験・検証結果を普及し、その上で問題解決の方策を議論し、それを自治体や社会に対して提言する—このような形態が、究極のFSとして想定されるのではないでしょうか。

そこでひとつ重要になるのは、過去にプログラムに参加した、上級生の経験です。先輩が後輩を教えるようになり、彼らが引率者補助の役割を果たせれば、職員の負担も減らせます。また海外学修に彼らのリーダーシップ研修を組み込むなどということも有益でしょう。

このように、武蔵野大学の5年間のFS経験は、さらに豊かな未来につながり、ひろがるものになる、またそうしなければならない、と強く思うところです。そしてこの FS の中に、何かイノベィティブな要素を大学教育に付加するという「付加価値」を探求し続けていくことが、今後の大きな目標となるでしょう。

学外学修（フィールド・スタディーズ）事業総括

学外学修導入の背景

武蔵野大学の建学の精神は、仏教の根本精神である四弘誓願（しぐぜいがん／ほとけのねがい）を基礎とする人格教育である（図１参照）。国際的仏教学者である学祖高楠順次郎博士は、「理想が高まるに従って人格が高まり、人格が高まるに従って高い理想が現出する」（高楠順次郎（１９２４）『生の実現としての仏教』大雄閣）と述べ、仏教の開祖である釈尊を理想の人格として仰ぎ、私たちもその理想に向かって、人格向上の歩みを進めることこそ人生の意義であると説いている。したがって、武蔵野大学の教育の目標は四弘誓願を基礎として人格向上をはかり、人格向上の実現によって釈尊の理想を具現化することである。

四弘誓願
しぐぜいがん / ほとけのねがい

いきとし生けるものが幸せになるために（度）
わたくしの「ひとりよがり」のこころをきよめ（断）
正しい道理をどこまでもきわめ（学）
生きがいのある楽しい平和の世界をうち立てたい（成）

訳：武蔵野女子大学 初代学長 山田龍城

図１　四弘誓願

本学は大正１３年（１９２４年）東京都中央区の本願寺築地別院（現在の築地本願寺）境内に、世界的な仏教学者である高楠順次郎博士によって浄土真宗本願寺派の宗門関係学校として設立された。前年の大正１２年９月１日には関東大震災が起こり、都心部はほぼ灰燼に帰し、本願寺築地別院も被災した。怪我人、病人が多く、日本赤十字社は境内に臨時病院を建て、約半年後に役目を終えたその建物を利用し、武蔵野女子学院が設立された。昭和４年（１９２９年）には現在武蔵野キャンパスがある西東京市新町に移転し、昭和４０年（１９６５年）に武蔵野女子大学が設立された。その後、平成９年（１９９７年）まで文学部のみの女子大学であったが、大学運営を教授会主導から理事会主導に切り替え、平成１０年（１９９８年）以降、次々に新たな学部や学科・大学院を設置し、平成１６年（２００４年）の全学部男女共学化、平成２４年（２０１２年）の有明キャンパスの開設など、大学改革を推進し総合大学へと発展してきた。令和元年（２０１９年）にはデータサイエンス学部・経営学部・経営学研究科・工学研究科が誕生し、１１学部１９学科１２大学院研究科及び通信教育部を擁することとなった。

また、建学の精神である「いきとし生けるものが幸せになるために」という仏の願いを今日的に具現化していくため、平成２８年４月より「世界の幸せをカタチにする。」（Creating Peace & Happiness for the World）という新ブランドステートメントを宣言した（図２参照）。武蔵野大学に集う学生・教員・職員・本学に関わりのあるすべての人々がこの願いを自らの願いとして感じ取り、その願いの実現のために知恵を開き合い、「響創力」を高め合い、「アクティブな知」を獲得し、手を携えて世界の直面する諸課題の解決に取り組むことを目指している。

図2　「世界の幸せをカタチにする。」

教育改革推進の取組みでは、平成２０年（２００８年）４月より全学の各委員会を結集し、カリキュラムの根本的な教育改革に着手した。「学士課程および武蔵野学士力の構築に向かって」というテーマのもと、翌年から学長直轄の審議・検討機関であるカリキュラム改革委員会を組織化。教養と専門の学びの連続性として「学士課程」を定義し、平成２２年にディプロマ・ポリシーを重視した新たなカリキュラムを全学的に策定した。これにより全学初年次教育基礎課程「武蔵野 BASIS」がスタートし、全学部全学科横断型授業を展開、グループワーク及びファシリテーションを積極的に導入した。平成２５年には主体的な学びを促進するため、武蔵野ラーニングスクエアを開設し、授業外の学び、グループワークの場としての活用が始まった。翌年にはアクティブ・ラーニングへの授業改善、質的向上に向けた様々な試行を目的とした授業改善トライアルが開始され、学修時間の実質的な増加と確保を目指したコアカリキュラム化、シラバスや CAP 制の見直し等の諸施策が実施された。平成２７年にはディプロマ・ポリシー（学位授与方針、以下 DP）として「『アクティブな知』を獲得し、創造的に思考・表現する力を備えて、世界の課題に立ち向かう」人材の養成を掲げ、３ポリシーの見直しを行った。更に、教育効果の最大化を求め、４学期制（３学部及び全学部１年生）を導入するとともに、教育方法の更なる高次化・独自性を目的として、FD 委員会を組織化した。平成２８年度には学修の質向上とギャップイヤーの活用のため４学期制を全学導入し、翌年には DP の到達度を測るための学科ルーブリックを３、４年次に導入した。平成３０年度には入口から出口まできめ細やかな教育を行うため全学的に「初年次ゼミ」を導入。また、全学アセスメント・ポリシーを設定し、翌年には学科アセスメント・ポリシーを設定した。更に、平成３０年度は各学科が養成するべき人材像と出口の目標を明確にした学科ブランドビジョンを策定した。その後、PDCA サイクルに基づいて検証を進めながら教育の質向上に向け、全学的な教育改革を推進している。

学外学修事業の取組みは、平成２３年（２０１１年）３月１１日に発生した東日本大震災の後、仙台市内の本願寺仙台別院を拠点とした学生・教職員によるボランティア活動に端を発する。このボランティア活動は宮城県石巻市出身の職員の働きかけで始まり、その後、震災復興支援活動の意義や精神性、取組内容を教育課程に取り込み、全国各地域と連携することで、本学の建学の精神を基盤にした学外学修プログラム「フィールド・スタディーズ（以下、FS）」が誕生した。これは、大正１２年（１９２３年）の関東大震災後に本願寺築地別院の境内に武蔵野女子学院が創設された歴史を思い起こさせる。震災を契機に新たな胎動を生み出した歴史と、平成における震災復興支援活動は共に無関係ではなく、このボランティア活動に従事した学生の変化や姿勢、態度、表情の変化が、現在のフィールド・スタディーズ推進の原動力となっている。

震災の翌年平成２４年（２０１２年）からは主体的な学修を促す具体的な教育方法として、産学連携教育及び学外での体験教育をカリキュラムに積極的に導入した。「キャリアデザイン～人生の歩き方～」の授業では、１年生全員1,５５１名に対し、国内外フィールド・ワークやボランティアなどの１週間程度の短期の体験教育を教職協働で実施した。３、４年生には産官学連携ゼミとして１０の企業、自治体、団体と連携した１ヶ月程度の長期インターンシップ実習を行い、日常的に社会と関わる活動がいくつも生まれ、社会の現場そのものが学びや研究の場となっていった。平成２５年には１年生1,５８３名（１５プログラム）、平成２６年には１年生1,７９１名（１９プログラム）が海外研修やボランティア活動、企業訪問等を行い、キャンパスの外で起こっている社会の実際を体感し、社会の課題を自分ごととしていった。全学の教職員を巻き込んだこの教育改革推進は、学内に改革意識を加速度的に浸透させた。そして、平成２７年（２０１５年）、文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅣ長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」に採択された。この年は、今まで限られた地域で実施していた学外学修を、北は北海道東川町、南は鹿児島県徳之島へと、全国にその活動の範囲を拡げ、学内の教職協働による組織運営のもと、スタディケースとして１週間を目処とした短期の FS プログラムを全国的に展開した（２８プログラム、１,８５９名）。これにより学外学修のノウハウとリスク管理をはじめとした運営のスキルを組織的に徐々に学んでいった。平成２８年度には学修の質向上と学外学修の推進のため４学期制を導入し、夏季休暇だけでなく２学期にも学外学修が実施できる体制となった。そして遂に平成２９年度、１年次において実働２０日間以上の学外学修期間を有する長期学外学修プログラム（長期 FS）が全学的に本格稼働し、宿泊型と通学型の２つのタイプを揃えた３４の長期 FS プログラムを展開した。平成３０年度については、長期 FS は６１プログラム（参加学生２８１名）、学外学修期間が実働５日程度の短期FSは３６プログラム（参加学生１,７９４名）実施し、合計９７プログラム２,０７５名の学生が学外で学修した。

このように、本学の学外学修事業は、建学の精神と中央教育審議会答申に基づいた本学全体の教育改革の中で生まれてきた。中央審議会答申に基づく「学事暦の多様化とギャップイヤーを活用した学外学修プログラムの推進に向けて（意見のまとめ）」（平成２６年５月２９日学事暦の多様化とギャップタームに関する検討会議）には次のように述べられている。

「何のために学ぶのか」

この答えを学生自身が見つけていくためには、できるだけ早いタイミングで、世界や社会の現実の中に飛び込み、異なる価値観にぶつかる社会体験を通じて、心身ともに鍛えられ、自らの殻を幾度も脱皮することによって、広い視野と高い志を養い、そして主体的な学びのスイッチを入れていく過程が重要となる。また、一定の専門的知識を修めた段階においても、現実の世界を経験して、学問の有用性を確認するとともに、社会性を身に付け、異文化への理解と寛容の態度を養うことが重要である。

この長期学外学修プログラムを通じて、日本の学生、世界の若者たちが互いに社会の現実を体感し、世界の喜びと痛みを感じ合い、知恵を開き合い、世界の幸せをカタチにする第一歩となることを強く願っている。

学外学修事業の狙いについて

1. 概要

本学の学外学修事業は、平成27年（2015年）に文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅣ長期学外学修プログ

ラム（ギャップイヤー）」に採択された。AP 事業の目的は、社会のパラダイム・シフトに対応する 3 つの人材、①自発自燃型人材、②グローバル人材、③地域貢献型人材を育成することであった。そのため、全学的に 4 学期制を導入し、アクティブ・ラーニングの軸としてFSを学士教育課程に配置した。FSは第2学期と夏季休暇を中心に、学生の能力や志向等に応じて1～7か月、学外でフィールド・ワークや地域活性化支援等の活動を行い、学生が自ら課題を見つけ、その解決に向け果敢に挑戦する本学独自の実習型教育プログラムである。更に、2年次以降は、1年次での学びや能力を昇華させるため、メインメジャー及びサブメジャー（学部横断型ゼミ）による専門的な長期学外学修プログラムも配置している。これにより、体系的かつ実質的な教養と専門の連続した学びを実現する。なお、FS では地方創生支援活動やオリパラ支援活動等、活動先への貢献を到達目標の一つに設定している取組みが多く、活動先に根付いた特有の文化や産業を学び、それらの継承や発展などを通じて地方の課題理解や地域の活性化に貢献することも大切な目標の一つとしている。

2. 学外学修事業の狙い

現在の社会では人工知能（AI）、ビッグデータ、Internet of Things（IoT）、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられ、社会の在り方そのものが劇的に変化している。また、AI やロボットの発達により、定型的業務や数値的に表現可能なある程度の知的業務は代替可能になると考えられ、多くの仕事が自動化されることが予想されている。今後求められる人材とは、これらのパラダイム・シフトに対応でき、知識や技能、思考力・判断力・表現力を基礎として、自己の主体性を軸に、世界や地域の課題を発見し、答えを導き出し、解決に向け果敢に行動できる人々であろう。更に、人と人との繋がりや濃厚なコミュニケーションから生み出される、いわば「人」だからこそ出来る新たなアイディアやイノベーションを引き起こす力、協働作業により何かを創造する力等も必要不可欠となるだろう。

本学はDPとして「アクティブな知の獲得」と「思考力・表現力を備えて世界の課題に立ち向かう」人材の育成を掲げており、1年次に全員必修（薬学部除く）で行う 1 年生 FS はそのための重要なファースト・ステップである。学生たちは、事前学修で活動先（社会・地域）の背景や課題を学生自ら学修し、自分ごととすることで「主体的な学修態度」を養う。そして、実習で国内外でのフィールド・ワークや地域活性化支援、復興支援、自治体でのインターンシップ、農業体験等を通じて、様々なことを体験・経験し帰ってくる。事後学修により、それらの体験・経験が「学びへのきっかけ」となることに気づかせる。大学生活におけるあらゆる機会には「学びへのきっかけ」が潜んでおり、全ての講義に「気づき」と「繋がり」があることを体感させたい。そうして、それらの学びを専門の「学び」に繋げ、更に将来のキャリア選択に繋げることを発見させる。加えて、事後学修では体験・経験の成果や、課題に対する解決案を言語化、映像化し、活動先等に発表することで、多様な人々のなかで、自らの考えを表現・発信する力を養っていく。このような充実した事前事後学修と実習により、その後の専門の学びを修得する土台を養っていく。そして、これらの取組みを受入先の協力を得ながら担当教員が主体的に行うことで、プログラムの質を保証していく。

更に、FS は１年次のみで終わるのではなく、２年次以降もより深く学べるように体系的な学びの機会を用意している。学生たちは、学びの基盤となる１年生 FS を履修し、２年次以上の発展的な FS では、自らの専門の学びを活用して社会の課題解決を目指すメインメジャー FS や、自らの学科の学びとは異なる専門分野を深く学び、社会の課題解決に挑むサブメジャー FS(学部横断型ゼミ）を履修することができる。発展的なFSでは、学外での他者との協働を通して、社会の喜びや痛みを自分ごととし、課題を発見していく。そして、専門の学びを深め、その学びを通じて仲間と協働し、個性に応じたリーダーシップを発揮しながら課題解決案を提示していく。また、本学のブランドステートメント「世界の幸せをカタチにする。」を実現するために、各学科が掲げたSDGs（持続可能な開発目標）の指標も目標とし、地球上の誰一人として取り残さないというSDGsの理念に貢献していく。こうしたFSの取組みを通して社会課題に挑戦することで、常に高感度のアンテナを張り、自らアクティブに学修ができ、世界の幸せをカタチにする Happiness Creator を育成していきたい。

なお、本学のFSの取り組みによる学生の成長イメージは、図３の通り、専門の学びを通した概念化やゼミの実践によって形成される。

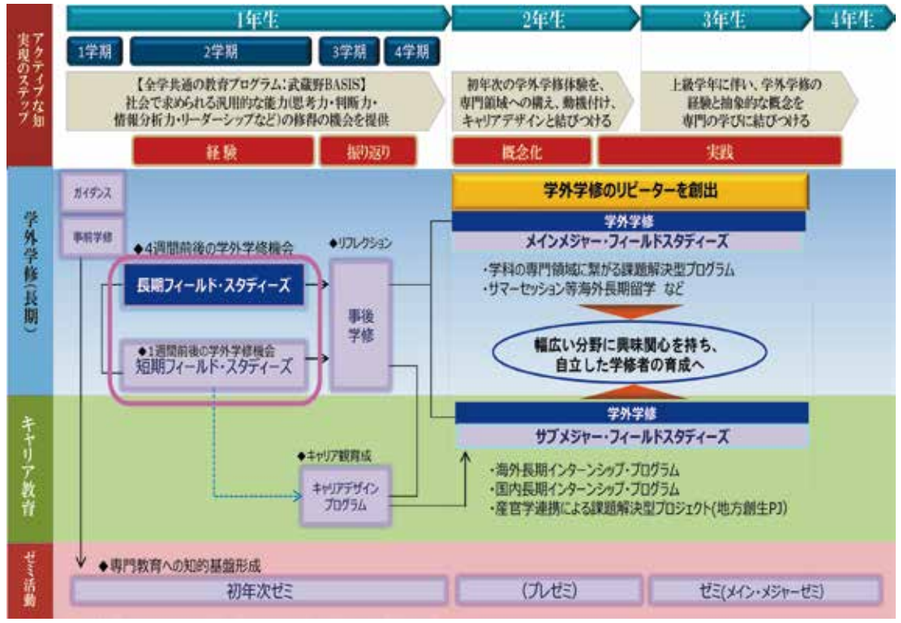


図3 「アクティブな知」の獲得に向けた成長イメージ

3. 推進体制について

本事業の推進体制については、学長直轄の組織である「教育改革推進会議」とその小委員会、そして、FSの運用全体を統括する「学外学修推進センター運営委員会」を軸に推進した。教育改革推進会議では平成26年度より「自立的学習者育成」「アクティブな学び」の具現化を目指し、トライアル授業の運営支援を展開した。また、平成30年度より学外学修プログラム受講者の成績推移や学生生活実態調査等から、成長実感等について検証した。平成29年度より設置された FS 小委員会では、平成29年度は年6回、平成30年度は年2回開催され、FS 事業全体に係る課題や令和元年度以降の方針等を議論した。また、平成30年1月に学外学修推進センターを設置し、質・量ともに充実した FS の企画と、プログラムの安定的且つ発展的な実施を実現する体制を整備した。センターでは学外学修推進センター運営委員会を組織し、全学部より委員を選出した。平成30年度は5回開催し、FS 運営に係る課題やその対策、危機管理体制等を議論し、補助金終了後も継続的に運営できる体制を強化した。更に、令和元年度も年5回開催し、当該年度の学外学修プログラムの結果を検証しながら、次年度に向けた学外学修プログラムの質向上と安定運営を図っている（推進体制は図4参照）。

各学外学修プログラムの質保証については、①アンケート調査によるプログラム検証、②教員へのFD、③受入先とのWIN-WIN の関係構築、を重視している。まず、①アンケート調査によるプログラムの評価・検証については、主に二つの方法を採用している。一つが学生に事前と事後でアンケート調査を行い、本学のDPに基づいた成長指標等の認識の変化を比較検証する方法であり、もう一つが事後で学生、受入先、担当教員にアンケート調査を行い、後輩への推奨度や自由記述のコメントからプログラムを検証するものである。前者は主に学生の成長実感の程度を問い、後者は違った立場からの生の言葉（成果や課題に対する自由記述）からプログラムの質を検証することを目的としている。令和元年度については、1年生 FS は約80の学外学修プログラムを実施したが、これらの検証結果をもとに次年度プログラムの選定及び改善を行い、質の高い学外学修プログラムを学生に提供していく。次に、②教員への FD については、毎年、FS教員説明会やFDを兼ねたFSシンポジウム等を開催している。FSの意味や狙い、各プログラムの事例紹介等を通して、単に実習を行うだけではなく、事前事後学修を通して実習の意義を明確にすることや、主体的な学びの態度を涵養すること、専門の学びの有用性への気づきを促進すること等の重要性を伝えている。更に、新規プログラム構築においては、教員主体の企画とし、到達目標を明確にしたプログラム構築を推進している。併せて、今後は、過去にプログラムに参加した上級生をSA・TAの引率補助として活用し、プログラムの企画・改善においてその上級生のアイディアを取り込むことで学生本位のプログラム構築を目指している。最後に、③受入先とのWIN-WIN の関係構築については、学生がただ単に実習をするだけでは受入先の負担感が増していく。受入先のニーズをしっかり聞き、受入先やその周辺地域に少しでも貢献できるように、事後アンケート調査と対話を重ねてプログラムを改善している。互いのニーズにあったプログラムに毎年改善することで、より質の高い教育プログラムを学生に提供することが可能となる。その他、毎年、外部評価として有識者会議を開催し、学外学修に関する有識者や受入先の代表者をお招きして学外学修事業の振り返りと課題抽出、対応検討等を行っている。

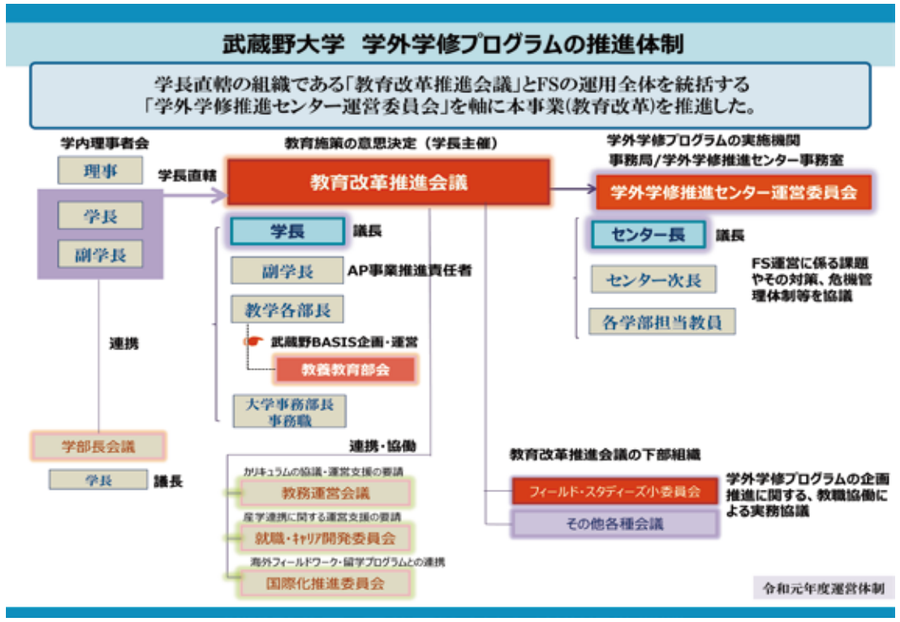


図4　学外学修プログラムの推進体制

4. 令和元年度 FS プログラムについて

平成２９年度より、１年次において実働２０日間以上の学外学修期間を有する長期学外学修プログラム（長期FS）が全学的に本格稼働し、宿泊型と通学型の２つのタイプを揃えた３４の長期 FS プログラムを展開した。平成３０年度には、１年生 FS において、長期 FS は６１プログラム（参加学生２８１名）、学外学修期間が実働５日程度の短期 FS は３６プログラム（参加学生１,７９４名）実施し、合計９７プログラム２,０７５名の学生が学外で学修した。また、２年次以降に実施するメインメジャー FS では６プログラム（参加学生６５名）、サブメジャー FSでは１３プログラム（参加学生６９名）が学修した。そして、令和元年度については､1 年生FSは長期 FSが４０プログラム（参加学生２６０名）、短期 FS が３８プログラム（参加学生１,８３９名）を実施し、２年次以降のメインメジャー FS は 2 プログラム（参加学生２１７名）、サブメジャー FS は９プログラム（参加学生８９名）を実施した（プログラムは実施一覧参照）。

【令和元年度】フィールド・スタディーズ（長期・1 年生必修）実施一覧 ①

国内外	タイプ	プログラム名	概　　要	期　間
海外	宿泊	ゲルフ大学（カナダ）（GLP プログラム）	治安の良さや美しい街並みが特徴のゲルフ市で、大自然に囲まれたのどかな環境の中、英語の 5 技能 (Reading, Writing, Grammar, Speaking, Listening) をバランス良く学ぶプログラムです。	8/10 ～ 9/8
		Summer Study at Concordia University	TOEFL や TOEIC 関連の書籍の著者として有名な、村川久子教授が企画する短期研修プログラムです。語学研修だけでなく、大学での実習や現地学生とのディスカッション、専門的な授業の聴講、シアトル市内見学等、盛りだくさんの内容を割安な価格で提供します。	8/21 ～ 9/19
		Summer Study at the University of Texas at Austin	2018 年 THE 世界大学ランキング 49 位のテキサス大学オースティン校と、その卒業生でもある村川久子教授が企画する短期研修プログラムです。語学研修、大学での実習、現地学生とのディスカッション、専門的な授業の聴講、サンアントニオ市内見学等盛りだくさんの内容を割安な価格で提供します。	7/11 ～ 8/11
		ブッダ慈悲の道 （インド【コルカタ、ヴァラナシ、ラージギル、ダージリン】、ミャンマー、タイ）	インド・ミャンマー・タイの仏蹟をめぐり、ブッダの思想のひろがりと人々の信仰を感得します。	8/20 ～ 9/10
		ディーキン大学（豪州）（GLP プログラム）	豪州ビクトリア州ににあるディーキン大学での留学生向けの英語の集中プログラム。定評のある実践的な英語研修では、英語レベルが違う様々な国の学生が集まります。また現地学生とも触れ合う機会の多い Workshop 等を実施します。	8/17 ～ 9/14
		語学留学プログラム（イギリス） グロスターシャー大学	イギリス国内で最も環境にやさしい大学として有名なグロスターシャー大学の語学センターで Reading、Writing、Speaking、Listening の 4 技能に加え、語彙力、発音を磨く語学研修です。語学を学びながら、イギリスの文化や自然を体感することができます。	7/14 ～ 9/8
国内	宿泊	秋田県鹿角市 商店街元気 UP &かづの版 DMO 体験プロジェクト ―かづの暮らしで学ぶ地方活性化―	北東北の中心に位置する十和田八幡平国立公園に抱かれ、2つのユネスコ無形文化遺産を有する歴史と伝統の息づく鹿角市において、主力産業の一つである観光業を中心に、地域の魅力を発信しながら観光誘客に結びつけるための戦略や、市の顔である商店街の振興を一体的にとらえた鹿角産業の活性化策について学びます。	8/8 ～ 9/6
		はばたけ秋田県上小阿仁村! 人口 2,300 人の小さな村が発信する アートプロジェクト ～人口の 4 割が 70 歳以上の村～	少子高齢化の進む上小阿仁村で、今年 7 年目を迎える芸術祭「かみこあにプロジェクト」の運営補助やこの土地で生活する高齢者介護のお手伝いをメインに活動します。情報過多な都会の日常で、物事の本質にふれられない感覚から実感につながる活動を通じ、自分軸を移しています。人がコントロールできない自然や、その土地に根付いた伝統など、様々な角度から村を知り、住民と協働の村づくりを学ぶことで、上小阿仁村の魅力を発信できるような地域活性化の提言を行います。	8/9 ～ 9/9
		宮城県石巻市 にじいろクレヨン 子どもの居場所づくり	石巻市の民設の児童館、移動児童館で子どもの居場所づくり、遊び場作りのサポートをしていただきます。0歳児から中学生までで特に小学生が多く集います。子どもたちと共に思いっきり遊んだり、話を聴いて寄り添ったり、子どもたちが伸び伸び過ごせる居場所をつくります。成果として、被災地の社会課題とそれに関わるNPOの意義と取り組みを知り、社会とNPOの関係性を学ぶことができます。（2 学期）	7/11 ～ 8/7
		宮城県石巻市牡鹿半島 ローカルリンクカレッジ体験プログラム	・地域資源を活用した地域づくりの体験 ・地域と繋がり、地域資源利活用や地域課題解決等に学生自身の専門性を活かして挑戦して経験を得る「ローカルリンクカレッジ」を体験 ・体験できること：空き家改修などの場づくり、モノづくり、環境保全活動など、様々な選択肢の中から自ら考えて期間中の達成目標を定め、実行します。（2 学期）	7/15 ～ 8/7
		宮城県石巻市牡鹿半島 ローカルリンクカレッジ体験プログラム	・地域資源を活用した地域づくりの体験 ・地域と繋がり、地域資源利活用や地域課題解決等に学生自身の専門性を活かして挑戦して経験を得る「ローカルリンクカレッジ」を体験 ・体験できること：空き家改修などの場づくり、モノづくり、環境保全活動など、様々な選択肢の中から自ら考えて期間中の達成目標を定め、実行します。（夏休み）	8/26 ～ 9/18
		福島県猪苗代町レイクサイド磐光	ホテル等でのインターンシップを通し地域活性化を目指します。ホテルのフロント業務などスタッフ業務、売店においての商品販売業務、施設清掃業務や猪苗代湖湖畔のレンタル遊具の貸出業務、更に隣接するカフェの運営業務などホテル業全般の業務を通して、サービスを提供する側からの観光業を体験します。その他、地域の団体や住民との交流や農業体験等も行います。	8/8 ～ 9/4

【令和元年度】フィールド・スタディーズ（長期・1 年生必修）実施一覧 ②

国内外	タイプ	プログラム名	概　　要	期　間
国内	宿泊	1時間で行ける離島 東京都八丈島で離島生活体験	島内の保育所２箇所でのインターンシップ、および観光協会（加盟事業所含む）での業務補助を行います。八丈島の環境・観光・教育について学びます。	8/16 ～ 9/14
		山梨県西桂町 地域福祉推進プロジェクト	少子高齢化が進む人口約 4,000 人の小さな町で、ヒアリング調査などの手法によって地域に住む住民のニーズを把握し、地域の課題解決に向けて住民の力が発揮されるように働きかけます。ヒアリング調査では、アクションリサーチ（フォトボイス等）の手法を活用して取り組みます。この活動を通して、人と人とのつながりを構築し、誰もが暮らしやすいまちづくりを目指します。	8/13 ～ 9/9
		長野県長野市 JAながの農業経済・流通体験インターン	ながの農花では小菊の栽培・収穫・出荷を行います。アグリながぬま農産物直売所では農産物の販売 (製品管理・販売) をします。ながの平フルーツセンターでは農産物の集出荷をします。農作業・収穫・出荷・販売までの流れを体験しながら、日本の農業の置かれている現状や、今後について考えます。	8/9 ～ 9/6
		福岡県大川市 モノ作りの魅力発信プロジェクト	木工・家具のまち福岡県大川市で、木工業の地元企業でインターンシップを行います。新しく売り出した「ねこ家具」をはじめ、大川市の製品やモノ作りの魅力を体験し、SNS 等で発信してもらいます。その他、市内各所の撮影やイベントのお手伝い等を通じ、モノ作りのまち大川の魅力をについて学びます。	8/19 ～ 9/13
		鹿児島県徳之島町 永吉ファームインターンシップ（畜産）	東京からおよそ 1,300 ㎞南にある「徳之島」において、1 ヶ月の長期にわたり、徳之島を代表する畜産農家・永吉ファームでインターンシップを行います。牛肉がどのような過程で私たちの食卓に来ているのか、文字どおり「いただく」ということの意味などを学びます。綺麗な海と、心温かい島の人たちに囲まれ、思い出深い実習ができます。	8/19 ～ 9/9
国内	通学	江東区役所（江東区文化コミュニティ財団） 文化事業インターンシップ （中川船番所資料館・江東公会堂・ 亀戸文化センター）	公益財団法人江東区文化コミュニティ財団の各施設（中川船番所資料館、江東公会堂・亀戸文化センター）での業務補助、接客等を行います。また、開催イベント・講座等の準備作業、イベント開催時・終了時における業務等、配布物準備、アンケート集計等の事務作業、その他、窓口・電話での接客など、イベント・講座等の運営補助を行います。	中川船番所資料館：7/11～ 8/6 江東公会堂：7/11 ～ 8/7 亀戸文化センター：7/11 ～ 8/7 のうち 20 日間
		江東区児童館インターンシップ （3 児童館：東雲児童館・ 亀戸第三児童館・南砂児童館）	江東区内の各文化施設で来館者対応や日常業務補助、イベント運営補助等を行います。	東雲児童館：7/22 ～ 8/30 亀戸第三児童館：7/11 ～ 8/8 南砂児童館：7/12 ～ 8/10 のうち 20 日間
		江東区児童館インターンシップ （4 児童館：江東区亀戸児童館・森下 児童館・亀戸第二児童館・大島児童館）	児童館で来館者対応や日常業務補助、イベント運営補助等を行います。	亀戸児童館：8/8 ～ 9/19 森下児童館：8/22 ～ 9/19 亀戸第二児童館：8/8 ～ 9/19 大島児童館：8/8 ～ 9/3
		吉祥寺美術館インターンシップ	展覧会の準備及び運営の補助業務を行います。その他一般事務の補助業務を行います。インターンシップの体験を踏まえ、効果的な広報について検討します。	7/11 ～ 8/9
		武蔵野市子ども協会 子育て支援施設・親子ひろば支援者実習	ひろばで利用者親子との関わり、館内準備・整理・清掃・受付補佐・片付け、講座の準備・補助、作業（工作材料の作成、補充、手芸、遊具作成など）、簡単な事務補助、プール遊びの見守りの補助を行います。（2 学期）	7/11 ～ 7/30
		武蔵野市子ども協会 子育て支援施設・親子ひろば支援者実習	ひろばで利用者親子との関わり、館内準備・整理・清掃・受付補佐・片付け、講座の準備・補助、作業（工作材料の作成、補充、手芸、遊具作成など）、簡単な事務補助、プール遊びの見守りの補助を行います。（夏休み）	9/4 ～ 9/17
		小金井市観光まちおこし協会 インターンシップ （まちと遊びまちから学ぶインターンシップ）	商店街事業の運営補助を行います。商店街の夏まつりイベントの運営に参加し、商店主やボランティアとの交流でまちの今を体験します。協会 HP や SNS による地域情報受発信の運営補助を行います。協会の HP は地域情報の発信基地です。現場取材やネットラジオでまちの面白楽しい人々と交流をします。	7/11 ～ 8/7
		小金井市地域の寄り合い所 また明日	赤ちゃんからお年寄りまで、小中高生や地域の人も立ち寄る「また明日」にて地域の人々と交流します。乳幼児のお世話や、小中学生の話し相手、勉強の見守り、高齢者に寄り添いながらサポート業務を行います。（2 学期）	7/11 ～ 8/8
		小金井市地域の寄り合い所 また明日	赤ちゃんからお年寄りまで、小中高生や地域の人も立ち寄る「また明日」にて地域の人々と交流します。乳幼児のお世話や、小中学生の話し相手、勉強の見守り、高齢者に寄り添いながらサポート業務を行います。（夏休み）	8/19 ～ 9/13
		小金井市貫井北センター （NPO 法人市民の図書館・ 公民館こがねい）インターンシップ	図書館・公民館でのインターンシップです。日常業務やイベントの運営補助を行います。 NPO だからこそできる運営を体験します。	7/21 ～ 8/10
		あきる野市役所 図書館インターンシップ	市民が利用する図書館でのインタープログラムです。図書館の通常業務の他、おはなし会などのイベント補助を行います。普段見ることのできない図書館の内側の業務に携わることができます。将来、司書資格取得や図書館勤務を希望している方を対象にしたプログラムです。	7/11 ～ 8/7
		東京特別区人事厚生事務組合／ 特別区協議会 （東京23区特別区を知ってもらうプログラム）	特別区協議会でのインターンシップを行います。特別区協議会（事業部）では、「情報」「研究」「教育」をキーワードに特別区の自治の発展につくす事業を行っています。三つの分野を全て体験することを前提に、東京大都市地域の歴史的な資料、古地図の目録の作成、行政資料を検索するための簡単なガイドの作成、研究成果書 (特別区制度の紹介) の整理、中高校生向けの特別区制度の紹介教材の作成、一般市民向け特別区の自治に関する講座・講演会・自治体間連携シンポジウムの運営等の補助業務を行います。東京 23 区施設 (国会、都庁、各区関連施設) 見学も行います。	7/11 ～ 8/8
		西東京市役所　インターンシップ （サマー子ども教室）	定員を超過した学童クラブエリアの小学校にて、昨年に引き続き小学校内の特別教室にて、サマー子ども教室を実施します。対象は実施小学校全児童を対象に、夏の長期休業期間中の居場所づくりを目的としてカリキュラムを組み、体験学習を中心に 1 クール約 30 名で教室形式で実施します。事業運営に関しては、当該小学校、地域団体、放課後子供教室運営団体、協力企業、市の出前講座、商工会、市内高校とのボランティア、社会教育課、児童青少年課等の連携を図って運営します。	7/29 ～ 8/30

【令和元年度】フィールド・スタディーズ（長期・1年生必修）実施一覧 ③

国内外	タイプ	プログラム名	概　　要	期　間
国内	通学	西東京市役所　インターンシップ （児童館キャンプ、児童館ランチタイム）	①長期休暇の夏休み、家庭で孤食になる子どもたちのための、児童館ランチタイム事業。知らないお友達とも楽しく、美味しくランチが取れるように参加者同士のコミュニケーションを図ります。また、ランチだけでなく、児童館事業にも関わり、児童指導も学びます。 ②2泊3日の児童館キャンプに指導員として同行し、子どもの集団をまとめ、生活体験・野外体験の補助を行います。	7/22 ～ 8/30
		エリアプロモーション入門プログラム ［経営学科生優先］	このプログラムでは、特定エリアをプロモーションするための web ページの作成を行います。実際に学外に出て取材を行うフィールドワークのほか、web ページ作成およびプロモーション戦略の基礎的な知識も学びます。経営学科優先のプログラムです。	7/11 ～ 8/7
		武蔵野市福祉公社 高齢者福祉支援インターンシップ	社会活動センターの各種講座の運営を中心に、在宅介護・地域包括支援センター、住宅改修・福祉用具相談支援センター、デイサービスセンター、権利擁護センター、法人本部等の実務補助を行います。	8/19 ～ 9/13
		小金井市役所　インターンシップ	ほどよく都会・ほどよく田舎の小金井市で、市役所の仕事を体験します。地方公務員を志望している方を対象としています。	8/19 ～ 9/13
		大成建設　インターンシップ	建築デザイン学科対象のプログラムです。国内最大手のゼネコンである大成建設の都内の工事現場において様々な取り組みを見学・体験します。現場担当者の指導の基、毎朝朝礼とラジオ体操から始まり、コンクリート打設見学、タワークレーン見学、配筋見学などを行うことになります。様々な職能を有する専門家集団が活動する建設工事現場での業務は、モノづくりを実体験出来、多くの気づきや智恵となります。	8/22 ～ 9/19
		NPO 法人　居場所コム （みんなの居場所づくり - コミュニティの醸成）	地域の高齢者コミュニティーや育児コミュニティーの支援を行う団体での活動です。開設 5 周年の記念誌発行に携わり、活動資料の整理、まとめ、資料作成等を行います。カフェ、布雑巾つくり、昔あそび、ビーズ教室、キッチン教室などの様々な講座の準備、受付などのお手伝いをし、地域に暮らす子供からおじいちゃん、おばあちゃんとの交流活動の補助を行います。 みんなの居場所 「こまじいのうち」と「こまびよのおうち」は地域の人たち、高齢者から赤ちゃんまでが、楽しい時間を過ごす場所になっています。地域の人間関係が希薄化していく中で、地域の人たちの顔が見える居場所として様々な仕掛けがしてあります。	8/19 ～ 9/18
		千川福祉会　社会福祉施設 サポートインターンシップ	社会福祉法人　武蔵野千川福祉会 （千川作業所 / 八幡作業所 / ワークイン関前 / 千川さくらんぼクラブ） 主に知的障害のある成人の方への就労継続支援 B 型事業（八幡作業所、ワークイン関前）、または生活介護事業（千川作業所）における作業活動支援（補助）を行います。知的障害のある児童・生徒の放課後等デイサービス事業所（千川さくらんぼクラブ）での活動支援（補助）。	8/8 ～ 9/19
		あきる野市役所 学童クラブインターンシップ	あきる野市の学童クラブにおける活動を行います。若竹学童クラブ・草花学童クラブを予定しています。教員志望の方や、小学生の成長を支える仕事に興味のある方を対象にしたプログラムです。	8/8 ～ 8/31
		作陶における伝統の創造	陶芸家 伊藤麻沙人先生の工房で、直接指導を受けながら、陶器を製作します。また、伊藤先生の案内により美術館で歴史的名品の鑑賞を行います。本学小川桂一郎教授（英国王立化学会フェロー）による陶芸の化学についての講義も受講します。この体験と学修を通して、自らの手でものを作り出す喜びを知るとともに、本物を見分ける力を養います。（2 学期）	7/15、16、18、19、29、30 8/1、2、4
		作陶における伝統の創造	陶芸家 伊藤麻沙人先生の工房で、直接指導を受けながら、陶器を製作します。また、伊藤先生の案内により美術館で歴史的名品の鑑賞を行います。本学小川桂一郎教授（英国王立化学会フェロー）による陶芸の化学についての講義も受講します。この体験と学修を通して、自らの手でものを作り出す喜びを知るとともに、本物を見分ける力を養います。（夏休み）	8/11、12、27、28、 9/8、9、11、12、14

【令和元年度】フィールド・スタディーズ（短期・1年生必修）実施一覧 ①

国内外	タイプ	プログラム名	概　　要	期　間
海外	宿泊	CANADA・EDMONTON（オーロラ） （環境保護森林再生とサスティナブル・ディベロップメント）（カナダ）	カナダ国立森林研究所などの施設訪問、国立自然公園の野外実習、オイルサンド（油砂）精製施設見学、オーロラ鑑賞などを実施します。	9/10 ～ 9/17
		USA Los Angeles （教育研修） （アメリカ）	公立小学校、アフタースクール、NPO こどもセンター、小児総合病院、幼稚園、カリフォルニア・サイエンスセンター訪問、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校での学生交流、キャンパスツアー、日本人教育学部教授からの講演などを実施します。	9/10 ～ 9/16
		USA Los Angeles （グローバル・ビジネス研修）（アメリカ）	ビジネス講演会、企業見学、エスニックタウン訪問、国際学生フォーラム、南カリフォルニア大学見学、アメリカ在住ビジネスパーソンの講演、ロス在住日本人ビジネスパーソンとともに就職を考えるセミナーなどを実施します。	8/29 ～ 9/4
		USA Los Angeles （医療・福祉・薬学施設視察研修） （アメリカ）	医療施設見学、高齢者施設見学と施設利用者との交流、アメリカ在住の日本人看護師と日本人心理カウンセラーの講演、アメリカで活躍している日本人医療従事者からの業界最前線のお話、アメリカの学生と交流などを実施します。	9/2 ～ 9/8
		バイリンガルの専門家と一緒に アメリカ現地工場視察	安全管理の専門のバイリンガルの研究者と供に、観光旅行ではアクセスできないアメリカの工場や企業の “裏側” を視察し、本では学べないアメリカビジネスの生の現場を知るプログラムです。現地でのコミュニケーションは基本的に日本語で行う予定なので、英語に自信がない学生も、本プログラムに参加することができます。	7/23 ～ 7/29

【令和元年度】フィールド・スタディーズ（短期・1年生必修）実施一覧 ②

国内外	タイプ	プログラム名	概　　要	期　間
海外	宿泊	世界を牽引する IT 産業都市上海の今	中国の経済を牽引する都市・上海は、古くから西欧の資本が入りその賑やか振りで魔都上海と呼ばれ、常に中国の窓口となってきました。本研修では、普通語（北京語）以外に英語や上海語など多言語が飛び交う独特な文化を織り成す上海を肌で触れていただきます。西洋と中華の異文化融合、新旧の共存、グローバルとローカルが結びついた上海最新ビジネスについて学びます。大学・企業を訪問し、グローバル化が進む中で、新しいビジネスになっていくエネルギーや国際人としての在り方、自国の文化をどのように発信していくかを学ぶきっかけにしていただきたいと考えています。	8/21 ～ 8/25
		台湾を知る	歴史的建造物の訪問、台北周辺のウォーキングツアー、現地の方のお話、台湾料理等の体験を通して台湾の歴史や文化、日本と台湾の関係等を学びます。	8/19 ～ 8/23 8/26 ～ 8/30
		バンコク・きらめく仏塔の都	近代都市でありながら、数多くの世界有数の寺院を抱える、タイの首都バンコクを中心に、きらめく仏塔をめぐります。世界遺産であるアユタヤ遺跡なども巡りながら、仏教思想について学びます。	9/14 ～ 9/19
		オリンピックのスペシャリストと行く 古代ギリシャ4大祭典競技の遺跡巡り	オリンピック研究のスペシャリストと一緒に古代ギリシャの4大祭典競技の遺跡を巡り、古代から近代オリンピックの歴史の流れを視察する旅です。古代オリンピアやデルフィなどの遺跡の他、アテネの第1回近代オリンピック会場「パナシナイコ・スタディアム」や世界遺産「パルテノン神殿」、古代ギリシャの文化に粋を集めた「アテネ考古学博物館」なども訪れます。古代オリンピックと近代オリンピックの思想や歴史を学び、東京 2020 大会に向けてオリンピックの根本を学ぶプログラムです。	9/7 ～ 9/13
国内	宿泊	北海道東川町役場 地方行政フィールドワーク	34 年前から写真文化を核とした町づくりを進め全国的にも珍しく人口が増加し、全国の自治体から注目されて元気のある町で、数多くのユニークな施策に取り組んでいる行政の仕事を体験します。	8/20 ～ 8/23 8/27 ～ 8/30 9/3 ～ 9/6 9/10 ～ 9/13 9/16 ～ 9/19
		秋田県上小阿仁村 活性化支援プロジェクト	村おこしとして行っているアートイベントのボランティアを行うことで芸術家の生き方や考え方を学びます。普段知り合わないアーティスト（現代芸術・音楽）と感覚を共有するコンパニオンシップ、古くから伝わる伝統行事など日本のルーツを掘り起こす非日常体験を通じ、急速に過疎の進む村の住民と触れ合いながら、そこに住む人の考え方や生き方を感じてもらいます。	8/8 ～ 8/14 8/14 ～ 8/20 8/22 ～ 8/28 8/29 ～ 9/4 9/3 ～ 9/9
		宮城県石巻市 にじいろクレヨン 子どもの居場所づくり	石巻市の民設の児童館、移動児童館で子どもの居場所づくり、遊び場作りのサポートをしていただきます。0歳児から中学生までで特に小学生が多く集います。子どもたちと共に思いっきり遊んだり、話を聴いて寄り添ったり、子どもたちが伸び伸び過ごせる居場所をつくります。（夏休み）	8/11 ～ 8/18 8/18 ～ 8/25 8/25 ～ 9/1 9/1 ～ 9/8 9/8 ～ 9/15
		宮城県石巻市 放課後デイサービス（障がい児） あっぷるじゃんぷ石巻	障がい児（中高生）が利用し、様々な体験を通し社会で必要な基本を学び、生活面の自立の向上また就労体験を行う場所です。活動の支援、スタッフ補助、活動の企画をし実施も行います。子ども達は、とっても笑顔でフレンドリーです。心のふれあいがあります。	8/8 ～ 8/15 8/21 ～ 8/28
		宮城県名取市 閖上（ゆりあげ） ～ 3.11 を忘れない～ 自分で考える防災プログラム	東日本大震災から学び、今後の防災・減災・復興のあり方を検討するプログラムです。津波の被害を受けた宮城県名取市閖上にて語り部さんの話を聞き、天災への対策を学び、共同生活を行い、自分の五感と心で感じて、防災・減災・復興について考えを深めていただきます。	8/26 ～ 8/29 8/29 ～ 9/1 9/1 ～ 9/4 9/4 ～ 9/7
		東京都八丈島　老人ホームボランティアと観光モニター活動	八丈島内老人ホームでのボランティア活動と、観光モニター（ルート決めから皆さんで考えて巡る）を通じて、島での生活を体感し、観光モニターで発見した島の魅力を発表します。	8/19 ～ 8/24 8/24 ～ 8/29 8/29 ～ 9/3
		長野県信濃町 地域産業の体験と課題発掘プログラム	実際に農業を体験し、地方産業やこれからの農業ビジネス、6次産業化などについて考えます。また、信濃町の産業、観光、環境などを調査し、課題や利用可能な町の資産を発掘して信濃町の地域活性化のための企画をチームで作り発表します。（2 学期）	7/18 ～ 7/23
		長野県信濃町 地域産業の体験と課題発掘プログラム	実際に農業を体験し、地方産業やこれからの農業ビジネス、6次産業化などについて考えます。また、信濃町の産業、観光、環境などを調査し、課題や利用可能な町の資産を発掘して信濃町の地域活性化のための企画をチームで作り発表します。（夏休み）	8/8 ～ 8/13 8/26 ～ 8/31 9/2 ～ 9/7 9/9 ～ 9/14
		長野県信濃町 ふるさと信濃町応援寄付金を通じて 地域振興を学ぼう	ふるさと納税トップページ画像の提案：ふるさと納税制度とその活用方法について学び、信濃町の魅力が伝わる写真を作成。ふるさと納税サイトを通じて町の魅力を発信します。「道の駅しなの」特産品の販売企画研修：道の駅しなのでの販売企画及び商品の販売、実習を通じて、町の特産品の魅力を知り、観光振興や地域づくりについて学びます。	8/27 ～ 9/3
		長野県飯綱町 農業体験実習　（りんご、トマト）	JA ながの ながの北部アグリサポートセンター様の協力により、地元のりんご農家、トマト農家さんでの実際の農作業や、果物の集荷センターでの作業などを体験し、農作物が商品として出荷されるまでの流れを学びます。	8/16 ～ 8/22 8/22 ～ 8/28 8/28 ～ 9/3 9/3 ～ 9/9
		京都・歴史文化 フィールド・スタディーズ	京都は長く日本の政治・文化の中心となった都市であり、平安期から幕末までの史跡が数多く現存します。本FSでは歴史的背景を学び、分野別に分けられた班ごとにその時代の史跡を実際に見学します。	7/21 ～ 7/23
		京都・西本願寺を中心とした仏教 フィールド・スタディーズ ～仏教思想・仏教文化の源流を探る～	京都・西本願寺の宿泊施設に滞在し、通常では経験することの少ないお寺の活動や、茶道・坐禅などの体験を通して、仏教が日本の日常生活や伝統文化に深く浸透していることを感じてもらうプログラムです。	8/26 ～ 8/28
		身近なバリアを探る in 共生社会ホストタウン 山口県宇部市	障害の有無にかかわらず全ての人が共に生きる社会（インクルーシブ社会）の推進にむけて、先端的な取り組みをされている山口県宇部市に足を運び、私たちの身近にあるバリアを理解し、そのバリアを克服するために必要とされる視点や行動を学ぶと共に、具体的な活動を通じて共生社会に対する理解を深めます。	9/2（東京） 9/8 ～ 9/11（宇部）
		徳島県阿南市 加茂谷地区 田舎暮らし丸ごと体験実習	阿南市の市街地近くにありながら、自然が豊かで人情味の厚い、秘境の雰囲気も味わえる静かな地域です。徳島県特産のスダチの収穫や野菜の種蒔き、定植、収穫等を体験していただきます。併せて田舎暮らし体験、地元の小中学生との交流やスポーツ大会への参加もしていただきます。	8/23 ～ 9/12

【令和元年度】フィールド・スタディーズ（短期・1 年生必修）実施一覧 ③

国内外	タイプ	プログラム名	概　　要	期　間
国内	通学	東京臨海副都心 まちの景観づくり活動（花壇管理・球根植栽・クリーン活動）	2020 年の東京五輪会場に隣接する都立公園で実施されている「花と緑のおもてなしプロジェクト」に参加し、ガーデン制作や維持管理活動をとおして、まちの景観づくりに貢献するとともに社会人との交流体験により個々のキャリア向上を図ります。（2 学期）	7/16、7/22、7/29、8/6 のうち 2 日間 かつ 11/20
		東京臨海副都心 まちの景観づくり活動（花壇管理・球根植栽・クリーン活動）	2020 年の東京五輪会場に隣接する都立公園で実施されている「花と緑のおもてなしプロジェクト」に参加し、ガーデン制作や維持管理活動をとおして、まちの景観づくりに貢献するとともに社会人との交流体験により個々のキャリア向上を図ります。（夏休み）	8/8、8/19、8/22、8/26、8/29、9/2、9/5、9/9、9/12、9/17、9/19 のうち 2 日間 かつ 11/20
		日本の「神様」めぐり	国内の宗教関連施設を回りながら、以下について学びます。 ①日本人と山：山岳信仰（高尾山）、②ご利益を求めて：庶民の信仰（七福神、お不動さん、お地蔵さん、お稲荷さん、観音さん）、③人を祭る：神社（明治神宮、亀戸天神、乃木神社、神田明神、靖国神社）	7/13、7/14、7/27、7/28
		武蔵野緑地保全活動（皆伐更新地の管理、樹木の択伐ち草刈、竹林管理）	自然観察や竹林管理などの活動を通し、身近な武蔵野地域の自然を学び、里山保全の意義を理解するプログラムです。	8/10、8/16、9/10
		Field Study in English (FSiE)	Explore career development opportunities by attending more than three events such as a public seminar, forum, symposium, job fair and so forth to be offered in English. A student selects one from periodical announcement on Mascut or one finding themselves and need to approval of a teacher prior to attending. A reflection report needs to be turned in within two weeks after the event.	More than three events or three days of events
		TOKYO GLOBAL GATEWAY（東京都英語村）運営補助	東京都英語村は東京都教育委員会と株式会社 TOKYO GLOBAL GATEWAY が、お台場近くの青海地区に 2018 年 9 月に開設した小学生から高校までを主な対象にした体験型英語学習施設です。毎日約 300 人を超す利用者が 日常生活の色々な場面を想定した施設で 総勢 100 人以上の英語話者のティーチングスタッフから体験を通じて 英語を学びます。FS プログラム参加者は、約 20 人いる運営スタッフのアシスタントとして運営のノウハウを学習します。	8/27、8/28、8/29、8/30
		身近なバリアを探る	障害の有無にかかわらず全ての人が共に生きる社会（インクルーシブ社会）の推進にむけて、学外に足を運びながら、私たちの身近にあるバリアを理解し、そのバリアを克服するために必要とされる視点や行動を学びます。	8/30、9/2、9/3、9/4、9/5
		武蔵野地区空き家等状況調査（武蔵野市）	武蔵野市の空き家等の状況調査を行います。市内をいくつかのエリアに分け、エリアごとに空き家等の現地調査を実施し、地域の課題を含め、現況報告書を作成します。また、状況調査の結果を踏まえ、モデルとなる空き家を対象として、利活用提案を行います。	8/21 ～ 8/27
		武蔵野地区空き家等状況調査（西東京市）	西東京市の空き家等の状況調査を行います。市内をいくつかのエリアに分け、エリアごとに空き家等の現地調査を実施し、地域の課題を含め、現況報告書を作成します。また、状況調査の結果を踏まえ、モデルとなる空き家を対象として、利活用提案を行います。	8/19 ～ 8/23
		武蔵野地区空き家等状況調査（小金井市）	小金井市の空き家等の状況調査を行います。市内をいくつかのエリアに分け、エリアごとに空き家等の現地調査を実施し、地域の課題を含め、現況報告書を作成します。また、状況調査の結果を踏まえ、モデルとなる空き家を対象として、利活用提案を行います。	8/26 ～ 8/30
		江東区の過去と現在 –身近な経済問題を学ぶ–	江東区は江戸文化が息づく下町と開発が進む未来都市の二つの側面をもつ地域です。さらに古くからゴミ問題という都市の課題とたたかってきた地域でもあります。このプログラムでは、江東区の富岡八幡宮や豊洲市場などをフィールドワークし、地域の歴史、経済の仕組み、都市の課題という三つのテーマについて学んでいきます。	9/17 ～ 9/19
		社会保障をボランティアを通じて学ぶ	江東区社会福祉協議会主催の夏季ボランティア体験に参加し、社会保障の現場を体験します。なお、現場（江東区）に関しては、子どもに関する施設、障害者施設、高齢者施設等、参加者自身が選んで 4-5 日のボランティア体験をします。ボランティア前には自分が参加する分野の制度を学び、ボランティア後には自身の経験を発表する事前事後授業の参加が必須です。	8/8 ～ 8/30
		出入国管理・税関視察プログラム	外国からの人・物の出入りをどのように管理しているかを理解します。法務省・税関職員、弁護士からのレクチャーのほか、東日本入国管理センター・東京入国管理局、東京税関等の視察を行い、今後の出入国管理のあり方などを検討します。	9/2 ～ 9/18
		江戸東京　都市史の試み	国内の関連施設を回りながら、以下について学びます。 ①江戸の建設（江戸城、月島、泉岳寺、日本橋）、②江戸から東京へ（浦賀、品川、上野、丸の内）、③東京の建設（大震災関連、東京タワー、新宿、米軍基地、64 年オリンピック）	8/10、8/11、8/12、8/13
		鎌倉・仏像・東大 FS	鎌倉の古寺巡拝や博物館や美術館の仏教関係の展示を通して仏教についての知識を深めます。また、築地本願寺の参拝や武蔵野大学の学祖である高楠順次郎が長く教鞭をとった東京大学訪問を通し、建学の精神を学びます。武蔵野大学の基盤となる建学・仏教の精神への理解を深めるプログラムです。	7/17、7/31、8/2

【令和元年度】メインメジャー FS（2 年生以上選択）実施一覧

国内外	タイプ	プログラム名	概　　要	期　間
国内	通学	被害女性と子供への支援活動	本プログラムでは、NGO でのインターン活動を経て、社会の中で様々な人との関わりを大切にしながら、積極的にリーダーシップを発揮できることを目的としています。東京YWCAの平和と人権事業、特に、女性と少女にかかわる社会的課題（特に女性への暴力防止のための事業）を中心として取り組んでいきます。月に 2, 3 回、一回数時間が平均の参加時間です。夏休みにも活動があります。	6/29 ～ 1/26
		学生が取材編集する中堅企業の CSR・SDGsレポート	ニッセイエブロ社、他の CSR 報告書を学生を中心に作成し、国連グローバルコンパクト事務局に提出します。さらに SDGs として情報発信を行います。https://www.eblo.co.jp/csr/report/	8/19 ～ 12/5

【令和元年度】サブメジャー FS（2 年生以上選択）実施一覧

国内外	タイプ	プログラム名	概　　要	期　間
国内	宿泊	信濃町活性化を通じて地方創生を考えるゼミ	長野県信濃町をモデルとして、地方創生や 6 次産業などをテーマに地域活性化対策を企画する。現地での実地調査も行い、企画案を取りまとめます。企画案は町役場での発表を予定しています。1 年目のゼミナールは、原則としてチームで企画案を作成するが、最終レポートは個人での提出となります。2 年目の総合研究は、個人テーマを持って論文としてまとめます。	8/15 ～ 8/24 2/17 ～ 2/26
		コピーライティングゼミ	広告・広報分野で働くコピーライターの技術やノウハウを軸に、情報の編集力、発信力を高めることを目指します。取材することで情報を集め、伝わる言葉で言語化、編集、発信する力を養います。インタビューを行って原稿にまとめたり、プロジェクトストーリー制作、スローガン開発、キャッチコピー開発など、様々な言葉づくり、文章作成を行います。よりよい言葉を生み出すために考え続ける、辛く楽しい作業を経験してください。	8/19 ～ 9/7
		メディア制作表現ゼミ	このゼミでは、動画を撮り、ディレクター（監督）となって映像作品を作り、世界に向けて発信することを目指します。撮影場所は徳之島、撮影期間は2週間。自ら企画をたてて、脚本、構成、取材、撮影、演出、編集、広報、配信などを実践します。作品を作ることを通じて徳之島という場所を知り、そこに暮らす人々と触れ合い葛藤してもらいます。講師（プロの映画監督とプロデュース経験のある専任教員）は皆さんを全力でサポートします。	8/14 ～ 8/30
		マーケティング調査ゼミ	ある東証 1 部上場企業が私の学会発表を聞き、「弊社のマーケティング課題の解決に協力してくれないか」と依頼してきました。私一人ではきついので、サブメジャーゼミという枠組みで、みなさんの力も借りながら、解決していきたいと考えています。アンケートや実験、実地調査などを通して、望ましいマーケティング戦略を探索していきます。	4/25 ～ 9/4
国内	通学	スポーツマネジメントゼミ	【スポーツマネジメントゼミが目指すこと】1. スポーツイベントの自主開催などのリアリティの高いスポーツビジネスシーンを経験しながら、マネジメント、マーケティング、ファシリテーションなど実践的なビジネススキルの学修を目指します。2.「2020 年以降のダイバシティー社会の実現に貢献する。」「スポーツを通して地域に貢献する」「2020 東京オリンピック・パラリンピックの開催を応援する」の3つ目的の実現を目指し、外部と連携しながら年間を通して活動を行います。3. 年間の活動を PDCA サイクルの理論にあてはめて繰り返し検証し、アクションの質的な向上を目指すとともに、個々の習得レベルの向上を図ります。	5/11 ～ 1/31
		仏教文化に親しむゼミ（ブディスト・スタディーズ）	1 年次に必修科目「仏教概説」を受講して、2 年次以降も継続して仏教の学びを深めたいという希望をもった方を対象に、仏教思想や仏教文化をさらに深く学ぶことを目的としています。座学では仏教の思想や文化を中心に学び、学外学修では築地本願寺や京都の本願寺での宿泊を伴う仏教体験や、寺院や各所で開催される仏教関係の展覧会の見学などを検討しています。	4/1 ～ 1/31
		産学連携ゼミ	本ゼミでは、産学連携により本学の教育目標である「アクティブな知の獲得」を目指し、企業から実践的な課題をもらい、解決策を提示する学習法（PBL=Project-based-learning ）を取り入れます。武蔵野大学では、これまで金融、証券、航空、建設、出版、広告、テレビなど、多様な業界の方を講師に招いて授業をおこなってきました。それらを単発の講義で終わらせないためにも、産学連携ゼミを開講し、課題解決型学習を試みます。	–
		英語力・キャリアアップゼミ	誰でも半年間で集中的に英語力を伸ばせます! このゼミではこれまで伝統的な勉強方法とは違ったアメリカ式（Economical）の英語の勉強方法を指導します。Economical な勉強は短時間で最大の効果を得る勉強方法です。それに必要な集中力アップの練習もします。TOEFL を中心に学ぶことで自然と TOEIC の点数も伸びます。	–
		未来社会を考えるゼミ	マスメディアの現状や沖縄県の米軍基地問題なども取り上げながら、現代社会について政治・社会・文化など様々な視点から講義します。学生たちとディスカッションも積極的におこない双方向型の講義を通じて理解を深め、未来社会について知見を深めながら分析する力を養います。	–

国内短期プログラム / 通学型　　派遣期間　9/2 ～ 9/18

出入国管理・税関視察プログラム

参加人数：19 名　／　学科：法律学科

日本社会の国際化が着実に進んでいることを踏まえ、出入国管理（人の出入り）や税関（物の出入り）について学んでもらい、今後の学習計画や進路選択に役立ててもらうことを目的として、日本社会のグローバル化の最前線に立っている行政機関等を訪問しました。

研修先情報　東京税関及び東京出入国在留管理局は、国の地方支分部局の一つです。しんじゅく多文化共生プラザは新宿区の組織です。東京ジャーミイ・トルコ文化センターはモスクであり、難民支援協会は日本で難民支援を行う NPO です。

まず、出入国管理・税関視察プログラムの目的について説明する。本プログラムは、法学部法律学科の１年生を対象として、今年度より新たに開講されたものである。現在、日本社会の国際化が進んでおり、行政及び市民社会にとって、国際化への対応は極めて重要な課題となっている。そこで、国際化への対応に取り組む省庁や地方自治体を訪問したり、NGO の担当者に講演にお越し頂いたりすることを通じて、課題に取り組む現場の実態を学び、学生の今後の学習計画や進路選択に活かしてもらうことを主な目的としてこのプログラムは実施された。

次に、本プログラムの概要を説明する。本プログラムには法学部法律学科の1年生19 名が参加し、9月上旬から中旬にかけて、組織や団体への訪問等を実施した。また、これらの訪問を見学だけで終わらせるのではなく、学生の主体的な学びのきっかけとするため、事前学修と事後学修も実施した。事前学修は、組織や団体への訪問等を行う前のオリエンテーションを内容とするものである。一方、事後学修は、学生が訪問を通じて学んだことについて主体的に検討を加え、その検討結果について他の学生の前でプレゼンテーションを行うことを内容とするものである。

続いて、本プログラムの内容を具体的に説明する。まず、事前学修について説明する。組織や団体への訪問等が始まる１か月ほど前に事前学修を実施し、本プログラムの目的を説明するとともに、組織や団体を訪問する際には一定のマナーを遵守する必要があること、写真撮影にあたってはプライバシーに配慮する必要があること等について指導を行った。また、訪問先である組織や団体についての情報を教員から一方的に説明するだけでは、学生の主体的な態度を十分に引き出せないことが懸念されたため、訪問先の情報について、学生自身に主体的に調査してもらうことを目的とした事前課題を課すこととし、訪問の実施前に教員に提出することを求めた。さらに、事前学修の際に、事後学修におけるプレゼンテーションの実施を見据え、参加学生を四つの班に分けることとした。そして、一つの班についてはビデオ班と名付け、班のリーダーに撮影機材を貸与した。その上で、ビデオ班には、学生の訪問等の様子を撮影してもらうこととし、訪問等の終了後にその映像を編集し、編集した映像を用いてプレゼンテーションを行ってもらうこととした。そして、ビデオ班以外の三つの班については、訪問等で学んだ内容を踏まえて、パワーポイントのスライドを用いたプレゼンテーションを行ってもらうこととした。

このような事前学修を踏まえた上で、教員の引率の下、組織や団体への訪問等を実施した。まず、税関行政におけるグローバル化に対する取り組みを学ぶため、東京税関を訪問し、税関の歴史、密輸の取締りや関税徴収の業務等について説明を受けた。説明の後、税関行政の現場を見学するとともに、東京税関の歴史等について解説する「情報ひろば」の見学を行った。

続いて、日本に居住するイスラム教徒の生活について学ぶため、日本最大級のモスクである東京ジャーミイ・トルコ文化センターの訪問を行った。ここでは職員の方からイスラム教徒が行う礼拝の意義やイスラム教徒の食事に関する決まりについて解説を受けた。また、モスクの隣に併設されている売店も訪問し、イスラム教徒が安心して食べられるハラール認証がついた食品も見学した。

その後、出入国管理行政におけるグローバル化に対する取り組みについて学ぶため、東京出入国在留管理局を見学した。ここでは入国審査官や入国警備官の業務の概要について、法制度の解説を含めた詳細な説明を受けた上で、各部門の見学を行った。調査部門の訪問の際には、摘発の際に使用している装備品も見学させて頂いた。

そして、外国から日本に来た難民及び難民申請者の実情を学ぶため、難民支援協会の職員の方に有明キャンパスにお越し頂き、講演をして頂いた。職員の方からは、日本の難民認定制度の現状と課題、日本において難民認定申請者が直面する生活の困難等について、支援の現場での経験を踏まえたお話を伺うことができた。

加えて、出入国審査の実態について学ぶため、東京出入国在留管理局羽田空港支局を訪問した。ここでは出入国審査の現場を見学するとともに、審査の際に行われる鑑識の実務について説明を伺った。その説明の際には、実際にパスポートの見本をルーペで拡大して鑑識を行う体験もさせて頂いた。

最後に、自治体における多文化共生政策について学ぶため、新宿区が運営するしんじゅく多文化共生プラザを訪問した。ここでは所長より、新宿区の多文化共生政策についてお話を伺うとともに、地域社会において、外国人と日本人の間で自然にコミュニケーションがとれる人間関係を構築していくことが最も重要であること等、大変示唆に富むお話を伺った。

以上の訪問等を終えた後、事後学修を実施した。ここではまず、教員から学生に対して、プレゼンテーションの準備の指導を行った。その後、パワーポイントのスライドを用いたプレゼンテーションを行う三つの班は、「法学２」の授業内において、聴講する学生を前にプレゼンテーションを行った。その上で、聴講した学生の挙手により、最も優れたプレゼンテーションを行った班を選出し、表彰した。また、ビデオ班については、学内で開催される第２回「副学長杯」武蔵野 FS 動画・プレゼンコンテストに出場し、そこで口頭でのプレゼンテーションを行った上で、動画を上映してもらうこととした。

ここからは本プログラムを振り返り、本プログラムが参加学生に与えた影響について考察したい。本プログラムでは、日本社会のグローバル化に伴う様々な課題に取り組んでいる行政機関等の現場に実際に訪問するとともに、最前線で業務に従事する実務家から長時間にわたってお話を伺うことができた。これらのお話の中には、法律が現実社会の課題の解決のためにどのように作用しているのかについての説明も多く含まれており、参加した法律学科の学生にとっては、今後の法律学習を行う上での動機付けとなったと考えらえる。

また、プレゼンテーションにおいては、行政や市民社会の現状についての改善策の提案を行うことも求めたため、学生はプレゼンテーションの準備を通じて、行政や市民社会のあるべき姿について主体的に考えるきっかけを得ることができたように思う。このように各学生が主体的な問題意識を持つことによって、今後の学内における学習が一層充実したものになっていくことが期待される。

さらに、ほとんどの学生にとって、税関行政や出入国管理行政の現場は初めて訪れる場所であった。このように公務員が実際に業務に従事する現場を見学したことで、将来の進路の選択肢の一つとして公務員をイメージすることが容易になったと考えられる。

そして、本プログラムには留学生２名も参加しており、プレゼンテーションの準備の際には日本人学生と積極的に意見交換をしていた。このように本プログラムの事後学修そのものが多文化共生に向けた第一歩ともなったと思う。

その他に、事後学修においてプレゼンテーションの準備を行ったことにより、今後の学習や卒業後の実務において必要とされる、プレゼンテーション技術の習得及び向上を図ることもできた。特にビデオ班の学生たちは、これまで動画編集の経験のない学生ばかりであったが、懸命な努力を重ねた結果、動画編集の技術を見事に習得していた。

最後に、武蔵野 BASIS「フィールド・スタディーズ」参加者を対象として、動画によるプレゼンテーションの機会を付与する「副学長杯」武蔵野 FS 動画・プレゼンコンテストの意義について付言しておきたい。今後、インターネットの通信速度が一層上昇すれば、個人が動画を作成及び編集して発信することが容易になる。そうすると、学術やビジネスにおけるプレゼンテーションの場でも、動画の活用がさらに一般的になっていくことが予想される。そのため、大学教育においても、動画によるプレゼンテーションの指導の重要性が一層高まっていくと思われる。この意味において、同コンテストの取り組みは、大学教育における先進的な取り組みであると言えよう。

担当教員コメント

法学部　法律学科長
竹之内 一幸

本プログラムは、今年度から開始されました。弁護士で、本学講師の髙尾栄治先生のご協力があって、実現に至ったものです。毎回、異なる行政機関、NPO、自治体を訪問し、出入国管理、難民問題、多文化共生といった複数の問題を取り扱う、新しいタイプの FS であり、学生の負担も大きかったと思います。しかし、その分、学生たちは今までにない体験を通じて、多くのことを学修できたに違いありません。SDGｓを多角的に考えるうえからも、有益なプログラムということができるでしょう。

法学部　法律学科　非常勤講師
髙尾 栄治

まず、学生の受入れにご協力を頂いた、受入先団体の皆様に対して感謝を申し上げたいと思います。また、本プログラムの運営にご協力を頂いた、学外学修推進センター事務室の職員の皆様にも御礼を申し上げます。本プログラムを通じて、学生たちは受動的に知識を学ぶだけでなく、行政や市民社会の現状を理解した上で、行政や市民社会の改善すべき点を発見していくという、主体的な問題意識を持つことができるようになったと思います。

国内短期プログラム / 通学型　　派遣期間　9/17 ～ 9/19

江東区の過去と現在
ー身近な経済問題を学ぶー

参加人数：15 名　／　学科：経済学科

江東区は伝統的な下町と、近年開発が進む臨海部に大別され、様々な課題が発見できる。今回の FS では、木場から新木場移転の歴史、日本一の材木集積地・新木場の役割、埋め立ての歴史とごみ処理の実態、流通や貿易において当地の施設がはたす意義などについて知見を深めた。

研修先情報　木場では銘木店の跡地や運河を、新木場では木材会館と世界の優良銘木展示場を見学し、地場産業の歴史と現状を学んだ。中央防波堤埋立地ではごみ処理、豊洲市場や東京税関、東京港では流通や貿易の現場に触れることができた。

学外学修（3 日程）	
9月17日（火）	木場コース：木場、富岡八幡宮 新木場コース：木材会館、世界の優良銘木展示場
9月18日（水）	東京都環境公社、中央防波堤埋立地
9月19日（木）	豊洲市場、東京税関、TOKYO ミナトリエ

武蔵野大学の学生も多く利用する新木場駅を降りると、「木のまち新木場」と書かれた看板が現れ、至る所に木材関連の企業や施設を目にする。この新木場の原点が、深川周辺にあった＜木場＞である。かつて、各地から運ばれた材木は水路に浮かべて保管し、職人が切り出していた。それが＜貯木場＞である。深川一帯は、材木商を中心に江戸時代から商業・物流の拠点として繁栄していた。江戸幕府の成立で、築城のため材木に対する需要が高まり、各地から材木商が集まったからである。当初、貯木場は散在していたため、出火すると大火が各地で発生し、大変危険であった。これに対して、幕府はリスク管理と材木市場の統制を主な目的として、18 世紀になると深川一帯に材木商を集め、貯木場を新たに建設した。当地が木場町と命名されたのもこの頃である。木場は江戸時代から、明治・大正・昭和と戦後まで続いたが、江東区の地盤沈下と立地条件の悪化から、移転計画が浮上し、1970 年代に新木場へ移転した。木場も新木場も埋め立て地であった。

9 月 17 日午前中にほぼ以上のような内容の事前学修を終えて、午後からは木場コース（引率者、齋藤）と新木場コース（引率者、田中）に分かれて学外学修を行った。今日、貯木場は移転し、その跡地は広大な公園（木場公園）となってしまったが、その名残は周辺の運河や物流倉庫にわずかながら確認できる。富岡八幡宮も逸することはできない。深川不動と並びたつこの大きな神社は、豪商によって発展した当地の象徴的存在である。富岡八幡宮の周辺も現在は商店やマンションが立ち並んでいるが、一歩中に入ると静寂な環境が少し残っており、木造建ての古い家屋が目にとまる。これこそ、新木場に移転し、現在も続く株式会社梶本銘木店（後述）の旧倉庫である。二階建てにしては屋根が高いのは、銘木を立てて顧客に見せたからである。

炎天下のなか長時間歩き周り、かなり疲れたので、喫茶店で休息しながら、学生に見学の感想を聞いた。学生の多くは、このあたりを訪れるのは初めてのことで、木場はもとより富岡八幡宮などもあまり知らないようであった。中国からの留学生のなかには、特に興味を示した者がいた。中国では木場に似た貯木場が今でも各地に残っているそうであり、母国との類似性を感じ、懐かしく思えたのかもしれない。休息後、学生のなかには、さらに見学を続け、ヤマタネ倉庫や島田水門付近まで足を延ばした者もいた。江東区が運河・水路の街であり、商業・物流の拠点として繁栄していたことが、多少なりとも実感できたのではないだろうか。

新木場駅の近くにある木材会館では、東京木材問屋協同組合事務局次長の原田正樹様に、新木場における木材問屋の集積や貯木場についてご教示頂いた。木材会館は、東京木材問屋協同組合 100 周年を記念して建設され、木材の魅力が徹底的に追求された芸術的かつ機能的な建築物である。続いて、世界の優良銘木展示場に移動し、株式会社梶本銘木店主任の伊部貴行様より、木場から繋がる新木場の歴史、銘木の魅力、銘木が生み出される過程や流通についてご講義頂いた。1 本 1500 万円の銘木や 7 年自然乾燥させている銘木等、スケールの大きさに驚きの声が上がっていた。

見学後は大学に戻り、学生に学外学修で得た知見について報告書（PPT）を作成してもらった。学生は非常に意欲的に課題に取り組み、予定を延長して頑張っている者もいた。武蔵野大学の学生にとって身近な新木場での学修を通じて、過去から伝統を受け継ぎ、多くの困難を乗り越え、未来に向けて進化を続けている林業・木材産業の現状について理解が深まり、大変有意義な学外学修となった。

ごみ処理問題は大量生産・大量消費を行っている大都市の抱える大きな問題である。現在、東京都 23 区で発生する廃棄物の多くは、東京湾の処分場に埋め立てられている。東京都のごみ埋め立ての歴史のはじまりは、江戸時代の「永代浦」、現在の江東区富岡八幡宮周辺（隅田川河口）にあるといわれ、東京都の埋め立ての歴史を知るには江東区の歴史を知ることから始めるのが重要といえる。

9 月 18 日は、午前中に、江東区の地理および面積推移を公表データより知り、埋め立てという観点から江東区の歴史を探る事前学修を実施した。午後からは貸切バスに乗車し、東京臨海副都心青海地区より第二航路海底トンネルを経て、東京都環境公社中坊管理事務所へ向かった（引率者、平湯、田中）。東京都環境公社の担当の方に、ごみの収集から最終処分までの過程をご講義頂き、その後は、粗大ごみや不燃ごみの処理施設を車窓見学し、中央防波堤外側埋め立て処分場に向かった。あいにくの天候不良のためバスから降りることはできず車窓見学のみとなったが、新海面処分場を見晴台よりのぞみ、埋め立て処分場の広大さおよび有限性を感じることができた。中央防波堤内側埋立地と外側埋立地の間の水路は 2020 年東京オリンピックの海の森水上競技場であり、ボート、カヌースプリント競技の実施に向けて現在、整備が進みつつある状況も見ることができた。

講義と見学を通して最終処分場の有限性を目の当たりにし、3R（リデュース・リユース・リサイクル）の必要性を各自が自分のこととして考える大変良い機会となった。見学後の事後学修では、SDGs の目標 11「住み続けられるまちづくりを」および目標 12「つくる責任つかう責任」の観点から見学内容をふりかえるレポートを作成した。

9 月 19 日は、豊洲市場、東京税関、TOKYO ミナトリエ（東京臨海部広報展示室）の三施設で学外学修を行った（引率者、小坂）。まず、朝から豊洲市場を見学し、その役割を学修した。豊洲市場の見学と事前授業を通して、学生は青果や水産物などの生鮮食品が、どのように供給者から消費者に流通するのかを具体的に学ぶことができた。また、豊洲市場は中央卸売市場の一つであるが、どうして国が中央卸売市場を設置する必要があるのかについても学修することができた。

午後からは、東京税関と TOKYO ミナトリエを見学した。東京税関では担当者の方から、税関が必要な理由、税関の役割について解説していただいた。学生は、税関についての知識は事前授業で学んでいたが、実際に税関で勤務する職員の方から解説を聞くことで、グローバル化した経済における税関の重要性を改めて学ぶことができた。

TOKYO ミナトリエは、東京港の歴史や現状を紹介する展示室であるが、担当者の方に、江戸時代から現代までの東京港の歴史や現状を解説していただいた。日本では、貿易の大部分が船舶によって行われており、港湾が貿易に重要な役割を果たしている。経済学科では、貿易についても学修するが、港湾の役割について学ぶ機会はあまりなく、貿易における港湾というインフラの重要性を学ぶ良い機会となった。

このように学生は、江東区に存在する 3 つの施設の学外学修を通して、経済学科の学科科目で学修する商品の流通や貿易は、現実の経済では、さまざまなインフラや制度に支えられてはじめて成り立っていることを学ぶことができた。

9 月 28 日には事後授業を行い、3 日間の学外学修で学んだことの振り返りを行った（担当、小坂）。具体的には、学生は、3 日間で学修した多様なテーマについて、報告書 (PPT) を作成した。そして、その報告書に基づいて黎明祭で発表するためのポスターを作成した。

担当教員コメント

（左から小坂、田中、齋藤、平湯）

経済学部　経済学科
教　授 齋藤 英里
准教授 平湯 直子
准教授 小坂 賢太
准教授 田中 茉莉子

以下の 4 点を指摘したい。①経済学科の学びは抽象的・理論的な内容の座学が多いので、学外学修によって経済や産業の現場を知ることの意義は大きかった。②学生は大学周辺に足を延ばして見学する機会があまりないようで、江東区の歴史と現状の一端を知る良い機会にもなった。③しかし、今回の FS の意義は、それだけにとどまらない。ただ身近なことについて学ぶだけでなく、環境問題や国際経済といった経済学の重要かつグローバルな課題を学ぶ機会にもなった。木場の変遷も、林業・木材産業をめぐる国際競争が大きく関係している。④さらに、今回実施した学外学修は、今後 SDGs の学修へと展開できる可能性を有していることも強調したい。既に中央防波堤埋立地の見学やごみ処理問題を通して、学生にはそのことを実感させている。経済学では、FS から SDGs への展開は始まっているのである。

最後になったが、今回の学外学修にあたって、お忙しいところ御協力いただいた東京木材問屋協同組合事務局次長の原田正樹様、株式会社梶本銘木店主任の伊部貴行様、東京都環境公社ならびに東京税関の職員の方々、TOKYO ミナトリエ御担当者様、その他関係の皆様に改めてお礼を申し上げる。

国内長期プログラム / 通学型　　派遣期間　7/15 ～ 9/14

作陶における伝統の創造

参加人数：29 名　／　学科：日本文学文化学科 グローバルコミュニケーション学科 グローバルビジネス学科 政治学科 経済学科 経営学科 会計ガバナンス学科 データサイエンス学科 人間科学科 環境システム学科 建築デザイン学科

陶芸家伊藤麻沙人氏による陶芸入門の講義を受けた後、同氏の指導の下、工房で器を作り、美術館で陶磁器の名品を鑑賞し、縄文遺跡の発掘現場を見学する。小川桂一郎教授による「陶芸の化学」を受講する。これらを通して、作り出すよろこびを知り、本物を見分ける力を養う。

研修先情報　伊藤麻沙人略歴 1975 年東京藝術大学大学院陶芸専攻修了、鎌倉「櫺亭」にて和食器の研究を重ねる。1987 年神奈川県秦野市に築窯。日本工芸会正会員。日本橋三越本店にて「伊藤麻沙人展」14 回開催。群馬大学講師、武蔵野大学客員教授

自らの身体を使って何かを作り上げることは、簡単ではないが、上手く出来るととても楽しい。その深い喜びを味わうと、他のことにも積極的に取り組んでみようという気持ちになれる。自分で作ると、他の人の作ったものの良さも分かるようになる。そして、良いものを作り出せる人の凄さも分かるようになる。これは、学問や芸術を尊重し敬愛する姿勢にも通ずる。それゆえ、身体を使って何かを作り上げる体験は、教養教育の授業に積極的に取り入れられるべきものといえる。

身体を使って作るものは、絵画、彫刻、工芸など有形のものに限らず、音楽演奏や舞踏など無形のものも含まれる。その中で作陶は教養教育に最適の種目の一つであると考えられる。作陶は陶土の感触を手で感じながら形を作り上げていくので、身体を使う感覚を強く意識できるからである。しかも、自分の作ったものを生活の中で使う喜びもある。また、履修者間での経験や習熟度の違いが小さく、あったとしても授業を進めるうえでの問題となりにくい点も都合がよい。

このような理由から、作陶を「フィールド・スタディーズ」のプログラムとして開講したいと考えた。ただし、それを実現するためには、優れた指導者と設備が必要である。幸運なことに、今回、我が国を代表する陶芸家の一人である伊藤麻沙人氏を客員教授として迎え、氏の工房で直接指導を受けることができた。

プログラムの中心は工房での作陶である。これに加えて、東京国立博物館と三井記念美術館を伊藤氏の案内で見学し、日本、中国、朝鮮の陶芸の名品を鑑賞する機会を設けた。さらに、工房の近くで発掘が進む稲荷木遺跡（縄文から平安時代）の見学も行った。

事前授業では、このプログラムのために編纂した独自の教科書を用いて、伊藤氏が陶芸とは何かを概観する講義を行った。事後授業では、小川が「陶芸の化学」として作陶における各工程の化学的な意味を解説した。その後、教室に全員の作品を展示して鑑賞会とした。最後に、振り返りのレポートの提出を課して終了とした。

本稿では、主に本プログラムの中心であった作陶の過程について、学生の感想を交えながら報告する。それとともに、特別に企画した稲荷木遺跡の見学についても述べる。

作　陶

作陶の初日は、とみ子夫人が点ててくださるお茶から始まった。お茶碗とお皿はすべて伊藤氏の作品。床の間には伊藤氏愛蔵の李朝白磁の壺が置かれ、良寛自筆の掛け軸がかかる。日本の伝統文化を味わいながら、これから取りかかる作陶の意味を考える時間となった。その後、作陶の作業に入った。以下、工程順に述べる。

作陶に用いる陶土は市販品を使うのがふつうであるが、伊藤氏は自ら採取した粘土から独自のものを作る。本実習でも、伊藤氏が採取し水簸した粘土を篩にかけるところから始めた。数種類の粘土を板の上に盛り上げ、全員が裸足になって粘土を踏んで混ぜ合わせた。

陶土が出来上がると、器のかたちを作る。この成形は、本実習では紐状にした粘土を重ねていく手びねりという方法をとった。これが簡単なようで、むずかしく、思うような形にならない。ところが、伊藤氏がちょっと手を加えるだけで、形が整うだけでなく、器に命が吹き込まれる。その様子がレポートに次のように記されている。「自分でこねるとしわだらけになってでこぼこしてしまい、上手くつくれませんでした。しかし、伊藤先生が隣に座って手直ししてもらった瞬間にきれいに整えられていくのを見たときには本当に驚きました。」（笹倉ノア、人間科学科）

成形した生乾きの器は，自然乾燥させてから、伊藤氏の指導のもとに無駄な粘土を削りとって形を整えた。これを伊藤氏が陰干しによって完全乾燥させ、650−750 ℃で素焼きを行なった。

素焼きが完了した器に、絵付けと釉がけを行なった。釉がけも通常は市販品を使うが、伊藤氏は天然材料から独自の釉薬を作る。本実習では、硅石、長石、木灰、わら灰と水から調製した。絵付けに用いた顔料も、弁柄（酸化鉄）、呉須（コバルト）、酸化銅など、天然由来のものに限られている。

絵付けと釉がけがなされた器は、窯に詰めて一昼夜連続最高 1300 ℃での本焼きを行なった。加熱を止めて窯を十分に冷まし、蓋を開けると、本焼きの前からは想像できないような美しい作品が現れた。その感動を学生は次のように綴っている。「いよいよ本焼きを終えて窯から取り出したときは、とても感動した。なぜなら、電気の光とは全く違う見たことのないような炎の輝きを放ちながら自分たちが作った陶器が窯から出てきたからだ。あの素晴らしい輝きとそのとき感じた興奮は一生忘れないだろう。実際に自分の作った陶器を手元でまじまじと見たとき、自分はこれから何十年後も残るだろうモノを作ったのだなと改めて感動し、その陶器にとても愛着がわいた。」（須賀田玲奈、日本文学文化学科）（注 「炎の輝きを放ちながら（中略）陶器が窯から出てきた」というのは、一部の器について 1300 ℃の窯からいきなり器を引き出し急冷させる「引き出し黒」という技法を用いたからである。）

学生の作品

稲荷木遺跡見学

稲荷木遺跡は普段は公開されていないが、このプログラムのために、特別に見学の機会を与えられた。私たちが見学したときには、150 名ほどの作業員が発掘作業を行っており、目の前で土器が土から顔を出してくるのが見られた。いくつもの石が規則的に配列された住居跡、そこだけ土の色が変わっている調理場跡、縄文時代から平安時代までの地層の違いなどを、間近に見るだけでなく、自分の手や足で感じることができた。さらに、出土したばかりの見事な縄文土器や装飾品を手にとって見ることもできた。その感動を学生は次のように綴っている。「縄文時代の人々は細かい模様のついた土器をいくつも作り、それらが数千年も経った現在に残っているということはとても驚くべき事実だ。時代のつながりを目の前で感じたとき私は鳥肌が立った。そして、私も後世に残るモノを自らの手で作りたいと強く感じた。」（須賀田玲奈、日本文学文化学科）

おわりに

本実習で全員が、茶碗ないし湯飲みと三筋壺とよばれる壺を作った。それに加えて、一部の学生は箸置きも作っている。どの作品も初心者が作ったとは思えないほど見事な出来で、個々の学生の熱意と喜びが伝わってくるのが嬉しい。冒頭に掲げた本プログラムの目標は達成されたと言ってよいだろう。少なくとも、作り出す喜びを知ったことは確実である。本物を見分ける力も養われているに違いない。それどころか、学生たちは私たちの期待以上に深く学んでいる。それを伝えてくれる学生の言葉を引用して締めくくりとしたい。「自分自身で何かを創り出すことの難しさや大切さ、一つのことに向き合って続けていくことの大切さ、人に物事を教え、伝えていくことの大切さなど、挙げたらキリが無いくらい、本当に多くのことに気づくことができ、自分の中の常識というか、考え方が変わったと思います。（中略）これから、常に学ぶ姿勢を忘れずに、自分なりに納得できる答えを出せるように少しずつ頑張っていきます。このプログラムを計画し、実行してくれた先生方、引率してくれた先生方、伊藤先生とご家族の方々、本当にありがとうございました。」（市川雄己、政治学科）

作陶実習最終日：窯出しを終えて

担当教員コメント

教養教育部会　部長
小川 桂一郎

作陶の全期間にわたって、とみ子夫人は、伊藤先生とともに作陶の指導に加わられただけでなく、お茶を点て、毎日、手作りのおにぎり、おかず、クッキーなどをご馳走くださいました。美術の教員をされている久美子さんも、お仕事のない日に一緒に加わってくださいました。窯焚きの日は、庭でバーベキューをご馳走になりました。伊藤先生は学生の来ない日も、このプログラムのためにかなりの時間と労力を費やしてくださいました。伊藤家全員の献身的なご尽力がなければ、本プログラムの遂行は不可能でした。かながわ考古学財団の天野賢一氏には、稲荷木遺跡見学のために特別のご配慮をいただきました。心より御礼申し上げます。

教養教育部会　客員教授
伊藤 麻沙人

このたびは小川桂一郎先生の御要請によりＦＳプログラムのお手伝いをさせていただきました　凡そ陶磁器にかかわることは歴史　鑑賞　生活の中での活用の在り方　自らの手による作陶（土作り　造形　絵付け　施釉　窯焚き）陶芸の化学　縄文遺跡発掘現場の見学　等と本来ならば数倍の時間をかけてもよい濃密な内容を計画しました　学生諸君は夏の炎天下　遠方の私のアトリエまで通い　そして全員が旺盛に履修してくれました　作陶という作業の中で人間らしい真善美を希求する姿を彼らに伝えたいとの願いでしたが　彼らの反応やレポートの内容では想像以上の感動とともにそれぞれが理解されたように思います　私にとっても純白な魂の青年たちと過ごした清涼感に満ちた経験でした

国内短期プログラム / 宿泊型　　派遣期間　8/26 ～ 9/7

宮城県名取市 閖上（ゆりあげ） ～ 3.11 を忘れない～
自分で考える防災プログラム

参加人数：47 名　／　学科：日本文学文化学科　グローバルコミュニケーション学科　日本語コミュニケーション学科　政治学科　経済学科　経営学科　会計ガバナンス学科　人間科学科　社会福祉学科　環境システム学科　数理工学科　建築デザイン学科　教育学科　こども発達学科　看護学科

東日本大震災から学び、今後の防災・減災・復興のあり方を検討するプログラムです。津波の被害を受けた宮城県名取市閖上にて語り部さんの話を聞き、天災への対策を学び、共同生活を行い、自分の五感と心で感じて、防災・減災・復興について考えを深めていただきます。

研修先情報　政令指定都市仙台市の南東に位置、鉄道や幹線道路が走り、人口増加や企業立地が進む仙台都市圏の副拠点都市です。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災にて被災、特に仙台空港に隣接する閖上地区は、津波により甚大な被害を受けました。

宮城県名取市閖上地区は、東日本大震災の津波被害により一瞬にして多くの家屋が流出し、死者・行方不明者は 800 人以上に及んだ。閖上での本学学生の活動の始まりは、現地への被災ボランティア活動であり、2015 年から現地にて被災・防災について体験する短期フィールド・スタディーズ（以下、FS）となった。

津波から丸 8 年がたち、壊滅状態となった閖上地区は更地となり、土地のかさ上げがなされ、復興住宅や小中学校が完成し、住宅整備や商業施設の開設等が急激に進められている。そこで、今年度より、共同生活（①）と被災や防災に加え、減災と復興も学ぶ活動を追加した。また学生たちは、震災への関心が高く参加動機が明確だが、現地では初めての体験に精一杯になり、体験からの思考の深まりや参加動機の振り返り、参加前の自己学習が不足しがちであった。そのため、本プログラムの目標を設定、さらに事前学修（予習）、事前学修授業、現地での活動、事後学修授業が目標達成の方法であることを学外学修のしおりに明記し、ガイダンス時に事前学修を課した。

事前学修授業は班ごとに、現地での活動開始直前に学生たちが予習してきた内容に基づいて班ごとに目標を設定するグループワークを実施した。学生たちは、活動が始まると、日中の日々の体験や共同生活に集中し、夕食後のミーティングでの、引率教職員の支援のもとで、目標達成の評価を行い、明日の目標達成のための活動を考えた（②）。

現地での活動内容は次の内容であった。自炊、風呂無しの疑似避難共同生活、東日本大震災時に閖上から避難した防災士や NPO 職員からの被災状況の語りを聴く、防災公園での設備見学とテント設営（③）、地震や津波に強い防災住宅の見学、多数の東日本大震災関連の蔵書を有する最新の免震構造で新築された名取市図書館の活用、そして閖上地区でのフィールドワークである。フィールドワークでは、津波の高さを模した慰霊碑（④）、流されなかった日和山を視て、津波からの避難と悲嘆の体験の語り（⑤: 2 列目左から 4 人目が語り部さん）を聴き、カナダからの支援資材で建設された施設や複数の商業施設にて、嗅いで味わい、閖上の造成地（⑥）を歩いた。感性豊かで素直な学生たちは、主体的に行動し、語りの内容に驚愕し、時に涙を浮かべ、積極的に現地の方に触れ、体験からの学びをミーティングで共有し、思考を深めた。最終日には、班の目標の達成状況を発表し、現地での学びを「命が大切」「普通に生活が送れることは当たり前ではない」「根拠のない‘大丈夫’はない」「震災を伝える」「挨拶、大きな声、コミュニケーションが大事」などと一言ずつ発表した。（⑦）。事後学修授業では、学内での再会を喜びながら、他の班と意見交換をして、学びを自分たちの言葉でまとめた。

最終的に学生たちは、自分の参加動機に立ち戻り、事前学修した知識や情報、班の目標と達成状況、現地での体験や活動からの気づきと学びをレポートに記した。さらに、事後学修授業からの学びや今後自分が災害について行動したいことを記載した。記載内容は、現在のみならず将来を見通した大学を卒業した後の人生における被災時や防災の活動について、また周囲や地域の人々への防災・減災対策の知識やスキルの提供、さらに国内外に向けた防災や復興の発信について等であった。

つまり、本 FS に参加した学生たちそれぞれが、被災・防災・減災・復興に対する知識やスキルを主体的に得て、創造的に思考し、将来および世界の課題とつなげ思考を深めていたのである。現地での生活、とりわけ生と死が隣り合わせであった被災、防災・減災・復興に関する真実を誠実に伝えてくださる現地の方々との交流が学生たちの心に大きく響き、「アクティブな知」として学生たちは掴んだといえるのではないだろうか。今後の大学生活の中で、学生たちが思考を追求し、社会人として行動できるような学科での学びの支援につなげていきたい。

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

担当教員コメント

看護学部　看護学科　講師
山本 摂子

東北出身者として被災地で何かお役に立ちたいと思い、昨年度より本プログラムを担当しています。学生たちは全員が名取市での体験を楽しみつつ、真剣に目を輝かせて取り組みます。その真摯な姿が、受け入れ先の方々を刺激して、「もっと体験させて伝えたい」との思いにつながり、体験者・支援者の枠を超えた相互作用が生まれ、互いの思いが共鳴し、響きあい、高まっていました。現地でしか生じ得ないこの体験を支援してくださった全ての方々に深く感謝申し上げます。

宮城県名取市
一般社団法人震災復興支援協会つながり
防災士　宮城県防災指導員　**太田 幸男　様**

東日本大震災で多くの尊い命が失われた名取市閖上の地に於いて、歴代学生の皆様には、復興支援のボランティア活動を行って頂きました。それが、平成 27 年に文部科学省に採択された「フィールド・スタディーズ」の学外学修プログラムにつながっています。

採択に伴い、復興支援から防災・減災へ主眼を変えました。参加した一人一人が、被災地と向き合い五感で感じ、防災・減災に取組み、幾多の災害にも負けず命を守る為の「危機管理」という第六感を育むプログラムです。

国内短期プログラム / 宿泊型　　派遣期間　8/26 ～ 8/28

京都・西本願寺を中心とした仏教フィールド・スタディーズ

～仏教思想・仏教文化の源流を探る～

参加人数：40 名　／　学科：日本文学文化学科　グローバルコミュニケーション学科　日本語コミュニケーション学科　経済学科　経営学科　会計ガバナンス学科　データサイエンス学科　人間科学科　環境システム学科　数理工学科　教育学科　看護学科

京都・西本願寺の宿泊施設を拠点として、寺院の活動や茶道などの日本文化を体験し、日常生活や伝統文化に深く浸透している仏教の思想や文化の一端に触れること、また、法話やグループディスカッションを通して、自分自身を見つめるきっかけとすることを目的としています。

研修先情報　本願寺（西本願寺）：浄土真宗本願寺派本山。浄土真宗本願寺派総合研究所：浄土真宗本願寺派の研究機関。藪内流燕庵：藪内流茶道家元。天龍寺：臨済宗天龍寺派本山。

「京都・西本願寺を中心とした仏教フィールド・スタディーズ　～仏教思想・仏教文化の源流を探る～」（以下、「京都・仏教 FS」）は、日本の伝統が色濃く残る京都での２泊３日という行程の中で仏教思想・仏教文化に触れ、それらが日常生活に浸透していることを体得することを目的としています。本プログラムに参加する学生には、日常生活の中にも仏教的な考え方、あるいは仏教の影響があることを体験してもらいます。また、法話やグループディスカッションを通して、自分自身の生き方を見つめなおし、これまでの境遇や今後の人生について考えを深めていただきます。これらの学びが、大学生活の充実のみならず、生涯にわたる「大切なもの」を探求する機会となることを期待して本プログラムは実施されています。

本プログラムは，本学建学の拠り所である仏教、とりわけ浄土真宗の教えを京都で学ぶ機会を本願寺派宗務所社会部の多方面にわたる協力を得て始まったものです。それゆえ、当初は、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人の京都での足蹟を辿るフィールドワークや、本願寺派僧侶による法話を聞く機会を多くして、いのちの有難さの実感を通して自分自身の人生を考えるという内容が中心で、浄土真宗の教えを学ぶことに重点が置かれていました。

また、以前のプログラムでは学生自身が見学したい寺院などの仏教関連施設を自由に選択し、各々が事前に調査してから訪ねるという自由散策も行程の中にありました。しかし、結果的に、例えば、清水寺と親鸞聖人の御廟所・大谷本廟とがともに京都東山のほど近い場所にあることを十分に把握しないままに、同じような場所に再度足を運ぶといったこともあり、毎年少しずつ構成と内容の両面からプログラムの改良をしてきたという経緯があります。

今年度のプログラムについては、基本的には昨年度の内容を踏襲していますが、上記のような問題点を改良して、次のような内容で実施しました。

・晨朝勤行（本願寺）への参拝
・本願寺の見学
・念珠作り
・（浄土真宗の）儀礼・作法の研修
・茶道（藪内流）の体験
・坐禅と精進料理の体験
・法話
・グループディスカッション

以上のプログラムを２泊３日で行う中、１日目・２日目の各晩にはその日の学修内容のふりかえり、及び翌日の準備（事前学修含む）のためのミーティングも行うため、現地での学修時間は早朝６時頃から夜は 21 時頃までという、他の FS プログラムに比べると、かなり密度が濃い内容となっています。

また、他の FS プログラムと同様に、本プログラムにおいても、事前学修・事後学修を現地での学外学修をよりよいものとするために設けています。事前学修では、本プログラムの学外学修で訪れる寺院の歴史などを座学で、また、作法の基礎を実際に経験します。一方、事後学修では、学生に学外学修を通して新たに知り得たことや、今後の日常生活にいかせることなどを班ごとに発表するということを課しています。

今年度のプログラムの大枠は昨年度に固められましたが、それ以前のプログラムにおける目的が「浄土真宗の教えを学ぶこと」であったのに対し、本年度プログラムの目的は、浄土真宗および仏教の教えや文化を学ぶことにくわえて、それらを通して自分自身のあり方をみつめる、へと変貌を遂げています。そして、この目的を達成するための核となるプログラムとして、法話とグループディスカッションを設けていますが、プログラム全体の順序にも配慮をしています。

まず、最初の「念珠作り」では、珠の種類や紐の色を各自の好みで選び、班ごとに協力しながら既製品ではない念珠を作ります。この「念珠作り」は、それ以降の研修や実習への主体的な参加を促すとともに、様々な学科から参加した学生間のコミュニケーションを活性化させ、最終日のグループディスカッションにつながることを期待したものです。

また、「儀礼・作法の研修」では、寺院の活動への参加に際しての心持ちを学びますが、「晨朝勤行」などに参加する際のあるべき態度、およびその意味をより自然に意識するようになることを期待して初日にプログラムが組まれています。実際に、学生たちは晨朝勤行に早朝から参拝に来る一般の方を間近に見て、生活と密着した仏教の様子を肌で体感します。

「茶道の体験」では、日本の中世から近世にかけて成立した日本の伝統文化を代表する茶道の作法に、仏教の思いやり（慈悲）の精神があることを見ます。一方、「坐禅の体験」では、日々のこころを内省し、また、肉類を一切使わない「精進料理」によっていのちの有難さを実感するという経験をしますが、このような経験をした後に聞く「法話」は、自然と学生自身が「問い」を深めることにつながります。

ここ数年の「法話」には、浄土真宗本願寺派総合研究所研究員の赤井智顕先生を招いて、「仏教を学ぶこと」をテーマに話してもらっています。法話の中で、“これまでの自分自身の生き方を省みて、気付かない間に独りよがりなものごとの見方をしてきていることに気付くことが、仏教を学ぶことの一つの意味である”と聞いた学生が、自分自身のこれまでの考え方や行動について内省する時間をもちます。

そして、最終日に設定されている「グループディスカッション」では、本学と同じ仏教、とりわけ浄土真宗の教えを建学の精神とする龍谷大学の教室をお借りし、また仏教・浄土真宗を学ぶ大学生および大学院生にボランティアとして参加してもらい、京都・仏教 FS での３日間の総括として、儀礼・作法の意味や、仏教が現代社会にどのように生かせるかをテーマにディスカッションを行います。

以上のように、京都での学外学修を通して感じ、学んだ成果については、後日の事後学修において、班ごとに学生に発表してもらいます。発表の内容には、独りよがりな自分自身のこれまでの態度を反省した、相手を思いやることの大事さに気付くなどの「気づき」とともに、それが相手に伝わるために正しい行動をとる、などの今後の生活における「心がけ」も多くみられました。本プログラムを経て時間があまりたっていない時機の発表ということもあってこのような意見が多くみられたとも考えられますが、仏教思想や仏教文化を学ぶことを通して自分自身を省みてこれからの学生生活にいかしていく、という本プログラムの目的が、多少なりとも達成されているのではないかと思われます。

本プログラムは、学科が設定した FS とは異なり、参加した学生のキャリアに直結する学外学修を提供するものではありません。また、直接に就職・キャリアに結び付く実習を行うこともありません。というのも、本プログラムは、学生のキャリアだけではなく、キャリアを含めた人生（一生）における「大切なもの」に気づいてもらうことを目的としたものだからです。人生において困難な場面に遭遇し，その都度迷いながら人生を構築していくことも当たり前のことです。そのような「当たり前」を理解し、自分自身の価値観をその都度見直して日々の生活に向き合う「ものの見方」を提供するという本プログラムの目的が、ほんのわずかかもしれませんが、参加者に届いたということを示す学生の感想を紹介して結びとします。

「この FS に参加して、大学生でいられることが当たり前ではないことに気付いた。自分に甘えて遅刻や欠席も平気だったが、これからはそういったことは無くしていこうと思う」

「感謝の気持ちを持っていたつもりだったが、それをきちんと態度にあらわすことが、相手にとってだけでなく、自分にとっても大事なことだと分かった」

「これまで何事も損得で考えて、行動していた自分の態度を改めようと思った」

「自分の「物差し」（=「ものの見方」のこと　※引率者による補足）が絶対のものだと考えず、相手の立場に立って考えることが大切だと分かった」

「「平均寿命」は、必ずその年まで生きられるということではなく、死は生と隣り合わせであるのが当たり前なのだから、人生の一瞬一瞬の時間を大切にしていこうと思った」

担当教員コメント

教養教育部会　講師
長尾 重輝

この「京都・仏教 FS」は、２泊３日という短い期間に濃密なスケジュールをこなすので、修学旅行をイメージして参加した学生は戸惑うことも多いと思います。ですが、参加した学生が，自分自身のいのちが支えられていることを感じ取り、最終日のグループディスカッションではほぼ初対面であるにもかかわらず、赤裸々に自身の考え方や価値観と向き合い、それぞれの意見を述べている様子を見るたびに、本プログラムを支えてくれているすべての方々に感謝の念を新たにしています。

教養教育部会　講師
新作　慶明

「京都・仏教 FS」に参加した学生さんたちは、晨朝勤行・坐禅・法話の拝聴などの非日常的な体験を契機として、自分本位の価値観を見つめ直すことができたのではないでしょうか。また、仏教思想・文化の根底にある「つながり」を感じることができ、他者に対する感謝の心が生じてきたことかと思います。本 FS を通しての「気づき」を大切にして、今後の人生を歩んでいっていただきたいと思います。

国内長期プログラム / 宿泊　　派遣期間　8/13 ～ 9/6

山梨県　西桂町
地域福祉推進プロジェクト

参加人数：10 名　／　学科：法律学科　データサイエンス学科　社会福祉学科　こども発達学科

地域活性化と地域福祉推進のための活動を行います。町の人が大切にしているもの、町の素晴らしさを Facebook や Instagram で全国に発信します。町の人びとの暮らしを理解するために、町に住む人たちの声を拾い上げ、地域の課題に対する解決に取り組みます。

研修先情報　西桂町は山梨県南東部に位置し、人口 4,294 人（2019 年 10 月現在）、15 ㎢の面積の 80%近くを山林が占めます。高齢化率は 27.7%（2018 年）。富士急行線や中央自動車道の利用で首都圏へのアクセスが良い地域です。

【このプログラムの紹介】

西桂町プロジェクトの全体のフローは、西桂町を知り、課題やニーズを把握し、解決策や支援方法を考え、報告・提案・実践することである。地域活性化と地域福祉推進をミッションとするこのプログラムにおいて、いかに多くの西桂町の人びとの声を拾い上げるかが鍵となる。このことを踏まえ、2019 年度のプログラムは、西桂町役場総務課の川村北斗氏とその中身について話し合いを重ね、その結果まちの人びとが集まって行う活動に学生が参加することを通して交流を図ることを中心とする内容となった。

【プログラム内容】

8 月 13 日から 9 月 6 日までのプログラム内容は、大きく 5 つに分けられる。①西桂町夏祭りへの参加を通した交流。毎年行われる西桂町の夏祭りの準備を手伝い、当日は祭りのスタッフとしての参加、そして祭りの終了後は片付けを行うこと。②Facebook による西桂町の魅力の発信。学生たちがまちを歩き、学生目線でまちの新たな魅力を発見し、多くの人びとに伝えること。③これまで先輩が行った調査結果の分析。過去のデータから見えてくることをまとめる作業。④地域のサークルへの参加と交流。サークルへの参加を通して、西桂町で暮らす人びとの声を聴き、まちの課題を探すこと。⑤まちの課題の解決策の提示。最終日の報告会を通して、まちの人びとに課題と解決策を発表すること。

これらのプログラムを通して学生が自分で考えて行動することで、自分の専門分野を踏まえて地域やそこに暮らす人びととのつながりを体感することができると考えた。

【事前学修の内容】

このプログラムを実行するためには、さまざまな基礎知識が必要となる。事前学修では、質的調査のための方法や調査マナーなどの注意点、データのまとめ方などを講義した。さらに、調査のためのグループ作りを行い、20 日間共同生活を送ることへの注意点や心構えを伝えた。また学生たちに 20 日間の生活に必要な物品を検討してもらい、自分たちだけで生活をすることに対する自覚を促した。西桂町のことを調べてくることを宿題として、8 月を迎えた。

【活動報告】

8 月 13 日晴れ。10 時に三つ峠駅に集合。その 5 日前から台風の接近のために開始を 1 日延期するかどうかのやりとりが川村北斗氏とあった。台風 10 号は日本列島に接近しつつあったが、13 日の天候は問題なく、学生たち 10 人は無事に西桂町に到着できた。学生は役場に到着して、川村北斗氏に自己紹介、また小林千尋町長にご挨拶をした後、川村氏から台風の接近のため夏祭りが中止になったことが告げられた。

台風による翌日からのプログラムの変更には川村氏にご対応いただき、役場での仕事の体験に加え、保育所で子どもたちと紙ひこうきを作って遊び、デイサービスで利用者と体操や折り紙をして交流するなど、まちに住む人たちと接する機会を設けていただいた。

台風が過ぎ去り、学生たちはまちの魅力を探しにまち歩きに出かけていった。風景を写真に撮り、感じたことを記事にして、Facebook での情報発信を毎週 1 回行った。まちの情報については、地域おこし協力隊のお話を伺うことで西桂町の織物の歴史を学び、ギャラリー見学で四季折々の西桂町の自然を写真で知ることができた。

地域の課題を発見し、解決策を提案するといってもまち歩きだけでは分からない。3 年目のプログラムなので、過去 2 年間の先輩たちの行ったインタビュー調査のデータを 3 グループに分かれて KJ 法で分析する作業を行い、全体に共有した。学生たちは、これまでの調査で明らかになったことを検討したことで、自分たちのテーマが見つけやすくなったと感じたようである。

その後は、いよいよまちの人々との交流である。3～4 名ずつ、「そばの芽会」、「手織りクラブ」、「ふれあいサロン三つ峠水仙」のサークルへの参加、さらにデイサービスセンター、保育所、子育て支援センターへの訪問、職員からのお話、利用者との交流などである。

「そばの芽会」では、そば打ちを体験し一緒にそばを食べながら、「手織りクラブ」では、実際に手織り体験をして自分の作品を作りながら、まちや生活のことを聞き取り、「ふれあいサロン」では、事前に検討した項目についてインタビューを行った。

デイサービスではお誕生会とレクリエーションへの参加を通した利用者との交流や副所長へのインタビュー、保育所では園児への絵本の読み聞かせの体験、子育て支援センターでは子育て中の母親へのインタビューができた。さらに、これらの活動を通して知り合った人たちのご自宅への訪問インタビューや川村氏から紹介してもらった商工会議所会頭や町議会議員にもお話を伺うことができた。

これらの活動の総括として、西桂町きずな未来館においてまちの人たちに向けた FS 報告会を実施した。会場には 50 名余りが集まった。第 1 グループは、「西桂町は農振を使うしかない！！」をテーマに、空き地の有効活用と災害危険区域に住む人びとの安全を結びつけ、農業振興地域（国の方針で知事が決めた農地）を宅地にして危険区域の人に移住してもらうこと、公益性の高い施設（避難所）を増やすことを提案した。第 2 グループは、「街へ行こうよ　西桂」をテーマに、西桂町のバスや電車の本数の少なさや運賃の高さと高齢化の進展に着目し、高齢者の移動手段として、まち独自のタクシー、例えば山梨県上野原市のデマンドタクシーのようなものの導入を提案した。第 3 グループは、「人の集まる西桂へ」をテーマに、商業施設の少なさや公園が欲しいというまちの人の要望を踏まえ、西桂町の大自然の魅力を生かして、山を一部開拓して自然の中にレジャー施設を作ることを提案した。これらの報告を踏まえ、まちの人たちからの質疑と応答があった。

【おわりに】

学生たちは、社会福祉学科、法律学科、データサイエンス学科、こども発達学科に所属しており、それぞれの学科で学んできたことや得意なことを生かしてこのプロジェクト内での自分の役割を見つけ、力を発揮することができていた。この活動がこれからの専門的学びに生かされていくことを強く願う。

最後に、このプロジェクトの運営にあたり多大なるご支援をいただいた西桂町役場の皆様、学生からのインタビューにお答えいただいた皆様、そして何よりも 20 日間の学生の共同生活を見守ってくださった西桂町の皆様に厚く御礼申し上げます。

担当教員コメント

人間科学部　社会福祉学科　教授　**高田 明子**

地域＆地域住民がより幸せに豊かになるにはどうしたらよいかについて、フィールドワーク（街歩き、フォトボイス、ヒアリング調査、アンケート調査、データ分析等）を用いて地域の課題を発見し、支援策・解決策を考察しました。それらをまとめ住民への報告会を実施し、多くの学びと成果を生むことができました。学生の最大の学びは、ひとりひとりの住民から伝えられた「地域で生きる」ということだと受けとめています。「地域で生きる」姿からは、生活することの意味、人の温かさや優しさ、人と人との繋がりの重要さ、自分自身の将来への想い等、今後の人生の礎となる大切なことを学ぶことができたと思います。このような機会を頂き、西桂町の皆様に深く感謝申し上げます。

人間科学部　社会福祉学科　教授　**野口 友紀子**

出会って数日しか経っていない学生同士が 20 日間の共同生活をすることが最難関か。誰かが引っ張ってくれるという受け身の姿勢では、何も始まらない。逃げ場のない知らない町で、プロジェクトの使命だけでつながっていた 10 人が、一緒に生活して自分をさらけ出し、そして協力しあって報告会を実施する。この体験は、これからの専門教育を受ける姿勢によい影響を与え、積極的な学びにつながるだろう。

西桂町役場　総務課　**川村 北斗様**

武蔵野大学と西桂町のこのプロジェクトは今年で 3 年目を迎え、西桂町民の多くの皆様に武蔵野大学の活動が認知されてきました。それは、これまでの学生たちの活動の努力があったからこそだと思います。このように、このプロジェクトでは、毎年の積み重ねが西桂町の、武蔵野大学の今後の大きな財産になります。その成果として、学生から事業提案された「公共交通」に関する内容が西桂町において事業化されることが決定しました。今後、西桂町がどのように発展・変化していくのか、引き続き、西桂町のことを気にかけていただけると幸いです。学生たちのこれからの活躍を楽しみにしております。

国内長期プログラム / 宿泊型　　派遣期間　8/8 ～ 9/9

はばたけ秋田県上小阿仁村!
人口2,300人の小さな村が発信するアートプロジェクト
～人口の4割が70歳以上の村～

参加人数：長期 6 名　短期 39 名　／　学科：長期：政治学科　人間科学科　社会福祉学科
短期：日本文学文化学科　グローバルコミュニケーション学科　日本語コミュニケーション学科　経済学科　経営学科　会計ガバナンス学科　データサイエンス学科　人間科学科　社会福祉学科　こども発達学科　環境システム学科　数理工学科　建築デザイン学科　教育学科　看護学科

学生たちは少子高齢化の進む山間の村に長期滞在し、2012年から続くアートイベントのかみこあにプロジェクトのお手伝いや、上小阿仁村高齢者生活福祉センターや特別養護老人ホーム杉風荘でボランティアをおこなった。

研修先情報　上小阿仁村は秋田県のほぼ中央に位置する南北に長い山あいの村で、総面積の約９３％が山林原野に占められている。村民は２，３００名ほどで、高齢化率は約５０％を数える少子高齢化のとても進んだ村である。

本プログラムは､①上小阿仁村の新たな魅力の発見、抱える問題、集落の活性化について考える②ボランティア体験を通し人や社会とのつながりを知る③ボランティアで得たことをこれからの大学生活に役立てるを目的としており、今年度は６名の学生が一か月にわたり秋田県上小阿仁村でお世話になった。同村における短期プログラムは６年目になるが、長期プログラムは昨年度より始まったばかりである。学生たちは昨年春に完成した上小阿仁村集住型宿泊交流拠点施設（愛称：コアニティ）に滞在し、主にかみこあにプロジェクトのお手伝いや、上小阿仁村高齢者生活福祉センターや特別養護老人ホーム杉風荘でのボランティアをおこなった。

かみこあにプロジェクトは２０１２年から始まった「里山の魅力を発信するプロジェクト」で、「現代アート・音楽・伝統芸能の３つの部門を軸にして、現代のアーティストたちによる表現が、上小阿仁村の人や風土、伝統と重なり、様々な風景を作り出すこと」を目的としている。今年は「それぞれが作品を持ち寄り設置するだけでなく、期間中の滞在制作や公開制作をはじめ、『見る・聴く・食べる・つくる』に繋がるワークショップ部門を横断しながら、上小阿仁村で人々との交流を創出すること」（以上、引用はかみこあにプロジェクトのホームページより）を目指し、８月１０日から９月８日まで開催された。同プロジェクトは村役場から車で３０分ほどかかる八木沢会場のほか、村の中心に位置する沖田面会場と小沢田会場からなっており、村全体を使い開催された。

学生たちは同プロジェクトにオープニングからクロージングまでかかわった。その間、アーティストの方たちと交流し、村の園児たちとの共同制作、９月５日におこなわれた「アートを巡る健康ウォーキング」イベントでの作品解説など、さまざまなお手伝いにかかわらせていただき､とても貴重な経験をした。

とくに「アートを巡る健康ウォーキング」での作品解説は、アーティストの方たちと何度も打ち合わせし、短期プログラムの学生たちを相手に練習を重ねており、同プロジェクトのお手伝いとして集大成ともいえるイベントであった。当日は担当教員も参加したが、村役場の方から、学生たちは練習を重ねるごとに説明が上手になっており、本番もとても上手くできたとお褒めいただいた。

また、学生たちは同プロジェクトのお手伝いだけでなく、デイサービスを主におこなう上小阿仁村高齢者生活福祉センターや特別養護老人ホームの杉風荘にも足しげく通い、施設の掃除や飾りつけのお手伝いのほか、利用者・滞在者の方たちとの交流を楽しんだ。

本プログラムの大きな特徴は、短期プログラムの学生（今年度は５班実施した）と同じ場所に宿泊し、時に一緒に行動することである。とくに短期１班とはまったく同じスケジュールをこなした。秋田県の郷土料理である「だまこ汁」を婦人会の方たちと一緒に作り楽しんだほか、村役場から車で１時間ほど山奥にある萩形キャンプ場でのキャンプ、村一番の観光名所であるコブ杉の見学、近年村が力を入れている食用ほおずきの収穫のお手伝いや、村の野菜を使った創作料理にも挑戦し、長期の学生たちは短期の学生たちと一緒に村のことを学んだ。その経験を２班以降に活かし、郷土料理や創作料理作りに参加し、短期の学生たちをリードした。村に溶け込んでいく長期の学生たちの姿は、短期の学生たちにもよい刺激となったようである。

担当教員が村役場の方と本プログラムについて打ち合わせを重ねた際、大きなテーマは学生たちをいかにして村民の方たちと密に交流させるかであった。コアニティはとても居心地のよい宿泊所であるが、それゆえにコアニティだけで生活が完結してしまう恐れもあったからである。しかし、村役場をはじめとする村民の方たちの温かさのおかげで､それは杞憂に終わった。学生たちは、村民やアーティストの方たちとの交流のほか、村の子供たちととても仲良くなり、また、村の体育館でおこなわれているスポーツサークルにも積極的に参加し、多くの方たちと交流することができた。こうした経験を通じ、学生たちは少子高齢化の進む村について多くのことを学び考えただろう。

なお、長期の学生たちには、村の CM 動画を作成することが滞在中の課題としてだされた。当初、1 人ひとつずつ作成する予定だったが、学生からの要望で、全員で６本の動画を作成することになった。これは、学生たちがよいチームワークを作り上げたことの証左といえるだろう。（担当教員がほめるのもはばかれるが）学生たちの作成した動画はどれも素晴らしく、文章で伝えられないのが非常に残念である。

本プログラムによって学生たちは、少子高齢化の進む上小阿仁村の現状や取り組みについて、ボランティアを通じて多くのことを経験し学んだ。異なる学部学科から集まっているため、学生たちの問題意識はそれぞれ異なるが、ここでえた知見は、それぞれの今後の大学生活における専門的な学びに必ずや活かされるだろうと、心から確信している。

担当教員コメント

学外学修推進センター次長
法学部　政治学科　准教授
後藤 新

私自身が村のファンで、学生たちにも村の素晴らしさを感じてほしいと願い、村役場の方と相談を重ねプログラムを組み立てています。学生たちは濃密な一ケ月を過ごし、あっという間に私より村に詳しくなり、村の方たちと仲良くなっています。村で過ごし経験したことは、目に見えることも見えないことも、一つ一つが学生たちの成長につながっています。これからも一人でも多くの学生に、村での生活、出会いや交流、経験を通じ、様々なことに気づき学んでほしいと願っています。

上小阿仁村役場総務課企画班
課長補佐 **中島 英樹様**

秋田県内の屈指の高齢化が進む村で、福祉現場のサポートと最奥地で開催する芸術祭のボランティアガイドに協力していただきました。どんな地域にもその土地に根付いている大切な「もの」があります。今回のＦＳは、その本質を自分たちで探し出し、理解し、触れてみるそんな旅をするような滞在でした。
自然や人々が受け継いできた伝統に触れ、自分だけでは作れない空間で、時には雨にあたり、イベント運営の力仕事もこなしました。インタビューしながらノートに書き写し自分たちの力で考え実践したツアーガイドは、見守る私たちに感動を与えてくれました。地域の魅力を探りＰＲ映像にまとめた発表はとても貴重な提言になりました。

長期フィールド・スタディーズ　宿泊型　　派遣期間　8/20 ～ 9/10

ブッダ慈悲の道

参加人数：10 名　／　学科：日本文学文化学科　グローバルコミュニケーション学科　法律学科　データサイエンス学科　人間科学科　社会福祉学科　建築デザイン学科　こども発達学科

インド、ミャンマー、タイの三国を訪問し、とくに「仏への祈り」を主テーマとして、そこに行われている仏教と暮らしを総合的に体験する。仏教思想の広がりを体験し、本学の根本理念である仏教や日本の文化を見る目をやしなうとともに、暮らしの中での日本との繋がりあいを感得する。

研修先情報　インドにおいてはコルカタとラージギル（霊鷲山）にあるベンガル仏教徒協会で同協会の宿舎を利用した。ミャンマーとタイにおいてはサイアム大学の日本語学科学生との学生交流事業の下に多くの町を訪問した。

今回第一回目となる FS「ブッダ慈悲の道」は、本学の教育理念の柱である仏教精神のおおもとであるブッダにゆかりの地を訪ね、現代も各地に脈々と息づく仏教への熱い信仰の姿に触れることで、日本に生きる私たちがその精神をどのようにして学業や仕事に生かしていくべきかと考えるきっかけとすることを目的としている。その意味で本 FS は単なる仏蹟参拝の旅とは異なり、あくまで現代に生きる仏教徒たちの姿を通じて現代の日本と未来の日本とを考える未来志向の旅である。

また同時に本 FS はインド、ミャンマー、タイというそれぞれ個性的な三か国を訪ね、そこに暮らす人々の生活をできるだけ間近に見ることによって、現代の日本で私たちが実際に送っている生活をあらためて外側から見直すことも大きな目的としている。そこには日本に比べて厳しい点もうらやましい点もたくさんある。しかし、子供を育て、仕事をし、老いて、死にゆく中でそれぞれが幸せをめざして苦闘を重ねているのだということに気づくことが大切である。その気づきを土台としてこそ、今後の専門分野の学業と仕事の質を飛躍的に高めていくことが期待されるからである。

8 月 20 日のごく早朝に東京を出発し、バンコクで飛行機を乗り継ぎ、午後には第一の訪問地であるコルカタに到着した。宿舎のベンガル仏教徒協会には寺院も併設されており、上座部僧も数人が滞在している。一行は寺院長に挨拶をして、さっそく全員本堂に集合して無事の到着を仏さまに感謝する法要を執り行った。導師を務めてくれたのは本学大学院仏教学研究科修士課程に在学している浄土真宗本願寺派宝林寺（練馬区）副住職の羽田慶仁氏だった。

インドではその後、鉄道でダージリンに向かい、亡命チベット人の経営するチベット式ホテルに投宿し、チベット仏教の寺院の食事風景、勤行風景を見学した。また、ダージリンに残る世界遺産の山岳鉄道とお茶のプランテーションを訪問した。しかし、雨期の悪天候のためにカンチェンジュンガ山がまったく見えなかったのは、学祖高楠先生の号「雪頂」にゆかりの山であるだけに残念であった。

ダージリンの後、再び鉄道でパータリプトラに下り、深夜にベンガル仏教協会のラージギル宿舎に投宿した。翌日、サイアム大学日本語学科の教員学生一行と合流し、ラージギルに登り、ブッダゆかりの山頂の拝所で再び羽田慶仁氏を導師として礼拝を行った。さらに翌日早朝にラージギルを発ち、ブッダの成道の地ブッダガヤー、ナーランダ大学跡を見学しつつ、ヴァラナシに抜けた。ブッダガヤーの菩提樹で礼拝を行った。

ヴァラナシでは町全体が大きな見どころであったが、とくにサールナートの初転法輪の仏跡では羽田慶仁氏を導師として仏塔に対して礼拝を行った。サイアム大学一行も熱心な仏教徒であり、合同礼拝となったのは楽しいことであった。

次いで一行はミャンマーに歩を進め、ヤンゴン市中のスーレパゴダ、郊外のシュエダゴンパゴダ、チャウタッジー寝釈迦などを見学し、ミャンマーの人々の仏教信仰の篤さにいまさらながら感じるものがあった。ミャンマーではモールメン管区にある聖地チャイティヨー仏塔へのエクスカージョンも行った。これは険しい山の中にあるモーン族の巡礼地であり、トラックの荷台に載せられていくのであるが、雨期の悪天候のためにカッパを着ていても服が濡れてしまう苦しい旅になった。

最後の訪問国であるタイには、チエンマイから入国することになった。チエンマイはタイの中での「北の都」として知られている町であるが、ヒマラヤの裾野であるダージリン、マレー半島の付け根の山地にあるチャイティヨーと見学してきて、チエンマイがそうした山地の文化圏における「南の都」なのだという新たな気づきがあった。ラムパーン、スコータイと鉄道や路線バスを乗り継いで旅を進め、バンコクにたどり着き、摩天楼ときらめく仏塔の中で旅を締めくくることができた。

担当教員コメント

学外学修推進センター長
教養教育部　教授
山田　均

「ブッダ慈悲の道」は海外に行く FS の中ではかなり修行度の高いものです。インド、ミャンマー、タイの旅というのは多かれ少なかれ過酷な部分がありますし、その過酷な部分を何とか軽減して快適にしようということは担当教員としてはまったく考えていないので。したがって宿泊は巡礼宿、夜行列車も雨中の移動も当たり前、食事も現地食のみという厳しくも楽しい旅となりました。もう一つ楽しかったのは、ブッダガヤ、サールナート、ラージギルといった仏教の聖地に詣で、同行した僧籍を持つ大学院生に導師を務めていただいて、武蔵野大学としてお勤めができたことです。世界中から集まってきた仏教徒の祈りの中で、インドの空にお念仏が響くなんてすばらしい。また、インドとミャンマーではタイからサイアム大学日本語学科の学生さんが合流して、ぐっと仲良くなれたこともきっと双方にとって刺激的な体験だったろうと思います。参加した皆さんが、今回の旅から受けた感動をよくお腹の中で味わって、将来のバランスの取れた世界理解につなげていってくれることを念じています。

海外短期プログラム / 宿泊型　　派遣期間　7/23 ~ 7/29

バイリンガルの専門家と一緒にアメリカ現地工場視察

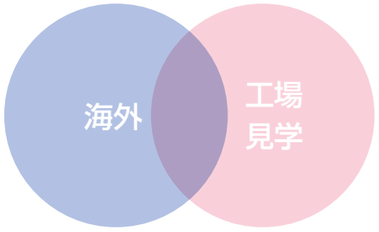
参加人数：10 名　／　学科：経済学科　経営学科　人間科学科　環境システム学科

本プログラムの目的は、アメリカ・シカゴ周辺の工場や店舗を視察し、そこでの体験や経験を学修に繋げることです。安全管理を専門とするバイリンガルの研究者と共に視察を行なうことで、現地にいながら、専門的で高度な知識を日本語で学べることが本プログラムの強みです。

研修先情報　① NB Coating。自動車の車内・車外のプラスチック製品のコーティング剤を主に製造している企業。② BP Group。世界最大級のエネルギーグループ企業。③ Cargill。世界に食品や、農産品、金融商品、工業製品や関連サービスを提供している企業。

【本プログラムのネライ】

本プログラムの企画設計の段階で最も重視したのは、学生が武蔵野大学に入学したからこそ得られる機会を提供する。逆に言えば、**武蔵野大学に入学しなかったら得られなかったであろう機会**を提供することでした。そこでキーワードとなったのが、**海外と工場見学**です。



単なる海外旅行ならば、武蔵野大学に入学しなくても可能でしょう。また、国内の工場を見学する機会ならば、例えばビール工場などが提供しています。しかし、両者の組み合わせ、すなわち**海外の工場を直接見る機会を得ることは非常に難しい**と考えられます。「見学を受け入れてくれる工場は、どのように探せばよいのか？」「受け入れてもらうために、どのようなお願いをすればよいのか？」このように、海外の工場を実際に見学するために行なわなくてはならないことは多く、そのほとんどが、大学生、特に１年生にとっては非常に敷居が高いこととなるでしょう。

その一方で、**大学を卒業する前に、海外における工場の現場を体験することの重要性は非常に高い**と考えられます。企業活動のグローバル化がすすみ、多くの日本企業が海外の工場で製品を生産していることは、いまさら強調する必要はないでしょう。したがって、学生の将来キャリアの中で、海外の工場のマネジメントなどを任される可能性は低くありません。しかし、以上で挙げた理由から、在学中に海外の工場を直接見る機会は極めて限られているのが現状です。このギャップを埋めるのが、本プログラムの基本的なネライです。

【工場での経験を学びにつなげるコーチの存在】

当然ですが、工場をただ見るだけでは学修に繋がりません。実際の経験を振り返り、概念化し、次の実践へと応用し、そこで得た経験を改めて振り返る、といった経験学習のプロセスをまわすことで初めて，経験は生きた知識となるのです。しかし、学部 1 年生が、おそらく人生で初めての海外の工場において、それらのプロセスを自主的に進めることは難しいでしょう。「工場に行っただけ」というプログラムになってしまうことを避けるためには、経験学習のプロセスをサポートするコーチの存在が必須となります。

しかし、**海外の工場という特殊な経験を学びにつなげるプロセスをサポートするためには、単なるコーチング以上のスキルや知識、経験が必要**となります。第一に、**専門的な日本語と英語を話せる語学力**です。海外の工場で働いている現地社員のほとんどの方々は日本語を話すことはできません。もちろん、学生が彼 (女) 等の話を英語で直接理解できるに越したことはないでしょう。しかし、本プログラムの対象が１年生であることに加えて、製造や技術に関する専門的な語彙は英語が得意な人にとっても理解が難しいと考えられるため、バイリンガルの能力を持つ人によるサポートが大きな助けとなります。また、工場で働いている方に、本質的で難しい内容の質問を行う際にも、そのようなサポートが必要となるでしょう。したがって、本プログラムを担当するコーチには専門的な日本語と英語が話せる語学力が求められます。

第二に、**工場の現場に関する専門の知識と教育の経験**です。工場の現場についての経験や知識のない学生が、自身の経験を学びへと繋げるためには、製造や技術について適切に理解することが前提となります。そのためには、製造や技術に関する詳しい知識を持ち、それらを非専門家や初学者に対して丹念に教えることができる人材のサポートが必要となります。したがって、本プログラムのコーチには、大学などの教育機関において、工場の現場に関わる領域について研究および教育を行っていることが求められます。

本プログラムでは、Purdue University Northwest (PNW) にて、**工場などの安全管理の問題を専門に研究し、多様な学生を対象に教育を行っている中山詔詞先生**が、学生の工場の視察に同行しました。中山先生は、**日本語と英語の両言語を話すことができ、視察先の会社についても詳しい**ため、本プログラムのコーチとしては最適でした。さらに、**自身がグローバル人材としてのキャリアを持つ**中山先生が事前授業や事後授業を行うことで、経験からの学びを学生の将来のキャリアへと結びつけるサポートも行うことができました。

【差別化としてのフィールドスタディ・プログラム】

最後に、**本プログラムの戦略的な意義**について簡単に述べたいと思います。現在、国内のほとんどの大学がフィールドスタディのプログラムを持っています。したがって、学外での学修の場を提供するだけでは，武蔵野大学に差別化をもたらすことはないでしょう。したがって、プログラムの設計において、他の大学が持ちえない武蔵野大学独自のリソースを用いることが決定的に鍵になります。

その点に関して、本プログラムは、**PNW とのパートナーシップの関係**という価値あるリソースを活用したケースだと言えます。単に留学生を交換するだけのパートナーシップ関係ではなく、**中身のある質の高いパートナーシップ関係**（例えば、本学経営学科が進める定量研究調査チームのメンバーである学部生が、毎年 PNW にて研究発表を行い、中山先生からコメントやアドバイスをもらっています）を維持しているからこそ、本プログラムの企画実行が可能となりました。さらに、そのようなパートナーシップ関係を持たない**他の大学には、模倣が難しいプログラム**を行うことができたのです。

担当教員コメント

経営学部　経営学科　准教授
宍戸 拓人

本プログラムに関して，私自身は企画のみに関わっただけで，実際の教育プロセスや見学先との調整などの業務の全ては中山先生にお任せしていました．そのため，中山先生には，かなり負荷がかかってしまったと思います．しかしそのおかげで，旅行代理店や教育系コンサルタントが販売している標準化されたプログラムとは異なり，効果的にカスタマイズされたプログラム，すなわち，中山先生のご専門や教育者としての想いに加え，武蔵野大学の学生の顕在的・潜在的ニーズを反映させたプログラムを行うことができました．

The Department of Construction Science and Organizational Leadership, Purdue University Northwest　Associate Professor
中山 詔詞

今回初めてフィールド・スタディーズのグループを引率させて頂きましたが，結果として生徒さん達に良い経験を与えることが出来たと思っています．今回は遥々来米すると言う事で盛沢山の日程になりました．米国企業，日系企業，そして欧州企業とグローバル的な工場見学をし，日米両国の外交的なお話もシカゴ日本総領事館にて総領事から直接伝授させて頂き，生徒さんの視野を広める為にも良い経験だったと思います．また日系企業と働いている日本人の方々ともお話を伺い，日本に居ては経験出来ない一週間でした．生徒さん自ら身をもって体験出来たと言う事は生徒さん自身また将来の日本を背負って行く社会人としてとても貴重な体験になったと思います．なかなか忙しい日程でしたが生徒さん達にも丁寧に対応して頂き有難く思っています．

海外短期プログラム / 宿泊型　　派遣期間　9/2 ～ 9/8

USA Los Angeles 医療・福祉・薬学施設視察研修（アメリカ）

参加人数：38 名　／　学科：人間科学科　社会福祉学科　薬学科　看護学科

アメリカ・ロサンゼルス周辺の病院および関連医療施設の見学、高齢者施設見学および施設利用者との交流、コミュニケーションに関するアクティビティを交えたセミナー、現地で活躍する日本人医療従事者からの最前線のお話、アメリカの学生との交流などを実施します。

研修先情報　ロサンゼルスはアメリカ西海岸の大都市であり、日本人も含め多様な人種が在住しているほか、ハリウッドなど有名な観光地も多数あります。雨季と乾季があり、本研修では日差しもまだ強烈な９月初頭の乾季に訪問しています。

本プログラムはロサンゼルスの医療福祉施設などを訪問し、日米の医療・社会福祉制度の違いや医療従事者としてのあり方について理解を深めることを目的とし、本学の医療関連学部（看護学部・薬学部・人間科学部）の１年生を主な対象として実施している。本年度より新たな取組として、学生がより目的意識を持って研修に臨むための事前学修と、学修の成果を参加者と教員双方で振り返る事後学修を実施することとした。

1．事前学修

各自の目標設定とアメリカの医療システムについて少人数ディスカッション（SGD）も交え学修を行った。アメリカは日本のような公的な皆保険制度はなく、収入による医療の格差がみられる。この違いを理解した上で研修に臨むことで、アメリカの医療の現状をより正確に実感できることが期待される。一方、学生の参加目的は漠然とした興味程度から、海外で働くという明確な目標がある者まで幅広かったが、医療への理解を深めるという目的意識は共有できていた。

2．訪問研修先概要

1）［Children's Hospital Los Angeles (LA 子ども病院)］

ハリウッド東に位置する本病院は全米最大級の小児医療専門病院である。主に上級看護師（ナース・プラクティショナー）による説明と案内を受けたが、本病院が医療人教育に注力し多数の看護師等を研修生として受け入れていることや、勤続年数が長い職員が多い魅力的な病院（Magnet Hospital）であることを強調していた。フロアごとに異なる配色がされているなど子どもが過ごしやすい環境作りに配慮されていた。また、様々な寄付やボランティアの存在など、日本の病院とは大きく異なる様相に多くの学生は衝撃を受けた様子であった。

訪問研修先［ロナルド・マクドナルド・ハウス］

2）［ロナルド・マクドナルド・ハウス］

子どもが病院に長期に入院する場合、その家族も肉体的、精神的、経済的に大きな負担を強いられる。本施設は、こうした家族のサポートを目的とした滞在施設であり、日本にも存在している。ハンバーガーで知られるマクドナルド社の冠名が付いているが、運営は基本的に各施設で集められた寄付やボランティアの支援によって行われている。「Home away from home (第 2 のわが家)」をコンセプトに掲げ、家族が自宅にいるような気持ちで過ごせ、また他家族と交流することで精神的な孤立を防ぐような運営が行われている。日本ではまだ十分認知されていないが、学生が医療現場とは異なる形で患者や家族をサポートする施設があることを知る貴重な機会であった。

3）［Whittier Hospital Medical Center］

本病院は、前述の LA こども病院とは全く異なる地域密着型の病院であり、ヒスパニックや中華系の患者が多い。本病院では日本人薬剤師が勤務しており、施設の案内の他、アメリカの医療の現状について説明を受けた。所得水準が低い患者が多く、医療費が払えないケースへの対応に苦慮するなど、事前学修で学んだアメリカ医療の問題点が現実のものであることが実感できた。また英語通訳を介さず説明や質疑ができたことで、学生の理解はより深まった様子であった。

4）［サンライズ・オブ・ラパルマ (老人福祉施設)］

本施設は主に富裕層が入所する老人福祉施設である。認知症の入居者もいるが、可能な限り個人のこれまでの人生に配慮したケアが行われている。本施設では施設見学だけでなく、学生と入居者との交流時間を設けている。学生間で検討と準備を行った上で臨んでもらい、各年の参加学生の個性が反映される。今年度は福笑いなどの古い日本の遊びを用いた交流や、歌の披露を行った。英語が堪能な学生ばかりではない上、交流会が急遽２回に分かれるなどのハプニングもあったが、学生たちは限られた時間の中、精一杯の誠意を持って入居者と深い交流を行っており、入居者やご家族の反応も大変好評であった。

5）［コミュニケーションセミナー・キャリアフォーラム］

コミュニケーションセミナーでは心理学者によるアクティビティを交えた参加型プログラムを実施した。コミュニケーションはトレーニング可能なスキルであるという講師の説明に学生たちは耳を傾けていた。キャリアフォーラムはロサンゼルスで働く日本人医療従事者（看護師・薬剤師・ソーシャルワーカー・臨床心理士）を招き、グループに分かれて自身のあり方（キャリア）も含め様々な意見交換を行った。日本人がアメリカの医療現場で働くには語学力や資金面など様々なハードルがある中、それを実現した方々の話を直に聞くことは学生にも大いに刺激になった様子であった。

6）［カリフォルニア州立大学ロングビーチ校 (CSULB) 訪問］

CSULB は学生数 3 万を超える総合大学である。学生たちは CSULB で学ぶ学生と英語での交流会の後、現地学生の案内によるキャンパスツアーを受け、その広大なキャンパスに圧倒されていた。また、CSULB の学生はみな明確な目的意識を持って大学生活を送っており、本学の学生たちにとっても学ぶべき点が多かったように思う。

3．事後学修

事後学修では、学生が、得た学びを更に深めること、大学生としての学び方を学ぶこと、学びを自己の今後に活用するきっかけとなることを促進するための内容・方法を検討した。本年度は、①学生個人による事後課題提出と、②学びの共有・発表のグループワークの２本立てで実施した。

①事後学修課題（個人ワーク）

学生が関心を持った内容はそれぞれ異なるため、各自の関心を尊重しつつ学びを深めることを期待し、事後学修課題を４つ提示した。課題１では、最も印象に残った研修内容や場面を選択させ、その理由を明確化させた。課題２では、選択した施設や利用者、支援内容の特徴・多職種の役割・日本との違いなどの観点から学びを整理させた。課題３では、参考図書や文献などを活用した学びの考察を設定した。初学者にとっては難しい課題とも思われたが、提出された事後課題を見ると、ホームページの引用も含まれてはいたものの、おおむね自己の学びと参考にした文献などに記載されていた内容を区別しながら記述することが出来ていた。課題４では、学びの今後の学修への活用について記述させた。外国語学習、寄付やボランティアへの参加、相手の反応を捉えたコミュニケーション、専門科目を学ぶ際に国際比較の視点を持つことなど、具体的な活用の方向性が記述されており、研修で得た学びの活用の内容や方法について自身に引き付けて考える契機となったと捉えることができた。また、課題をパワーポイントにまとめるという手法を課したが、それぞれ制限字数、枚数内にまとめる工夫が出来ており、表現力の学修に繋がったと考えられた。

②学びの共有・発表（グループワーク）

課題１で学生が選択した施設を元に教員が小グループを設定した。学生は、グループ内で各自の学びを共有した後、その内容を資料にまとめ発表を行った。同じ施設を選択した学生間での学びの共有は、異なる視点の学びを得る機会となり、視野が広がっているようであった。また今後の学修への活用については、互いの取り組みの方向性や意欲を知ることにより、気持ちを新たにする機会となったのではないかと感じた。一方、時間的制約もあり十分な質疑応答やディスカッションまでには至らなかった点が今後の課題であり、教員のファシリテート等に工夫が必要であると考えられた。最後に教員より、直接的な経験を振り返り、自分なりの意味を見出すこと、他者と学びを共有するために言語化すること、学びを今後に活かすための具体的な行動計画を立てて実行することなどの助言を行い、本研修を終了した。

事後学修：
グループワーク・発表の様子

担当教員コメント

薬学部　薬学科　講師
西丸 宏

入学して間もない１年生が短い研修期間で得られる学びは限られたものではあるが、その中でも学生が日々新しいことにチャレンジし、成長していく姿を見る瞬間があることは引率としての緊張感の中で得られる楽しみの一つである。学修の本当の「成果」は学生の今後の人生の中に反映されるのであろうが、彼らが将来、この研修をかけがえのない機会であったと振り返ってもらえるのであれば、担当者として望外の喜びである。

看護学部　看護学科　准教授
髙田 幸江

現地で経験した研修の学びをどのように今後に生かしていくのかについては、学生ひとりひとりの中で個別性をもって見出されるものであり、正解や答えが無い。またそれらは学生が折に触れ、継続して考えていくことで更なる成長に繋がるものであろう。科目という枠組みの中で教員は、現地での研修と事前事後の学修として関わることしかできないが、FSでの豊かな経験が、それぞれの学生にとって成長に繋がる機会となることを期待したい。

短期フィールド・スタディーズ　通学型　　派遣期間　7/16～9/19 のうち２日間かつ 11/20

東京臨海副都心 まちの景観づくり活動

（花壇管理・球根植栽・クリーン活動）

参加人数：446 名 ／ 学科：日本文学文化学科　グローバルコミュニケーション学科　日本語コミュニケーション学科　グローバルビジネス学科　法律学科　政治学科　経済学科　経営学科　会計ガバナンス学科　データサイエンス学科　人間科学科　社会福祉学科　環境システム学科　数理工学科　教育学科　こども発達学科

臨海副都心の都立公園で実施される「花と緑のおもてなしプロジェクト」に参加し、花壇管理・球根植栽・クリーン活動といったガーデン制作・維持管理活動を通して、「まちの景観づくり」に貢献するとともに、社会人との協働・交流体験を通じて学生個々のキャリア向上を図る。

研修先情報　臨海副都心の都立公園は都内でも有名なチューリップの名所である。ここで公園管理を行なっている東京港埠頭株式会社、まちづくり協議会の社会人ボランティアとともにガーデン制作・維持管理活動を行なった。

本プログラムは、臨海副都心の都立シンボルプロムナード公園で実施される「花と緑のおもてなしプロジェクト」に参加し、花壇管理・球根植栽・クリーン活動といったガーデン制作・維持管理活動をとおして、臨海副都心における「まちの景観づくり」に貢献するとともに、社会人との協働･交流体験を通じて、まちの景観の背後にある人びとの活動や苦労、地域の課題などに気づき、その経験と自分の専門的な学びとをつなげて考えることで、自分自身の学びのテーマを発見・深化することを目的としている。毎年 400 名以上の学生が履修する、本学の１年生 FS のなかでも最大のプログラムである。ガーデン制作・維持管理活動の成果として毎年３月中旬から４月にかけて色鮮やかで多彩なチューリップが咲き誇り、この地域を訪れる人びとをあたたかく出迎えることになる（なお、本プログラムの昨年度の取り組みについては、NHK 教育テレビ『趣味の園芸』で紹介された）。

今年度は、個々の学生がより目的意識をもって活動に臨めるよう事前授業を充実するとともに、自身の活動経験を振り返り、専門的な学びへと発展的に結びつけられるよう、事後授業を実施することとしたので、この点を中心に報告する。

１．事前授業

事前授業では、まず、プログラムの概要、学修の狙いと到達目標などの学修面について担当教員から説明した。とくに、①まちの景観の背後にある人びとの活動や地域の課題への気づき、②FS での活動経験を自分の専門的な学びと関連づけ、自分自身の学びのテーマの発見という２点を学修における重点要素と位置づけ、７月以降の実際のガーデン制作・維持管理活動に参加するにあたっては、「臨海地区について事前に調べ、そこでのまちづくりや景観づくりにどのようなことが関係しているのか」を考えて参加するよう指示している。

まちの景観づくりを考えるためのヒントとしては、2020 年オリンピック・パラリンピック東京大会の競技会場やこの地を訪れる観光客の「おもてなし」との関係、地球温暖化対策や雨水対策、景観法・景観条例、まちの情報発信、人びとが景観から受ける印象などを取り上げ、多様な角度から臨海地域における「まちの景観」を考えることができ、それぞれの学科の専門的な学びとつながりがあることを示すことで、学生が目的意識をもって参加するとともに、発展的に学修できるよう試みた。

また、現場での具体的な活動内容と注意事項などについては、ガーデン制作・維持管理活動の受け入れ先である東京港埠頭株式会社の戸倉氏から詳細な説明をいただいた。

２．「花と緑のおもてなしプロジェクト」と ガーデン制作・維持管理活動

本プログラムにて学生が参加している「花と緑のおもてなしプロジェクト」は、この地域を訪れる人びとに対して心からのおもてなしのできる魅力的なまちづくりを推進する「臨海副都心まちづくり協議会」の活動の一つとして位置づけられている。

本学 FS のこのプログラムでは、第２学期もしくは夏季休暇中から２日間、及び、11 月のフラワーフェスタ（1 日間）など合計３日間の花壇管理・球根植栽・クリーン活動といったガーデン制作・維持管理活動に参加した。とくに、11 月のフラワーフェスタでは、毎年、近隣企業（臨海副都心まちづくり協議会の会員企業）の社会人ボランティアの方々とともに、この活動に参加し、チューリップなど 20 万球もの球根の植え付け活動を担っている。都立公園にチューリップを植え付けることを通じて、まちの景観づくりの一端を担いながら、この地域における社会人と学生との新たな交流の場ともなっている。

３．事後授業

事後授業では、学生が自らの活動経験と気づき・学びを振り返ることで、専門的な学びとの関連づけを促進するための授業内容と方法を検討した。今年度は、①自分の気づき・学びを共有すること、②どうしたら臨海地区のまちをよりよくできるかについて考えるという２つの演習課題を設定した。自身の活動を振り返り、活動を通じての気づきや発見・考えたことについての事前課題を課した上で、授業ではそれらを共有するグループワーク（演習）を実施し、その成果をふまえて最終の課題レポートを課した。

①自分の気づき・学びの共有

事前の課題を課した上で自身の活動経験や気づき・発見について共有するグループワークを行なったところ、学生からは次のような意見が出された。

「学科の授業で SDGs について学修したが、この FS の活動は SDGs の 15 番目「陸の豊かさを大切にする」という目標と同じ方向性をもっていると実感することができた。この活動に参加し、地域のまちづくりと、ここを訪れる人びとの幸せに貢献できて嬉しかった。（社会福祉学科）」

上記の意見にあらわれているように、FS の活動が学科の学びとの関係のなかで捉えられていること、そして、美しい景観の背後に多くの人びとの活動と苦労が支えとしてあることへの気づきが見て取れよう。

②臨海地区のまちをよりよくするためのアイディア

臨海地区のまちをよりよくするためのアイディアについてのグループワークでは、次のような意見が出されていた。

「臨海地区は世界各地から観光客が訪れる地域なので、通訳できる人材や翻訳機器などを活用することで、外国の方もガーデン制作のボランティア活動に参加できるようになるし、地域の幼稚園などとコラボすると子どもたちも活動に参加できるようになると思う。（留学生）」

「チューリップの開花時期に多くの人びとが鑑賞し、花壇前で記念撮影をしているため、花壇のそれぞれに定点カメラなどを設置して、どの花壇に人が集まっているのか、どの花壇前でどのような行動をしているのかデータを集めて分析することで、花壇の設計や次回の植栽をよりよくしていくことができる。（データサイエンス学科）」

これらの意見のように、事後授業のグループワークでは自身の専門的な学びと関連づけて、FS での活動を振り返る意見が多数みられた。ガーデン制作・維持管理の活動を単に行なったのではなく、多くの学生がまちの景観の背後にある人びとの活動や苦労、地域の課題などに気づくとともに、個々に考えながら能動的に活動に参加し、大学での今後の学びに向けた発展的な学修ができていたと考えることができよう。

今後に向けて

今年度は個々の学生がより目的意識をもって活動に臨むとともに、専門的な学びへと発展的に結びつけられるよう授業を実施したことで、一定の成果をあげることができた。今後は、参加した学生の意見にあったように、有明こども園の開設にあわせて、子どもたちや保護者など、この地域で生活する人びと、そしてこの地域を訪れる人びととの連携も視野に入れることで、この取り組みをより進化させ、よりよい地域づくりに貢献していきたい。

担当教員コメント

教務部長
人間科学部 人間科学科　教授
北條　英勝

このプラグラムは、本学の１年生 FS のなかでも 400 名以上が参加する最も大きなプログラムであるため、現場での活動だけではなく、事前・事後授業を含め、その計画と運営に特有の難しさが伴っています。学生の引率を担当した本学職員の皆様、本学の学生をあたたかく受け入れ、活動の現場で適切なご指導・ご助言をいただいた東京港埠頭株式会社の皆様とまちづくり協議会の皆様、ともに活動に参加し学生にあたたかいお声かけをいただいた社会人のボランティアの皆様なしには本プログラム、そして学生の成長は成り立ちえません。このプログラムをお支えいただいたすべての皆様に深く感謝申し上げます。

学科フィールド・スタディーズ　　派遣期間　8/19 ～ 12/5

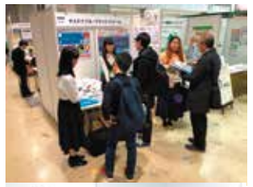
学生が取材編集する中堅企業のCSR・SDGsレポート

参加人数：7名　／　学科：経営学科　環境システム学科

本プログラムは、受入企業であるニッセイエブロの CSR レポートを社員と協働して企画・制作するプログラムです。具体的には、国連グローバル・コンパクトの4分野（人権・労働・環境・腐敗防止）を編集方針とし、企業の SDGs の取り組みを学び、企画立案、取材等を実施しています。

研修先情報　ニッセイエブロは東京都の新橋に本社がある 70 名の広告代理店です。事業領域は「お客様のコミュニケーション課題を解決支援する」ためのクリエイティブ・プロモーション・コンサルディングであり、早くからSDGsに取り組み始めた企業です。

このプロジェクトは、本学環境学部（現工学部）において 2010 年よりスタートしました。プロジェクトの設立時の社会情勢は、リーマンショック後の就職氷河期と呼ばれる雇用環境が非常に厳しい時代でした。その中で、受入企業であるニッセイエブロ社の提案もあり、NPO を介し、この CSR レポートの協働制作をスタートいたしました。設立当初から 2018 年度までは、環境システム学科の学生のみで活動を実施していましたが、多様な思考をもつ学生を受け入れプロジェクトの活性化を図ることを目的に、2019 年度より他学科の学生も募集するようになりました。本年度は、環境システム学科の学生の他、経営学科の学生が加わり新しい体制でプロジェクトを実践することができました。



プロジェクトの活動内容は、主として以下の３つのプロセスになります。

はじめに、企業などが取り組むことが推奨されている CSR（企業の社会的責任）、グローバル・コンパクト、SDGs など実務的な実習をすることで、CSR レポート作成に必要な基礎力を養いました。

次に、CSR レポート作成に関わる実践的な活動です。学生は、グローバル・コンパクトの４分野に基づき、「人権」、「労働」、「環境」、「腐敗防止」のグループに分かれ、社員とともにレポートの編集企画を立案、取材内容を協議し、CSR レポートに記載するコンテンツを具体化するプロセスとなります。本年度は、学生が主体となりニッセイエブロ社をより良い企業へと発展させるために、どのような取り組みが必要であるか社員の方々との議論や、街頭や社内でのインタビュー調査などを通し具体化していきました。学生にとっては非常に苦しい時期ではあったと思いますが、社会人スキルを養うまさに実践といえる活動内容となりました。上記プロセスより得られた内容を参考にして、2020 年 1 月現在、ニッセイエブロ社の CSR レポートが編集されています。

最後に、2019 年 12 月に開催された世界最大級の環境展であるエコプロ 2019 に出展側として参加しました。初めての相手と交わすコミュニケーションの中で「対面」して伝える重要性を体得、自身を顧みる学習機会となったかと思います。

まとめとして、本プロジェクトは多くの学習コンテンツを含んでいるため、参加した学生においては苦労も多いかと思います。その反面、過去、延べ 55 名の参加学生からは、社会人としての実践力が培われ学生にとっては自信につながったとの声を多くきくことができます。受け入れ企業側からも毎年、未来を担う学生との協働が「健全な外圧」として有効なガバナンスの一つになっているというお言葉を頂くことができ、学生、企業双方にとっての有益なプログラムであると実感しています。

担当教員コメント

環境システム学科　講師
磯部　孝行

近年、持続可能な開発目標（SDGs）が民間企業でも急速に浸透しています。その中で、本プロジェクトは、ニッセイエブロに学生が赴き、会社で働くことを体感するだけでなく、CSR や SDGs の視点から実際の職場環境などを分析し、改善に至る提案なども行います。更に、CSR レポートの作成に携わることができ、学内の講義にはない学習効果をもたらしています。本プロジェクトをとおし、優秀な卒業生を多く輩出することができています。ニッセイエブロ様はじめ、関係者様に感謝いたします。

ニッセイエブロ株式会社
PR・HR・CSR ディレクター **伊関直人様**

実際の企業で働く体験を通し、学生には、①有益なレジリエンスを知る②社会人基礎力を身につける③自身が将来働くイメージを描く、きっかけを提供できればと考えています。一方、受入れ企業側として「機会の提供」が社会貢献となり、現在、CSR・SDGs への取り組みへと発展してきています。今後、より発展的な活動となるよう動画制作など多様な社内コミュニケーションへ参画できるプロジェクトの提供も検討していきたいと考えています。

サブ・メジャーゼミ　　派遣期間　8/19 ～ 9/7

コピーライティングゼミ

参加人数：７名　／　学科：法律学科　政治学科　経営学科　人間科学科

広告・広報分野で働くコピーライターの技術を学び、情報の編集力、発信力を高めるコピーライティングゼミでは、夏に 20 日間の合宿型フィールドワークを地方自治体と連携して実施。地域や産業の振興にも繋げています。

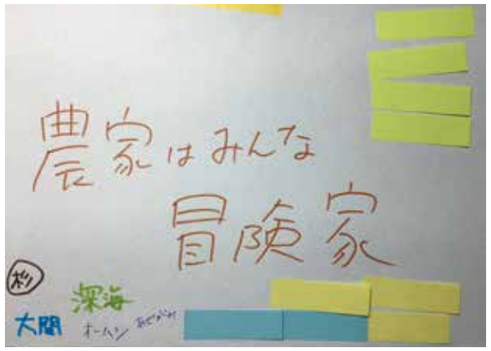
研修先情報　新潟県燕市は隣接する三条市とともにものづくりの町「燕三条」として全国的に知られています。工業が有名ですが、農業も盛んで、近年は意欲的な農家も活躍しています。学生の活動の受け入れにも積極的で多くの学生が集っています。

コピーゼミでなぜ学外学修を？

PC や紙に向かって言葉を書くばかりの仕事だと思われがちなコピーライターですが、実はクライアントからの取材や現場でのヒアリングによるインプットが大切です。何を伝えるべきか。どんな課題を解決するために伝えるのか。パフォーマンスの高い文章やコピーを書く前提にある、状況や問題を把握する力を高めるため、現場で取材やヒアリングをする学外学修をコピーライティングゼミでは大事にしてきました。

土と言葉にまみれた 20 日間

４年目を迎えた燕市でのフィールドワーク。産業の現場を取材し、得られた多くの情報を整理し、伝わるようにアウトプットするまでの活動を行っています。2019 年度は特に農業の振興に貢献するコピーライティングをテーマとし、農家を中心に、事前に学内で練習してきたインタビュー取材を実践しました。学生には農業経験がほとんどないため、まずは早朝から農作業を体験し、午後からインタビューを行いました。宿舎に夕方戻ると、取材音声を文字に起こします。文字起こし原稿は資料となるだけでなく、取材の仕方を振り返ることにもなるため重視しており、一夏でゼミ生による文字起こしの総文字数は 10 万字を超えます。それを元に、燕の元気な農業人のインタビュー原稿作成、燕農業の価値を伝えるコピー開発、農家と連携して地域を盛り上げる地元の料亭のブランスローガン、ステイトメント開発を行いました。



書けない壁を超えて

取材を重ねるごとに質問力は高まり、後半には「今の自分たちで最初の取材をもう一度したい」と短期間での成長を自覚していました。一方、多くを知るにつれ、何を伝えることが効果的なのかを見失い、書けない壁にもぶつかりました。「伝える相手を絞ったほうがいいのでは」「もう一度、まだ知らない人との間に立とう」。気づきを発言し合い、考えを解き放つ体験ができた様子が終盤のミーティングで見られたことは大きな成果でした。成果発表の場には協力企業、農家、燕市役所の方々をお呼びし、書いたものを全て貼り出し、良いと思うコピーに投票してもらうことも毎年、行なっています。今回、発表は高く評価いただき、達成感で涙するゼミ生もいました。活動後も東京・表参道での農産物直売イベントでゼミ生のコピーを掲げてくださるなど、活動成果を産業振興に活用いただいています。

担当教員コメント

教養教育リサーチセンター
客員講師（コピーライター）
梅田 大輔

コピーライティングとは、伝わるメッセージをデザインし、価値をより大きくシェアするお手伝いをすること。それを少しでも身をもってゼミ生が体験する機会をつくろうと毎年、活動を検討・改善してきました。燕市での大学生のインターンシップをコーディネートしている公益社団法人つばめいと様とは2017年から連携でき、安心できる宿泊環境を提供いただいたり、より燕の産業のニーズにゼミの活動を添わせることができるようになりました。ゼミは４年目となり、１期生が書いた企業のブランドメッセージや、２期生が別の自治体で書いたインタビュー原稿集などを参考にできることで、成果物のクオリティを上げることができています。１期生は実社会でコピーライター、ブランドコンサルタント等として働き始めており、取材することの大事さや、コピーを 100 案書く習慣など、ゼミで経験していたことの意味を働いてみてさらに感じると話してくれており、それは教え方に悩みながら、手探りしてきた私にとっても自信になりました。今後は卒業生も含めた連携で、ゼミ生の成長スピードを上げたいと考えています。

情報発信活動

情報発信活動については、学外学修事業の教育的な質向上及び官学連携の互恵的かつ発展的な推進を目的として、多様な方法で取組み内容やその成果を発信している。各長期 FS プログラムにおいては、学生が活動中に Facebook に取組み内容を掲載し、その Facebook を本学ホームページ上へ公開することで、学内外のステークホルダーに当該取組みに対する理解を促進している。また、学外活動終盤には授業の一環として、学生が地域住民や関係者の方々に成果発表や新たなアイディアを提案し、活動地域との交流を深めている。更に、大学に戻った後も事後学修として、取組み内容の成果をまとめ、大学祭にてポスター発表等を行い、高校生や大学近隣住民に取組み内容を発信している。学外学修事業全体の情報発信としては、学外学修シンポジウムや動画・プレゼンコンテスト、事業報告書としてのリーフレット、ウェブサイト、新聞やテレビ等の様々な手段や媒体を用いて発信している。積極的に情報発信をすることで、学内外にて取組みの認知度を上げ、様々な方面からの厳しい意見や手厚い協力を得ながら、取組みの質を向上させ、官学連携の繋がりを深めている。

平成27年度～平成30年度学外学修シンポジウム

学外学修シンポジウムは、取組み内容の発信及び官学連携の推進、関係者の知識･経験の深化を目的として、文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅣ長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」に採択された平成 27 年度より毎年開催している。令和元年度となる今年度は計 5 回目となり、例年 150 名前後の方々に参加いただいている。

平成 27 年度は「武蔵野大学 FD シンポジウム」と題し、「地方創生 × 次世代教育」をテーマに開催した。文部科学省高等教育局大学振興課河本達毅氏より、「大学教育改革の方向性」について基調講演をいただいた。次に、学外学修プログラムの取組み事例について様々な立場からご紹介いただいた。本学のプログラム担当教員である小西和信図書館長からは「北海道東川町役場における長期インターンシップ」、静岡県熱海市で地域振興プログラムに参加した学生グループからは「『地方＆観光』熱海振興プロジェクト」、学外学修の受入先である福岡県大川市長から「大川市の地方創生～契機となった産官学連携～」についてお話しいただいた。最後に、パネルディスカッション「地域創生における大学の役割と責任を考える」をテーマに、受入先行政の町長や本学教員も交えて議論を行った。初回のシンポジウムでは、FS の取組みが本学の地方創生の動きとリンクしながら、地域住民や街に貢献した結果が共有され、次世代人材育成のために必要なことについて活発な議論がなされた。

平成 28 年度は、「『アクティブな知』をカタチにする」をテーマとした。これは大学全体の教育改革推進の取組みの中で、前年度にディプロマ・ポリシー（学位授与方針、以下 DP）として「『アクティブな知』を獲得し、創造的に思考・表現する力を備えて、世界の課題に立ち向かう」人材の養成を掲げたことを踏まえており、学外学修事業は本学 DP を実現する大きな施策の一つとなっている。まず、本学の久富健教務部長が、「平成 28 年度本学の取組みと平成 29 年度の長期化について」基調講演を行った。続いて、学外学修プログラムの取組事例として、東川町役場定住促進課長高木雅人氏と本学のプログラム担当である小西和信教養教育部会教授に、行政側と教員側の双方から、「北海道東川町役場～地方行政フィールド・ワークの取り組みについて」ご紹介いただいた。最後に、パネルディスカッション「『アクティブな知』をカタチにするには」を実施し、受入先団体の代表者と本学教員と実際にプログラムに参加した学生の三者を交えて意見交換や議論を行った。各関係者からの意見を取り込みながら、学生の主体的な学びを、より一層大きな成果に結びつけていくための方策について議論を深めた。

平成 29 年度は、「始まりとしての学外学修～体験をカタチにする知性と主体性を求めて～」をテーマとした。まず、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室係長河本達毅氏に来賓挨拶をいただき、教職員負担増による安定的継続運用への懸念や、より一層の学生主体によるプログラム形成の必要性をご指摘いただいた。続いて、大阪大学高等教育・入試研究開発センター長の川嶋太津夫教授より、民間企業を含めた社会から求められる人材育成を見据えた AP 事業の目的や意義を背景に、行動的アクティビティーと認知的な学修要素の双方を含めた学修支援の必要性について基調講演をいただいた。次に、実践報告として、受入先の行政担当者と他大学教員及び本学教員と本学学生を交えてパネルディスカッションを実施した。本学の現状や他大学の事例について共有と議論を進めることで、事前事後学修の重要性や実施時期の課題、継続実施に向けた互恵的官学連携の推進等が話され、平成 30 年度以降の改善へと繋げていった。

平成 30 年度は、「ギャップイヤーとは何だったのか―学修者本位の教育への転換に向けて―」をテーマとした。冒頭に、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室係長河本達毅氏に登壇いただき、ギャップイヤーを目的として捉えるのではなく、あくまでツールとして何を達成すべきかが重要であることを講演いただいた。次に、本学の池田眞朗副学長より、「学生に気づきを与え、その気づきが学びにつながり、学びが出口につながる」という教育生産における PDCA が回るものに FS が進化してきたことについて基調講演が行われた。続けて、本学の山田均学外学修推進センター長より、過年度の成果を振り返りながら、プログラムの開発目標について、基調講演が行われた。その後は、FS の事例報告として、渡部博志学生部長より「身近なバリアを探る FS」、竹之内一幸法律学部法律学科長より「武蔵野市西東京市空き家調査 FS」、松田達工学部建築デザイン学科講師より「建築の起源からその未来までを辿る旅 FS」、加藤青延法学部政治学科特任教授より「秋田県鹿角市商店街元気 UP＆移住者支援体験プロジェクト」について紹介があった。最後に、受入先団体代表者と文部科学省担当者と本学教員によるパネルディスカッションを行った。ディスカッションでは、「FS の課題と将来像－その可能性と付加価値の探求－」をテーマに、学修者本位のプログラム構築の必要性、プログラム運営上の課題や意義、その将来像等について多角的な視点で議論がなされた。

このように平成 27 年度より 4 回に渡りシンポジウムを開催し、様々な観点からの議論を踏まえて学外学修事業は学修者本位の大学教育に質的転換を図っている。そして、最終年度である令和元年度の第 5 回目のシンポジウムは、「学外学修の到達点と新たな出発」をテーマに開催された。

「学外学修の到達点と新たな出発」シンポジウム

令和2年2月3日（月）14:00　武蔵野大学 有明キャンパス

武蔵野大学 学長　**西本照真**

ＦＳは武蔵野大学の教育メソッドの一つの核になると考えている。本学は 2050 年に向け、将来に活躍できる人材育成のため、5 つのチャレンジを策定した。その一つとして、「未来の世界を担う Creative な実践者になる」を掲げている。これは、単に、高度な職業人・研究者として自己の専門分野を極めるだけではなく、他の専門分野を学んだ人とともに未来の世界の幸せづくりに寄与できるアクティブで Creative な知を産みだしていくことを目指しているものである。そのため、ＦＳ等の学外での諸活動を通じて、自己の専門分野と社会とのつながりを体感し、世界の諸課題に絶えず向き合うことを本学の学びの基本スタイルとしている。つまり、ＦＳは本学の教育研究において重要な位置づけにあり、今後も創造的に発展させていきたいと考えている。

基調講演

武蔵野大学 副学長 法学部長、
大学院法学研究科長 産学連携研究推進センター長
池田眞朗

フィールド・スタディーズを超えて

採択当初は、全学 4 学期制を完全採用し、全学部必修で 2 学期からの長期 FS を主眼として開始したが、プログラム数の確保を優先するあまり、内容構築や事前事後の授業に問題を残し、またギャップイヤーも浸透しなかった。そこで 3 年目からは、専門の学びにつながる、必然の気づきを与えることを目標とし、事前・事後授業の充実、教員主導のプログラム、学科限定型プログラムの開発等の進化を開始した。今後は武蔵野 SDGｓ認定 FS、TOKYO2020 ホストタウンハウスのボランティア FS なども組入れ、専門の学びにつながり、自治体等とも真の意味での win-win の関係を築ける「ハイブリッド型 FS」へ進化させて行きたい。

武蔵野大学　学外学修推進センター長
山田均

5年間の学外学修の取組みと今後の展望

FS の目的は専門の学びの土台づくりに尽きる。学びの後ろには仕事がある。どのような精神を土台として学び、そして働くべきなのかを考える。人やものが結びつき支え合って存在していることへの気付き、縁によって成り立つ日々の暮らしに他者の恩を感じ、世界の幸せのために働く心構えを作ってもらいたい。今後は、「世界に問いかけ、世界から問いかけられること」「武蔵野大学生としてのしるしとなること」を目標に、ものの背後に他者の顔が見え、他者の暮らしと幸せに思い至るプログラム、そしてできればお金のかからないプログラムを目指す。「Happiness Creater」を作るために慎重で地道な努力によってその可能性を開花させていきたい。

テーマに関する事例報告

武蔵野大学　法学部法律学科長　**竹之内一幸**

官学連携を実現する FS
―武蔵野地区空き家等状況調査（西東京市）―

空き家問題は社会的な問題であり、学生個人ではできない空き家調査を自治体の協力を得て実行することで、この難問に対峙することができる。ＦＳでは、空き家の位置を配した地図等の事前準備を西東京市、現地の調査を武蔵野大学、調査報告と対策案への検討を「官」「学」共同で実行した。「学」は空き家調査を通じて生きた法に触れることができ、「官」は学生目線での空き家対策案に接する機会を得られるという関係は、官学連携における WIN-WIN の実現を意味する。今後は真の WIN-WIN の関係に向け、事前学修のレベルアップ、調査準備段階での「学」の参加、調査内容に対する「学」による指導強化を図りたい。

武蔵野大学　教育学部教育学科講師　**安達光樹**

官学連携を実現する FS
―北海道東川町役場　地方行政フィールドワーク―

本 FS の狙いは地方公務員の仕事を実際に学ぶことにあり、今後どのような仕事に就いても指示されたことだけをやるのでは駄目だということを事前学修で学び、自分で何かを創造し、作り出していけるような発想力が必要になってくる。研修では、インスタのハッシュタグを活用し、東川町のいろいろな所の写真をインスタ上にアップすることで、東川町 PR につなげた。地方公務員の仕事、社会人としての意識、社会に対応した仕事人の心構えに触れられ、学生にとって貴重な機会となった。今後は両者 WIN-WIN の関係を築けるようにする。

武蔵野大学　教育学部こども発達学科教授　**生井亮司**

海外で専門の学びの視野を拡げる FS
―USA　Los Angeles（教育研修）―

アメリカロサンゼルスの教育・保育の現場を見学し、日本とアメリカの教育保育を比較的にとらえ、それを基に今後どんな学修をしていきたいのかの動機付けになればよい。アメリカは数年前まで学習指導要領がなく、よりよい教科書を求めて日本の教科書の英語版を活用していることに日本の教育のすごさに気付く。最後に目的が変わっていくっていうことが実はフィールドの知性じゃないかと思っている。つまり目的を最後まで守っているということは、変化していないということ。自己変容の可能性を入れたら、目的は最後手放していかないといけない。つまり目的を手放し、問いを見つけることが出来ればいいと思っている。

武蔵野大学　工学部建築デザイン学科講師　**松田達**

事後学修としての動画コンテスト

「建築の起源から未来までを辿る旅」では、ドバイ、アテネ、イスタンブールなど、世界の都市と建築を訪れた。研修後、学生は体験をパネル化や冊子化で印刷媒体にしたが、もっとも大きな成果は動画の制作であった。特に動画コンテストは FS の事後学修の重要な発表の場となった。ここで学んだ貴重な技術をきっかけに、さらに動画制作を続けている学生もいる。スマホ、ユーチューブ世代には動画が重要だ。FS と動画制作は相性がよく、相乗効果もあり、今後も必要不可欠だと考える。

パネルディスカッション　学外学修の到達点と新たな出発

北海道東川町　定住促進課 課長　**吉原敬晴**

東川町は、FS は約 8 年間行っている。東川町はいろんな事業をやっているが、職員がアイデアを出したという事業はあまりなく、外からの提案で事業を進めている。昨年の FS の学生さん提案でプロの写真家を呼び、写真の講座をし、それをインスタに「ハッシュタグ・東川町」でアップし東川町の PR ができ感謝している。昨年はブラックアウトで、全道が停電になってしまい長期 FS 学生さんたちが、独居老人のご家庭へおむすび 2 個とお水を配ってもらい町民から感謝された。そういった人情的なものもこの FS を通して感じ取ってもらいたい。

東京都西東京市まちづくり部 住宅課 課長　**田中浩一**

西東京市は武蔵野大学の武蔵野キャンパスもあり、2 年前から空き家 FS を始めた。空き家というテーマに学生がどの程度興味を持っているのか、事前学修等で準備はしてくるとはいえ、行政側が学生へどういった視点でこの空き家について、体験、学んでもらえるか不安だった。結果、学生さんが空き家についてどの程度、興味を持ったのか、分かってもらえたかの到達点というのは正直、あまりよく理解できない部分もある。今後は報告会のみで終わらず、しっかり学んでもらうためにも事前準備をし、今後も空き家対策に官学連携で取組みを続けていきたい。

武蔵野大学　学外学修推進センター長　**山田均**

今年度の長期 FS を行った際に、参加者の大部分が女性だったので、上級の女性学生を助手で引率させたのだが、男性には相談できないこと等もあり、お互いに良いコミュニケーションが図られ、教育効果があったと感じた。1 年生だけでなく上級生や、OB・OG を巻き込んだ活動、あるいは他大学との共同・連携を含めて、今後の FS を自由度が増すかたちで変革して行きたい。最終的な目的は「世界の幸せをカタチにする。」ため、世間・学外に出、世間を見て触れて「人情」が分かる人間形成のための FS へとセンター長として推進していく。

武蔵野大学　国際センター長兼法学部政治学科長　**ドナ・ウィークス**

今回カナダへ語学研修の引率として 3 日間だけ行ったが、フィールド・スタディーズと留学の違い、曖昧さ、そしてギャップイヤーの問題と国際センター長として国際化の中でどう見られているのか疑問に感じた。これからはこれらをきちんと大学として定義をするべき課題だ。また海外から来ている留学生が増えている中で、この留学生たちにも国内のフィールド・スタディーズに参加できるように具体的に検討すべきである。

武蔵野大学　法学部法律学科長　**竹之内一幸**

今年度、新たに出入国管理・税関視察プログラムのＦＳを行い、東京税関を訪問した。その際、職員から「この前、中学生が自分たちで電話予約をし、見学に来ました。」という話を聞かされた。これまでのＦＳは、教員・大学サイドでプログラムの内容から実施方法までを検討し、学生に提示してきたところがある。今後は、学生に問題を発見させ、自分たちでプログラムをプロデュースするようにし、「官」などとの交渉については、大学サイドでバックアップするといったスタイルへ転換してみてもよいと考える。

武蔵野大学　教育学部こども発達学科教授　**生井亮司**

先ほど、竹之内先生から提案があった通り、私も学生自身が作り出す方が、教育の効果があると考える。私の担当した FS（USA Los Angeles（教育研修））でも、最初に学生へ「どういうことがしたいか？」と投げかけてスタートしたが、学生の研修の取組みが予想以上に良く、また現地での取組みも積極的になった。学生は未だにアメリカで何かきっかけがある度、その交流先とコンタクトを取っている。そこを起点に再訪問等、良い関係が続いており、学生が自発的に行動することは良いと考える。今後は 2・3 年生の先輩たちも交えての FS を考えても良いと思う。

武蔵野大学　工学部建築デザイン学科講師　**松田達**

初めて FS を経験をした学生から、次はどうするか、どこに行くか等、自発的な問いがあった。昨年度は海外の世界遺産（ドバイ、アテネ、イスタンブール等）を学生が見る等、一瞬一秒にものすごい経験が詰まっている体験をしている。遠くへ行く、遠くから帰ってくるという事が、物の味方や解像度を変え、少しずつ変わって発展し始めている学生がいる。1 年目の FS の経験で自身が変わり、2 年目 3 年目の経験によってさらに発展する、といった 2 年目 3 年目に続く FS があってもよいと思った。

武蔵野大学　教育学部教育学科講師　**安達光樹**

FS は事前学修、事後学修を充実させていく必要があると考える。担当した東川町の場合は 3 泊 4 日と短期間になるので、それを補うためにも、事前の学修の充実が欠かせない。事後学修で学生から「移住したい・将来住みたい」、「大学祭のイベントも手伝いたい」等の意見が挙がり、このような先輩が次年度も引率サポート・アドバイザーで同行することで、より充実した FS が実現できるのではと考える。

閉会セレモニー　～感謝を込めて～

閉会セレモニーでは、令和元年度「フィールド・スタディーズ」のプログラムを本学と連携して実施した北海道東川町、東京都西東京市の 2 市町に対して感謝状が贈られた。

池田眞朗副学長が「多大なご協力とご支援、その高配に対して深く感謝するとともに、今後も本学との連携継続を心よりお願いするものです」と感謝状を読み上げ、東川町 定住促進課の吉原敬晴氏、西東京市 まちづくり部住宅課の田中浩一氏に楯を送ると、会場は大きな拍手に包まれた。

FS動画・プレゼンコンテスト「副学長杯」について

FS 動画・プレゼンコンテスト「副学長杯」は、1 年生 FS に参加した学生を対象に、FS に参加した成果を動画にまとめることで学修内容の一層の確認・定着を図り、コンテストにおいてチームワーク、プレゼンテーション能力などの更なる涵養を図ることを目的としている。また、将来的には大学広報のコンテンツ素材として、対外的宣伝に活用することも目指している。

コンテストの形式は、大学祭（摩耶祭・黎明祭）のイベント企画の 1 つとし、動画を用いた公開プレゼンテーション形式である。応募者は1チーム5人以内とし、各FSにて教員指導のもと、学外学修中の動画撮影からその編集、プレゼンテーション準備を学生が主体的に進めていく。また、より質の高い動画を作成するため、事前に外部の専門家を招聘し、応募を考えている学生向けに動画作成講座を実施している。FS に参加した学生は、フィールドワークや地域活性化支援、観光振興支援、地域福祉支援、地元産業支援、インターンシップ等を通して体験・体感した実社会について、気づいたことや、課題発見・解決したこと、自分の専門分野との繋がり等を発表する。動画とプレゼンテーションはそれぞれ 2 分の時間が割り当てられ、1 チーム合計 4 分の時間内でプレゼンテーションを行う。本コンテストでは、動画の出来栄えのみを競うのではなく、「FS の目的が表現されているか」、「今後の大学での学びに繋げることができているか」「動画の表現力」等を総合的に審査することとなっており、学外の動画専門家と学内教員により厳正に評価される。

第一回最優秀作品賞　藤岡拓夢さん

参加者と教員の集合写真

平成 30 年度に行われた第 1 回「副学長杯」武蔵野 FS 動画・プレゼンコンテストでは、7 組のプログラムから応募があり、1 次選考を突破した 5 組の学生が最終選考でプレゼンテーションを行った。最優秀作品に選ばれたのは、「武蔵野市空き家等状況調査プログラム」の法律学科 1 年藤岡拓夢さんで、市が抱える空き家問題について、調査・検討・行政への提案までを行った内容をプレゼンした。主催者である池田眞朗副学長は、「武蔵野 FS 動画・プレゼンコンテストは事後学修の成果発表として非常に良いものであったと感じております。日頃より FS は事前事後学修が大切であると皆さんに話しており、今後も学生が FS から戻ってきた後に、その成果をお互いに発表し合い、それぞれ専門の学びにきちんと繋がるような行事にしていただきたいです」と述べた。

令和元年度に行われた第 2 回「副学長杯」武蔵野 FS 動画・プレゼンコンテストでは、9 組のプログラムから応募があり、1 次選考を突破した 5 組の学生が最終選考でプレゼンテーションを行った。最優秀作品に選ばれたのは、「福岡県大川市モノ作りの魅力発信プロジェクト」の政治学科 1 年高橋希歩さんで、日本一の家具生産量を誇る福岡県大川市に約 1 カ月間滞在し、実際に家具作りをした体験談を踏まえて、大川の家具作りの歴史や基幹産業の一つである農業などについてプレゼンした。主催者である池田眞朗副学長は「武蔵野 FS 動画・プレゼンコンテストは、学外学修の成果をより多くの人々に発表し共有する場になってほしいと考えています。2 回目にして、動画の質も上がり、皆さんの成果がより素晴らしいものとなって表現されていると感じています。最優秀賞の作品は、映像の力でどのように表現するのか、そして専門の学びにどう繋げていくのか、更にはプログラムの価値をどう表現できているかという観点で考えると、FS の成果がしっかりと表現されていたように思えます。それぞれの作品に、それぞれの良いところがありました。今後、FS での経験を学生皆さんの専門の学びに繋げていくことを期待しています」と述べた。

第二回最優秀作品賞　高橋希歩さん

大学祭での FS 成果報告について

大学祭での FS 成果報告については、1 年生で長期 FS に参加した学生を対象に平成 29 年度より実施している。FS 活動期間が 20 日以上になる長期 FS では計 8 回の事前事後学修を必須としている。事後学修では、学生自身が体験した内容や課題について教員とともに振り返りを行っていく。学生たちはその成果をまとめ、大学祭にて成果発表を行う。発表方法は模造紙等にまとめ、それを掲示するポスターセッションでの発表が主となる。学生が自ら体験したことや成長した過程、成果等を大学祭に訪れた一般の方々へ説明をすることにより、学修した内容の定着やプレゼンテーション能力の向上等を促している。例年は、本学武蔵野キャンパス（東京都西東京市）で 10 月に開催される大学祭「摩耶祭」にて FS 成果報告を行っていたが、令和元年度は台風の接近に伴い、摩耶祭自体が中止となった。そのため、11 月に有明キャンパス（東京都江東区）で開催された大学祭「黎明祭」を新たな発表機会とし、成果報告の展示が実施された。

学生作成の成果報告ポスター

大学祭では FS 成果報告とは別に、地域交流及び地域の魅力発信を目的として、平成 25 年度より「産地直送販売ブース」と称し、実際に FS を受入れて頂いている地域や団体の名産品・特産品を販売するブースを設けている。このブースでは、持ち込まれた名産品や特産品を、現地の方が直接販売をしている。令和元年度は、台風の接近に伴い、摩耶祭が中止となったため、

令和元年度黎明祭での FS 成果報告

平成 30 年度摩耶祭での FS 成果報告

この産地直送販売ブースも中止となってしまったが、例年 6～8 の受入団体・地域の方々にお越しいただいている。

平成 30 年度においては、以下の団体・地域が出店を行った。

・徳島県阿南市　　野菜･しいたけ･すだち･胡蝶蘭など
・長野県 JA ながの　りんご
・山梨県西桂町　　もろこし饅頭など
・北海道東川町　　じゃがいも･お米･トマトジュースなど
・秋田県上小阿仁村　食用ほおずき・ジャム
・長野県信濃町　　無農薬米・ブルーベリーなど

販売の際には、実際に受入をしてもらった学生が、ボランティアとして販売協力に携わっている。プログラム終了後、久しぶりの再会を果たし、受入いただいた感謝の気持ちを持ちながら、販売協力に勤しむ学生の姿が見られた。またそれと同時に、各団体・地域の魅力発信にも繋がっている。この取組みを毎年継続して行うことにより、大学近隣の住民だけでなく、このブースの情報をネットや口コミで知った来校者が年々増加している。更に、大学の文化祭を見に来た高校生に対しては、本学の学生として入学した後に、FS に参加するイメージを掴む絶好の機会となっている。

産地直送販売ブースの様子

ウェブサイトやリーフレットの活用について

AP 事業に採択された平成 27 年度から、本学の学外学修プログラムの取り組みを広く社会に発信するため、ホームページ、Facebook、リーフレット等での情報発信活動を行った。

ホームページでは、学外学修専用ページを作成し、学外学修の理念や全体像、事業報告書等、当該年度に開講されたプログラムの情報を掲載している。1 年生を対象とした 1 年生 FS や、上位学年を対象としたサブ･メジャーゼミ（学部横断型ゼミナール）、学科 FS（学科の専門に特化した FS）のプログラム一覧も掲載し、体系的な学びの機会を提供していることを発信している。実際のウェブサイトについては以下の URL を参考にしていただきたい。

https://www.musashino-u.ac.jp/academics/basic/career_education.html

また、上記ホームページにもリンクが付いている Facebook では、1 年生を対象とした 1 年生 FS について、各プログラムの活動状況や内容を、班ごとに週報（長期プログラムや海外プログラム）または日報（短期プログラム）で随時発信をしている。Facebook での報告は、学生が現地での体験を率直にレポートし、素直なコメントと躍動感ある写真でリアルタイムに配信しているため、FS の生き生きとした内容が確認できるようになっている。学生が自らの活動を記事にすることで、活動の振り返りになるとともに、活動の言語化により発信力を高めることを目的としている。更に、受入先や受入地域の魅力発信も目指している。記事の作成は学生が自ら行うことを原則とし、使用写真や掲載文言についても関係各所に確認するなど、学生の主体性を尊重しながら、慎重に作成、掲載を行っている。

リーフレットについては、本事業の報告書として、主に学外の関係者や一般の方々向けの情報発信を目的に作成されている。平成 27 年度及び平成 28 年度のリーフレットでは、特に教育効果の高いプログラムを取り上げ、活動時の写真や受入団体のコメントをメインに掲載している。これにより、FS の認知が徐々に広まり、より具体的で実質的な情報を求める声が各方面から上がったため、平成 29 年度からは、本事業の取組みをより深く掘り下げ、各プログラムの目的や取組内容、成果を掲載するとともに、本事業全体の意義や推進体制、課題と対策、開講プログラム数、派遣学生数等について実際の数値等を踏まえて報告している。当リーフレットを受入団体や大学に訪れた一般の方々、学外の協力機関、AP 事業採択校等に配布をすることで、本学の FS の取組みについて認知が広まり、更なる関心や協力を得ることに繋がっている。

大学 HP の Facebook 一覧

平成 27 年度

平成 28 年度

平成 29 年度

平成 30 年度

各種新聞やテレビ等への掲載について

各種新聞やテレビ等への掲載については、本事業が学外に出て、受入先の協力のもと地域との繋がりの中で実施されるものであることから、毎年、各種メディアから多くの取材や報道を受けている。新聞、テレビ、SNS 等様々な媒体で本学学生の取組みが紹介されることで、学内のみにとどまらず、学外で注目されるきっかけとなってきた。そのうち、本年度に掲載いただいた一部を紹介する。

秋田テレビ、米代新報、北鹿新聞、鹿角きりたんぽ FM では、1 年生対象の 1 年生 FS プログラム「秋田県鹿角市 商店街元気 UP＆かづの版 DMO 体験プロジェクト」の取組みが紹介された。学生たちは、実際に現地のフィールドワークを通じて、地域活性化を進めるために必要な課題を見つけ出し、商店街の自治会員や行政担当者に向けて提案活動を行った。徳島新聞では、1 年生 FS プログラム「徳島県阿南市加茂谷地区　田舎暮らし丸ごと体験実習」の開村式での学生による代表者挨拶が紹介された。農業体験や地域での活動に参加するうえでの今後の抱負について取り上げられた。北海道東川町の公式ホームページでは「北海道東川町 × 武蔵野大学」と題したインスタグラムと連携しており、1 年生 FS プログラム「北海道東川町役場 地方行政フィールドワーク」の活動の中で、写真専門家から指導を受けた学生が撮影した写真が東川町の魅力とともに掲載されている。NHK では、「東京臨海副都心　まちの景観づくり活動（花壇管理･球根植栽･クリーン活動）」の取組みが紹介された。ガーデン制作や維持管理活動を通して、まちの景観づくりに貢献するとともに、社会人との交流体験をしている様子が放送された。

鹿角きりたんぽ FM にて放送

秋田テレビより取材

徳島新聞掲載

東川町ホームページ

まちの景観づくり活動風景

5年間の成果と課題

学外学修事業が平成 27 年度に文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅣ長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」に採択され、本年度（令和元年度）は 5 年目の最終年度を迎えた。AP 事業最終年度の報告書として、5 年間の成果と課題について述べていく。最初に、AP 事業の人材育成目標について確認する。

本学ではブランドステートメント「世界の幸せをカタチにする。」に基づき、全学的なディプロマ・ポリシー（学位授与の基本的な考え方として学生が修得する能力を示したもの、以下 DP）を以下の通り定めている。

「アクティブな知」を獲得し、創造的に思考・表現する力を備えて、世界の課題に立ち向かう。
仏教精神を根幹として学識、情操、品性ともにすぐれた人格を養い、一人ひとりの幸せ、世界の幸せに貢献する人材を育成します。
< 修得する能力 >
・学びの基礎力を基盤とした専門能力
・他者と自己を理解し、自発的に踏み出す力
・課題を多角的に捉え、創造的に考える力
・多様な人々のなかで、自らの考えを表現・発信する力

この全学的な DP を踏まえて、本学の AP 事業では、社会のパラダイム・シフトに対応する以下の人材を育成することを目的としている。

～社会のパラダイム・シフトに対応する 3 つの人材～
①自発自燃型人材
自ら課題を設定し、自ら答えを導き出し、解決に向け果敢に行動する人材
②グローバル人材
国際ビジネスの知識、国際社会で通用する教養、語学力を有する人材
③地域貢献型人材
地域を活性化・再生させるノウハウを有する人材

これらの人材育成目標を達成するために、全学的に 4 学期制を導入し、アクティブ・ラーニングの軸としてフィールド・スタディーズ（以下 FS）を学士教育課程に配置した。長期 FS は第 2 学期・夏季休暇を中心に、学生の能力や志向等に応じて約 1 か月間、学外でフィールド・ワークや地域活性化支援等の活動を行い、学生が自ら課題を見つけ、その解決に向け果敢に挑戦する本学独自の実習型教育プログラムである。更に、2 年次以降は、1 年次での学びや能力を昇華させるため、メインメジャー及びサブメジャー（学部横断型ゼミ）による専門的な長期学外学修プログラムも配置している。これにより、体系的かつ実質的な教養と専門の連続した学びを実現する。なお、FS では地方創生支援活動やオリンピック・パラリンピック支援活動等、活動先への貢献を到達目標の一つに設定している取組みが多く、活動先に根付いた特有の文化や産業を学び、それらの継承や発展等を通じて地方の課題理解や地域の活性化に貢献することも大切な目標の一つとしている。

また、本 AP 事業の定量的な主な達成目標については、令和元年度時点で長期学外学修プログラムに参加する学生の割合 27.6%、学生の授業外学修時間が週 11 時間以上の学生の割合 20.0%、学生の主体的な活動企画数 68 を掲げている。それでは、5 年間の成果と課題について、FS の事業規模の推移や、アンケート調査によるプログラムの質の変化、入口と出口への効果等の点から述べていきたい。

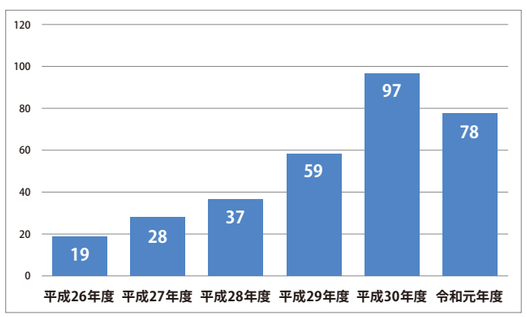
1. 事業規模の推移

（1）プログラム数の推移

学外学修事業の中心である 1 年次に全員必修（薬学部を除く）で行う 1 年生 FS のプログラム数の推移を見てみる。平成 24 年度から開始した 1 年生 FS は当初、学外学修期間が 5 日間程度の短期 FS として実施されていたが、AP 事業が採択された平成 27 年度より短期 FS の拡大とともに、学外学修期間が 20 日間以上の長期 FS の開設準備を進め、平成 28 年度には全学的に 4 学期制を導入し、夏季期間だけでなく 2 学期に学外学修が実施できる期間を設け、長期学外学修を実施できる体制を整備した。これにより、平成 29 年度から全学的に長期 FS が本格稼働し、令和元年度の 1 年生 FS は、長期 FS が 40 プログラム、短期 FS が 38 プログラム、計 78 プログラムが実施されるに至った。

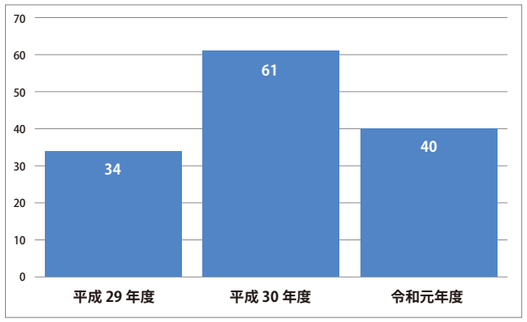
1 年生 FS のプログラム数の推移については、平成 27 年度のプログラム数は 28 であったが、平成 30 年度には計 97 のプログラムが開講されている。これは、AP 事業採択を契機として学内の FS 実施体制が強化され、幅広い活動が可能となり、北は北海道東川町、南は鹿児島県徳之島へと全国にその活動の範囲を拡げ、更に大学周辺地域の協力も得て、学内の教職協働による組織運営のもとプログラム数が拡大したためである。

平成 26 年度～令和元年度 1 年生 FS のプログラム数推移



長期 FS のプログラム数の推移については、全学的に本格稼働した平成 29 年度は 34 プログラムであったが、翌年の平成 30 年度は 61 プログラムとなり、約 1.8 倍の増加となった。4 学期制導入により長期 FS を 2 学期に実施する「2 学期プログラム」を開講し、2 学期中に学部の必修科目を出来る限り配置しない等の全学的なカリキュラム調整を行った。また、今までの学外学修プログラム運営の経験で積み重ねた知見を基にして危機管理体制を強化した。更に、学外学修の運営・推進を担う学外学修推進センターを平成 30 年 1 月に設置し、教職員への説明会、FDSD 研修を兼ねた学外学修シンポジウムを開催し、学外学修事業推進のための学内理解を深め、より多くのプログラムを教職協働で運営する体制を整備した。こうした学外学修事業の推進体制の整備により、プログラム数が増加し、プログラムの種類も増えることで、学生に対してより多様な選択肢を与えることができ、学びの選択範囲の拡大に繋がった。

平成 29 年度～令和元年度 1 年生 FS の長期 FS プログラム数推移



しかしながら、長期 FS プログラム数を 61 プログラムとした平成 30 年度は、事業規模の拡大により様々課題が出てくることとなった。主な課題は、①プログラムの質保証、②科目履修の学内調整（特に 2 学期）、③規模に応じた運営体制である。

①プログラムの質保証については、学外学修の事前と事後で教員が行う事前事後学修がとても重要であると考えている。本報告書のはじめの学外学修の狙いでも述べた通り、学生たちは、事前学修で活動先（社会・地域）の背景や課題を学生自ら学修し、自分ごととすることで「主体的な学修態度」を養う。そして、学外学修で国内外でのフィールド・ワークや地域活性化支援、復興支援、自治体でのインターンシップ、農業体験等を通じて、様々なことを体験・経験し帰ってくる。事後学修により、それらの体験・経験が「学びへのきっかけ」となることに気づかせる。大学生活におけるあらゆる機会には「学びへのきっかけ」が潜んでおり、全ての講義に「気づき」と「繋がり」があることを体感させたい。そうして、それらの学びを専門の「学び」に繋げ、更に将来のキャリア選択に繋げることを発見させる。加えて、事後学修では体験・経験の成果や、課題に対する解決案を言語化、映像化し、活動先等に発表することで、多様な人々のなかで、自らの考えを表現・発信する力を養っていく。このような充実した事前事後学修と学外学修により、その後の専門の学びを修得する土台を養っていく。これらの取組みを受入先の協力を得ながら担当教員が主体的に行うことで、プログラムの質が保証されると考えている。

しかしながら、これらの過程を実現するための FS プログラム構築には、教職員の手間と時間を要することは必然であり、プログラム数拡大により、1 人の教員や職員が持つプログラム数が増え、きめ細やかな事前事後学修が難しい状況となった。また、複数プログラムを持つことで、受入先との密な連携が充分でなくなり、互恵的且つ発展的な官学連携の推進にも影響が見られた。加えて、AP 事業の計画目標数値を実現するために、当初は、職員によって企画・構築された地方自治体の協力による長期宿泊型プログラムが多くあり、地方自治体へのサポートが目的となり、勤労奉仕をするだけで終わるものになり兼ねない状況もあった。これらを踏まえて、教員主導の、専門の学びに繋がるとか、教養の学びに繋がるとか、その他の付加価値を見いだせるプログラムに洗練する必要があった。

②科目履修の学内調整については、1 年生 FS は全学必修科目（薬学部を除く）であり、4 学期制を導入し 2 学期と夏期休暇で長期 FS を実施しているため、特に 2 学期において、全学部（11 学部）の他の必修科目との重複を避ける必要があった。平成 30 年度は学部の協力を得て実現しているが、年間を通して授業をすることが望ましい教養教育の語学科目や教職関連科目、多くの専門科目が配置される資格取得系学科（看護学科、教育学科、幼児教育学科、社会福祉学科等）では、各学科のカリキュラム・ポリシーに応じて適切な時期に体系的且つ効果的に科目を配置する必要があった。そのため、原則としては 2 学期に学科の必修科目を配置しないようには調整するが、難しい場合には学科の必修科目を集中授業として 2 学期に開講することや、学科の必修科目と重ならないように学外学修の日程を調整すること等、カリキュラムのきめ細やかな調整を行った。この作業を全学的に行ったため、各学科のカリキュラム担当教員と教務系職員、FS プログラム運営職員に大きな負担を強いることとなった。

③規模に応じた運営体制については、平成 30 年度は約 140 名の教職員がプログラム担当や引率等で本事業に関わった。特に 2 学期・夏期休暇期間の引率では、法人系職員も含めて職員約 90 名が全学的に動員されており、SD 研修としての効果はあるものの、通常業務に影響する部署がでるほどであった。また、職員の学生引率は危機管理体制の強化ということではあるが、学生指導という教育的な側面を合わせて考えると教員が引率することが本来であり望ましい姿である。しかし、平成 30 年度長期 FS の 61 プログラムを教員だけで引率することは現実的ではなく、学外学修事業を継続的且つ安定的に推進するためには、TA・SA の活用やプログラム数の縮小、学生が学びに集中できる期間を検証したうえでの適切な学外学修期間の設定、引率を伴わない通学制プログラムの構築等を検討する必要があった。

これらの主な3つの課題等を解消するために、令和元年度については、長期 FS を前年度 61 プログラムから 40 プログラムに縮小した。縮小の対象となったプログラムは、職員が企画・構築したもので、宿泊型で派遣学生数が 5 名未満、学生・教員アンケートにおいて学生の成長実感や後輩への推奨度等の評価が低いプログラムを抽

出し、学長直轄の組織である教育改革推進会議で議論のうえ、総合的に判断した。更に、今後のモデルとなるような専門の学びに繋がる FS を新規に構築した。これにより、教員企画のプログラム数は、平成 30 年度の 61 プログラム中 8 プログラム（13.1%、）から令和元年度 40 プログラム中 13 プログラム（32.5%）に増加した。

なお、長期 FS の派遣学生数については、プログラム数が減少しても派遣学生数が担保できるように、各受入先への派遣人数枠を増やして学生告知を行った。1 年生 FS の学生プログラム決定方法については、長期 FS と短期 FS を合わせて約 80 プログラムから学生が希望プログラムを選択し、面接や抽選等で実施プログラムを決定していく。プログラム選考の結果、長期 FS を希望選択する学生が少なく、長期 FS で用意した人数枠が全て埋まらなかったため、平成 30 年度長期 FS 参加学生数 281 名から令和元年度は 260 名に減少することとなった。今後は、教育の質を担保できる推進体制を強化しながら、長期 FS の魅力を具体的且つ明確に学生に告知していく。

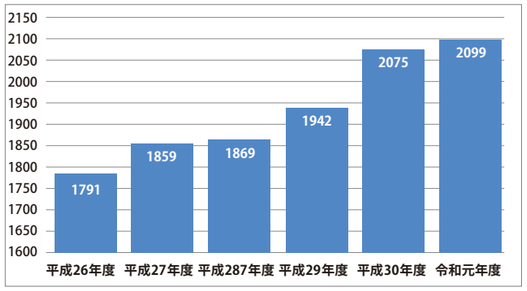
AP 補助金終了後の令和 2 年度以降の FS 推進については、学長直轄の組織である教育改革推進会議で議論の結果、FS が本学のブランドステートメント「世界の幸せをカタチにする。」や本学 DP を実現するための基盤となる取組みであり、本学では、このようにキャンパスの外に出て、実社会の課題に絶えず向き合いながら、学年が進むに従いそれぞれの専門的な学びを深めていく教育を学びの基本スタイルとしているため、継続して FS を全学的に展開していくこととなっている。つまり、主体的な学びを促進する本学独自の武蔵野大学版学外学修プログラムを推進していくのである。しかしながら、これには平成 30 年度に挙がった上述のような課題を解決しながら PDCA を回して継続的且つ発展的に推進していかなければならない。そのため、令和 2 年度以降は、令和元年度に引き続き、教員主導の専門の学びや教養の学びに繋がる FS プログラムを全学的に新規構築する。また、多くの教員が主体的に参加できるように、今までの学外学修期間 5 日間程度の短期 FS と 20 日間以上の長期 FS の他に、学外学修期間が 10 日間程度の中期 FS を設けていく。これは、5 日間だと短すぎて学修効果が不十分であり、20 日間だと長すぎて学生の集中力が持たず学修効果が上がらなく、更に教員の引率負担も大きいという意見が教員から多く挙がったため、改善したものである。適切な学外学修期間については、今後も継続して、学生・教員アンケート等より検証していく必要があると考える。更に、実施時期については、AP 事業の当初は、ギャップイヤーの活用ということで、9 月入学を推進し、4 ～ 8 月までの時期的ギャップを埋める活用法ということで、長期学外学修の推進が唱われた。しかし、現実的には 9 月入学制度は思ったように浸透せず、ギャップ期間は生まれなかった。しかしながら、学外学修の意義はとても重要であり、リアルな世界や社会を体感することで、「何のために学ぶのか」を学生に気づかせる必要があることに間違いはない。そこで、主に夏期休暇を利用した学外学修をこれからも継続的に実施する。令和 2 年度は東京オリンピック・パラリンピックが主要キャンパスである有明キャンパスの周辺で開催される影響もあり、前期に 100 分授業を導入し、夏期休暇期間を長くしている。これにより、FS の実施期間は夏期休暇のみとすることが決定している。更にオリンピック・パラリンピック後についても、100 分授業を導入し夏期休暇期間を確保したうえで、各学科の DP 実現や教職員の負担等を考慮し、夏季休暇期間のみでの実施を検討していく。

今後の FS プログラム数については、上述のように学外学修事業の運用改善を図りながら、適切なプログラム数を確保していく。令和 2 年度のプログラム数は長期 FS が 30 プログラム、中期 FS が 6 プログラム、短期 FS が 35 プログラムの計 71 プログラムの予定であり、引き続き、本学独自の特色ある取組みとして発展的に学外学修事業を推進していく。

（2）学生数の推移

1 年次に全員必修（薬学部を除く）で行う 1 年生 FS の参加学生数の推移を見てみる。参加学生数の推移については、AP 事業の採択された平成 27 年度は 1,859 名であったが、令和元年度は 2,099 名となり、年々増加している。これは過去 5 年間の大学全体の学部改組において、工学部、グローバル学部、データサイエンス学部、経営学部等が設置され、入学定員が増加したことにより、1 年次全員必修の 1 年生 FS の参加者数が増えたためである。1 年生 FS を推進する学外学修推進センターでは、この入学定員増も想定しながら、学内での学外学修運営体制を強化している。

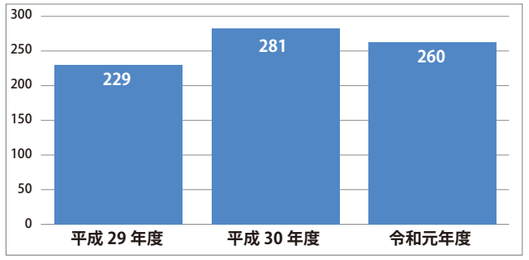
平成 26 年度～令和元年度 1 年生 FS の参加学生数の推移



次に、1 年生 FS の中で学外学修期間が 20 日間以上の長期 FS に参加した学生数の推移を確認する。AP 事業の主な達成目標の一つである「長期学外学修プログラムに参加する学生の割合」にも関連する数値であり、平成 29 年度 330 名、平成 30 年度 360 名、令和元年度 400 名を目標としていた。結果としては、長期 FS が本格稼動した平成 29 年度は 229 名（プログラム数 34）、プログラム数を拡大した平成 30 年度は 281 名（プログラム数 61）、プログラム数を縮小した令和元年度は 260 名（プログラム数 40）となった。

指標達成に向けて平成 30 年度はプログラム数を拡大したが、前述した通り、様々な課題が発生し、特にマンパワー不足による教育の質の低下が懸念された。そのため、令和元年度は、参加学生数が 5 名以下の少人数のプログラムを精査して 21 プログラムを縮小した。そして、長期 FS の参加学生数の枠については、平成 30 年度同様の人数が参加できるように調整し、学生告知を行った。結果としては、長期 FS を希望選択する学生が少なく、参加学生数が減

平成 29 年度～令和元年度 1 年生 FS の長期 FS の参加学生数の推移



少することとなった。今後は、1 年生 FS で学生がプログラムを選択する際に、長期 FS の効果や重要性を説明し、その魅力を具体的且つ明確に学生告知していくことで、主体的に長期 FS に参加する学生を増やしていく。併せて、ただ長期 FS に派遣するだけでなく、短期や中期だとしても学生の主体的な学びを導き出す本学独自の質の高い FS を更に増やしていく。

2. FS 参加学生等へのアンケート調査について

平成 29 年度より 1 年次に全員必修（薬学部を除く）で行う 1 年生 FS の長期 FS が本格稼働したことに伴い、長期 FS プログラムの学修効果を検証するため、学生、担当教員、受入先にアンケートを実施した。これにより、プログラムを 3 つの視点（学生・教員・受入先目線）で調査し、その学修効果や学修課題等を検証、可視化することで、より質の高い FS プログラムへの改善及び構築を目指している。

（1）参加学生へのアンケートについて

1年生で長期 FS に参加した学生に対しては、事前と事後でアンケートを実施し、学生自身の成長実感の実態や、成長･変化したこと、取組みへの課題、後輩への推奨度等を調査した。各年度のアンケートの実施方法については、以下の表通りである、なお、事後アンケートについては長期 FS に参加した学生だけでなく、短期 FS に参加した学生も含めて実施しており、1 年生 FS の参加者全員を対象としている。

平成 29 年度～令和元年度のアンケート実施方法

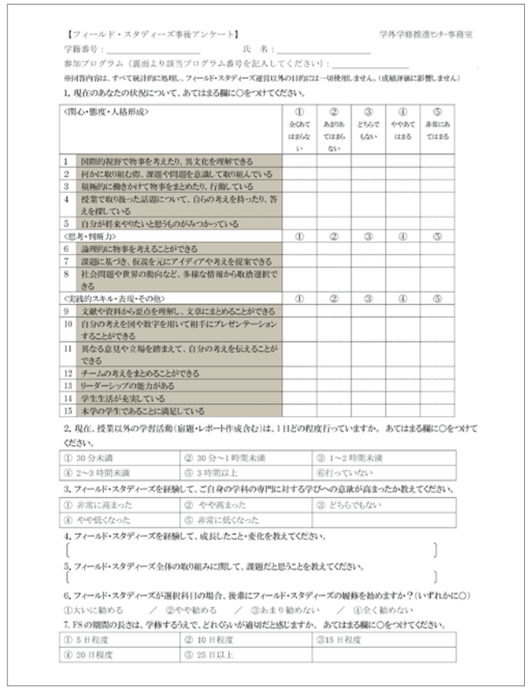
対象	実施方法	回答数		
		H29	H30	R1
長期FS参加学生	学外学修の事前と事後でアンケートを実施。事前は6～7月の事前学修（マナー講座）時に実施し、事後は10月のキャリアデザイン授業の初回時に実施	218	280	231
短期FS参加学生	学外学修後に事後アンケートを実施。10月のキャリアデザイン授業の初回時に実施	1,624	1,664	1,604

①成長実感について

成長実感の実態調査については、本学の DP に基づき、FS に参加した学生へ求められる成長指標を定義し、FS の事前と事後で、学生が成長を実感しているかを測るアンケートを実施した。成長指標については、次の通り定義した。まず、本学では前述した DP のうち、学生が修得すべき重要な能力を DP1 ～ DP4 と呼んでいる。

DP1・・・学びの基礎力を基盤とした専門能力

令和元年度の学生対象の事後アンケート内容


【フィールド・スタディーズ事後アンケート】　学外学修推進セン･事務室

学籍番号：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　氏　名：＿＿＿＿＿＿＿＿

参加プログラム（裏面より該当プログラム番号を記入してください）：＿＿＿＿＿＿

※回答内容は、すべて統計的に処理し、フィールド･スタディーズ運営以外の目的には一切使用しません。（成績評価に影響しません）

1. 現在のあなたの状況について、あてはまる欄に○をつけてください。

〈関心・態度・人格形成〉	① 全くあてはまらない	② あまりあてはまらない	③ どちらでもない	④ ややあてはまる	⑤ 非常にあてはまる
1 国際的視野で物事を考えたり、異文化を理解できる					
2 何かに取り組む際、課題や問題を意識して取り組んでいる					
3 積極的に働きかけて物事をまとめたり、行動している					
4 授業で取り扱った話題について、自らの考えを持ったり、答えを探している					
5 自分が将来やりたいと思うものがみつかっている					
〈思考・判断 力〉	①	②	③	④	⑤
6 論理的に物事を考えることができる					
7 課題に基づき、仮説を元にアイディアや考えを提案できる					
8 社会問題や世界の動向など、多様な情報から取捨選択できる					
〈実践的スキル・表現・その他〉	①	②	③	④	⑤
9 文献や資料から要点を理解し、文章にまとめることができる					
10 自分の考えを図や数字を用いて相手にプレゼンテーションすることができる					
11 異なる意見や立場を踏まえて、自分の考えを伝えることができる					
12 チームの考えをまとめることができる					
13 リーダーシップの能力がある					
14 学生生活が充実している					
15 本学の学生であることに満足している					

2. 現在、授業以外の学習活動（宿題･レポート作成含む）は、1 日どの程度行っていますか。あてはまる欄に○をつけてください。

① 30 分未満	② 30 分～1 時間未満	③ 1～2 時間未満
④ 2～3 時間未満	⑤ 3 時間以上	⑥行っていない

3. フィールド･スタディーズを経験して、ご自身の学科の専門に対する学びへの意欲が高まったか教えてください。

① 非常に高まった	② やや高まった	③ どちらでもない
④ やや低くなった	⑤ 非常に低くなった	

4. フィールド･スタディーズを経験して、成長したこと･変化を教えてください。

〔　　〕

5. フィールド･スタディーズ全体の取り組みに関して、課題だと思うことを教えてください。

〔　　〕

6. フィールド･スタディーズが選択科目の場合、後輩にフィールド･スタディーズの履修を勧めますか？(いずれかに○)

①大いに勧める　／　②やや勧める　／　③あまり勧めない　／　④全く勧めない

7. FS の期間の長さは、学修する上で、どれくらいが適切だと感じますか。あてはまる欄に○をつけてください。

① 5 日程度	② 10 日程度	③15 日程度
④ 20 日程度	⑤ 25 以上	

＜知識・専門性＞

DP2・・・他者と自己を理解し、自発的に踏み出す力

＜関心・態度・人格形成＞

DP3・・・課題を多角的に捉え、創造的に考える力

＜思考・判断＞

DP4・・・多様な人々のなかで、自らの考えを表現・発信する力

＜実践的スキル・表現＞

次に、これらの能力のうち、学外学修を経験することで特に成長が期待される DP2 ～ DP4 について、必要だと考える力を細分化して 13 の成長指標を作成し、質問項目とした。なお、DP1 については、1 年次で実施する 1 年生 FS は専門の学びを深めていくための基盤を養う取組みであるため、専門性を求める DP1 は除外して成長指標を作成した。そして、学生には、設定した成長指標 13 項目に対し、

成長実感を測るための質問項目

No	対応DP	質問項目（成長指標）
質問1	DP2 他者と自己を理解し、自発的に踏み出す力 ＜関心・態度・人格形成＞	国際的視野で物事を考えたり、異文化を理解できる
質問2		何かに取り組む際、課題や問題を意識して取り組んでいる
質問3		積極的に働きかけて物事をまとめたり、行動している
質問4		授業で取り扱った話題について、自らの考えを持ったり、答えを探している
質問5		自分が将来やりたいと思うものがみつかっている
質問6	DP3 課題を多角的に捉え、創造的に考える力 ＜思考・判断＞	論理的に物事を考えることができる
質問7		課題に基づき、仮説を元にアイディアや考えを提案できる
質問8		社会問題や世界の動向など、多様な情報から取捨選択できる
質問9	DP4 多様な人々のなかで、自らの考えを表現・発信する力 ＜実践的スキル・表現＞	文献や資料から要点を理解し、文章にまとめることができる
質問10		自分の考えを図や数字を用いて相手にプレゼンテーションすることができる
質問11		異なる意見や立場を踏まえて、自分の考えを伝えることができる
質問12		チームの考えをまとめることができる
質問13		リーダーシップの能力がある

平成 29 年度～令和元年度 1 年生長期 FS の成長実感（事前・事後）

年度	プログラム区分	時期区分	回答数	質問1 国際的視野で物事を考えたり、異文化を理解できる	質問2 何かに取り組む際、課題や問題を意識して取り組んでいる	質問3 積極的に働きかけて物事をまとめたり、行動している	質問4 授業で取り扱った話題について、自らの考えを持ったり、答えを探している	質問5 自分が将来やりたいと思うものがみつかっている	質問6 論理的に物事を考えることができる	質問7 課題に基づき、仮説を元にアイディアや考えを提案できる	質問8 社会問題や世界の動向など、多様な情報から取捨選択できる	質問9 文献や資料から要点を理解し、文章にまとめることができる	質問10 自分の考えを図や数字を用いて相手にプレゼンテーションすることができる	質問11 異なる意見や立場を踏まえて、自分の考えを伝えることができる	質問12 チームの考えをまとめることができる	質問13 リーダーシップの能力がある	項目全体
H29	長期（宿泊）	事前	78	3.46	3.83	3.67	3.71	3.29	3.46	3.72	3.35	3.46	3.24	3.95	3.60	2.94	3.51
	長期（宿泊）	事後	147	3.85	4.12	3.82	3.97	3.39	3.71	3.73	3.69	3.63	3.58	4.01	3.65	3.23	3.72
	差分	差分		**0.39**	0.28	0.15	0.27	0.10	0.25	0.02	0.35	0.17	0.33	0.07	0.05	0.30	0.21
	長期（通学）	事前	57	3.28	3.77	3.46	3.61	3.51	3.46	3.30	3.16	3.33	3.14	3.63	3.26	2.63	3.35
	長期（通学）	事後	71	3.21	4.07	3.77	3.69	3.48	3.51	3.68	3.52	3.62	3.39	3.80	3.45	3.01	3.55
	差分	差分		**-0.07**	0.30	0.31	0.07	**-0.03**	0.05	**0.38**	**0.36**	0.29	0.25	0.17	0.19	**0.38**	0.20
	長期全体	事前	135	3.39	3.81	3.58	3.67	3.39	3.46	3.54	3.27	3.41	3.20	3.81	3.46	2.81	3.44
	長期全体	事後	218	3.64	4.10	3.80	3.88	3.42	3.65	3.72	3.64	3.63	3.52	3.94	3.59	3.16	3.67
	差分	差分		0.26	0.29	0.23	0.21	0.04	0.19	0.17	**0.37**	0.22	0.32	0.13	0.13	**0.35**	0.22
H30	長期（宿泊）	事前	81	3.54	3.81	3.36	3.84	3.48	3.49	3.48	3.46	3.25	3.20	3.70	3.43	2.99	3.46
	長期（宿泊）	事後	167	3.75	4.17	3.97	3.93	3.62	3.71	3.82	3.56	3.65	3.63	3.98	3.59	3.29	3.74
	差分	差分		0.21	**0.35**	**0.61**	0.09	0.14	0.22	0.34	0.11	**0.41**	**0.43**	0.28	0.17	0.30	0.28
	長期（通学）	事前	91	3.37	3.63	3.37	3.52	3.37	3.32	3.36	3.25	3.27	3.19	3.53	3.22	2.96	3.33
	長期（通学）	事後	113	3.12	3.94	3.74	3.74	3.42	3.50	3.50	3.31	3.50	3.31	3.62	3.35	2.92	3.46
	差分	差分		**-0.25**	0.31	**0.37**	0.23	0.06	0.18	0.13	0.06	0.22	0.12	0.09	0.13	**-0.04**	0.12
	長期全体	事前	172	3.45	3.72	3.36	3.67	3.42	3.40	3.42	3.35	3.26	3.19	3.61	3.32	2.97	3.39
	長期全体	事後	280	3.50	4.08	3.88	3.85	3.54	3.63	3.69	3.46	3.59	3.50	3.83	3.49	3.14	3.63
	差分	差分		0.05	**0.36**	**0.51**	0.19	0.12	0.23	0.27	0.11	0.33	0.31	0.22	0.18	0.17	0.23
R01	長期（宿泊）	事前	59	3.59	3.80	3.45	3.86	3.70	3.31	3.66	3.38	3.44	3.30	3.64	3.38	2.83	3.49
	長期（宿泊）	事後	125	4.04	4.18	4.02	4.08	3.73	3.71	3.74	3.68	3.56	3.59	3.95	3.66	3.31	3.79
	差分	差分		**0.45**	**0.39**	**0.58**	0.22	0.03	**0.40**	0.09	0.30	0.12	0.29	0.31	0.27	**0.48**	0.30
	長期（通学）	事前	95	3.48	3.76	3.50	3.67	3.56	3.26	3.45	3.25	3.23	3.03	3.60	3.32	2.81	3.38
	長期（通学）	事後	106	3.45	3.91	3.69	3.65	3.35	3.41	3.53	3.32	3.39	3.33	3.81	3.43	2.94	3.48
	差分	差分		**-0.03**	0.15	0.19	**-0.02**	**-0.21**	0.14	0.08	0.07	0.16	0.30	0.21	0.12	0.13	0.10
	長期全体	事前	154	3.53	3.77	3.48	3.78	3.65	3.32	3.55	3.32	3.34	3.16	3.65	3.38	2.86	3.45
	長期全体	事後	231	3.77	4.06	3.87	3.88	3.55	3.57	3.65	3.52	3.48	3.47	3.89	3.55	3.14	3.65
	差分	差分		0.24	0.28	**0.39**	0.10	**-0.10**	0.25	0.10	0.19	0.14	0.32	0.23	0.17	0.28	0.20
3ヵ年全体	長期（宿泊）	事前	218	3.53	3.82	3.49	3.82	3.50	3.46	3.62	3.41	3.40	3.26	3.81	3.51	2.96	3.51
	長期（宿泊）	事後	439	3.87	4.15	3.94	3.99	3.58	3.71	3.77	3.64	3.62	3.60	3.98	3.63	3.28	3.75
	差分	差分		0.34	0.34	**0.44**	0.17	0.08	0.25	0.15	0.23	0.22	0.34	0.18	0.12	0.32	0.24
	長期（通学）	事前	243	3.40	3.69	3.42	3.58	3.44	3.31	3.37	3.22	3.25	3.10	3.56	3.25	2.80	3.34
	長期（通学）	事後	290	3.27	3.96	3.73	3.70	3.41	3.47	3.55	3.37	3.49	3.34	3.73	3.40	2.95	3.49
	差分	差分		**-0.13**	0.27	0.31	0.12	**-0.03**	0.16	0.18	0.15	0.24	0.24	0.18	0.16	0.15	0.15
	長期全体	事前	461	3.46	3.75	3.46	3.69	3.47	3.38	3.49	3.31	3.32	3.17	3.67	3.37	2.87	3.42
	長期全体	事後	729	3.63	4.08	3.85	3.87	3.51	3.62	3.68	3.53	3.57	3.50	3.88	3.54	3.15	3.65
	差分	差分		0.17	0.33	**0.40**	0.18	0.04	0.24	0.19	0.22	0.25	0.32	0.21	0.17	0.27	0.23

※差分については、0.35以上を黒塗りの白字、0未満を濃い灰色塗りの黒字としている。

「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの 5 段階で回答してもらった。アンケート集計における、成長実感の数値は、「非常にあてはまる」を 5 ポイント、「ややあてはまる」を 4 ポイント、「どちらでもない」を 3 ポイント、「あまりあてはまらない」を 2 ポイント、「全くあてはまらない」を 1 ポイントとして算出した。この数値を、学外学修の事前と事後で集計し、その差分から成長度合を検証している。

それでは、平成 29 年度から令和元年度までの成長実感について確認する。1 年生 FS のうち、長期 FS（宿泊型、通学型）における、平成 29 年度から令和元年までの 3 年間の FS 実施前と実施後の成長実感をまとめた。

平成 29 年度については、質問 8「社会問題や世界の動向など、多様な情報から取捨選択できる」において受講後の大きな伸びが見られる。これは実際に社会に出て、自分の目や耳や体で社会課題を体感し、学生にとっては刺激的で新しい多くの情報に触れ、それらを事後授業で整理し、まとめるからだと考えられる。また、質問13「リーダーシップの能力がある」においても同様に大きな伸びが見られる。これは、長期 FS は 20 日以上の長い活動期間中に、初めて会う受入先の方々や学生同士でコミュニケーションを取り、各学生がやるべき役割において、自ら主体的に課題に対処しなければならない機会が多くあるのが要因であろう。入学前までは社会経験がほとんどない学生が多く、自ら動かなければ進まない、何も出来ずに時間だけが過ぎていくという環境が、学生それぞれの役割においてリーダーシップを取ったと感じさせていると推察される。一方で、質問 5「自分が将来やりたいと思うものがみつかっている」においては、ほぼ変化が見られなかった。一度の長期 FS の参加で、将来を決めるには至らなかったとしても、この経験が将来を考えるきっかけとなることを目指している。

次に、平成 30 年度については、質問 3「積極的に働きかけて物事をまとめたり、行動している」において受講後の大きな伸びが見られる。これは、平成 29 年度 FS 実施後の教員・受入先のアンケートでの FS の目的が明確に共有出来ていないという意見を踏まえて、事前学修を重視し、学外学修の目的や内容を丁寧に伝え、学生自ら主体的に動く姿勢を養ったことが影響していると考えられる。質問 2「何かに取り組む際、課題や問題を意識して取り組んでいる」の成長実感が伸びているのも同様の理由であると考えられる。また、平成 30 年度はプログラム数を前年度 34 から 61 に大幅に増やし、学生の選択肢が増えたことも、学生が意欲的に参加できている要因の一つであろう。

最後に令和元年度の結果を見ると、宿泊型の長期 FS においては、平成 30 年度同様、質問 2「何かに取り組む際、課題や問題を意識して取り組んでいる」と質問 3「積極的に働きかけて物事をまとめたり、行動している」の成長実感に大きな伸びが見られる。令和元年度は平成 30 年度に引き続き、事前事後学修の重要性を意識し、学内の教職員及び受入先に事前事後学修の意図を周知・共有し、学外学修中だけでなく事前事後学修を含めた学外学修全体で主体的態度を養っていることが伸びの要因であると考えられる。加えて、質問 1「国際的視野で物事を考えたり、異文化を理解できる」、質問 6「論理的に物事を考えることができる」、質問 13「リーダーシップの能力がある」の成長実感も伸びており、FS を通して DP2 ～ DP4 までの様々な能力の成長を学生が実感していることになる。一方で、通学型の長期 FS においては、平成 29、30 年度と比して、全体的な成長実感の伸びが低い数字となり、3 項目で成長実感が減少する結果となった。これは通学型の長期 FS の 1 プログラム当たりの学生参加人数を多くしたことが要因であると考えている。令和元年度は前述したとおり、平成 30 年度の運用上の課題を踏まえて、プログラム数を削減し、1 プログラム当たりの学生参加人数を増やした。平成 30 年度の通学型の長期 FS の 1 プログラム当たりの平均参加人数は 3.11 人であったが、令和元年度は 4.96 人となっている。宿泊型の長期 FS ではその影響は見られなかったが、元々通学型の長期 FS は受入学生数が少ない中で、この受入学生数の増加は受入先の負担となり、学生一人ひとりへの指導が難しくなった可能性も考えられる。併せて、通学型の長期 FS の参加希望学生には面接等の選抜を行っているが、参加学生枠が増えたことにより、受入先への学修動機が高くない学生が参加したことも要因の一つであろう。令和 2 年度以降については、受入先と相談しながら、適正な受入学生数を検討していく。

このように 3 年間の結果を見ると、長期 FS における学生の成長実感にはある程度の伸びがあったと言える。一方で、AP 事業の主な達成目標の一つである「学生の授業外学修時間が週 11 時間以上の学生の割合」については、目標数値を平成 28 年度 9.1%、平成 29 年度 10.0%、平成 30 年度 15.4%としていた。これは FS を通して主体的な学びの態度を養うことを目指した指標であるが、結果としては、平成 28 年度 7.8%、平成 29 年度 9.1%、平成 30 年度 8.7%となった。つまり、成長は実感しているが、他の科目との繋がりや専門の学びの有用性への気づきからくる実際の学修行動については全体的にはまだ不十分であり、本事業が学士課程教育全体により良い影響を与えることができるよう更なる検証・改善を重ねていく必要がある。

②成長感と認識課題について

学生の成長実感と併せて、学生視点からの FS の成果と課題を検証するため、学生に対して「FS を経験して、成長したこと・変化したこと」と「課題だと思うこと」について、自由記述で回答してもらった。その中からいくつかのコメントを抜粋し、学生の成長感と認識課題をまとめた。まず、1 年生の長期 FS が本格稼働した平成 29 年度を見てみると、成長感、認識課題共に、コミュニケーション能力や協調性等、他人との関わり方に関する記述が多かった。他には、高校生までは社会への意識が無かったが、FS を通して社会を体感

平成 29 年度～令和元年度の
長期 FS の学生へのアンケート結果（自由記述まとめ）

年度	成長感	認識課題
平成29年度	関わりのなかった人たちと1ヶ月生活して、相手を思いやる気持ちやコミュニケーション力を上げられたと思う。また、今までと全く違う環境を体験し少し広い視野で物を見たり考えたり出来るようになった。	何をやるにもメンバーとの協力が必要だと感じたので、ある程度のコミュニケーション能力を身につける必要がある。自分から積極的に物事に取り組んでいく姿勢が必要である。
	自分の意見を言うことに抵抗を感じなくなった。積極的に行動することができるようになった。自分で物事を考え、行動できるようになった。	複数人で共同作業をする、というときに仲間を引っぱっていく勇気や話を聞く器用さを身につければ、自分の視野が広がっていく。
	当たり前だと思っていた事が全く違って、自分の見ていた世界の狭さを感じ、より広い視点で物事や社会を見る事が出来た。	いかに他者との理解を深められるかだと思う。実習期間を通して他者との理解を深め、その他者から自分がどう写っているかを見ることが重要だと思う。
	バイト経験も無く、学生の世界しか分からなかったけど、社会人の世界を見ることができ、責任感とか、色々なスキルが必要なのだと知った。今よりもさらに多くのことを学ぶ必要があると、意識が変わった。	もっと事前課題に時間をかけるべきだった。現地の人とのコミュニケーションも不足していた。きちんとした目標を持ち参加するべきであった。
平成30年度	相手の立場に立って考えること、人のために動くことの楽しさ、大切さを知った。周りの人を大切にするようになった。人との関わりが大切だと知った。	色んな所へ行って、色んな人と話すコミュニケーション力が必要であった。積極的に自ら取組むことや、様々な人を巻き込む力が必要であった。
	チームで活動する際に、積極的に自分から行動できるようになり、自分の意見を自分の言葉で伝えられるようになった。課題を見つけ、解決策を自分で考える力がついた。	自己を客観視して理解することが必要であった。1日1日をもっとしっかり反省すれば良かった。
	異文化に触れ、今まで経験してきた文化との違いを感じ、視野や考え方が広がった。価値観が変わった。	事前学修をしっかりしてほしい。何のためにやるかわからない。
	被災された方の状況や心情が分かった。また、電気や水等、普段あたり前に使っているものの大切さを改めて痛感した。	遊び半分で取り組む人がいる。意欲的に参加する人が少ない。第一希望のプログラムに行けないとやる気がでない。
	自分がどういった事が向いているのかを考えることができた。自分の得意な所と苦手な所がはっきりした。	2学期のプログラムを選んだ場合、2学期の授業が履修削除される。
令和元年度	異文化理解、語学（英語・中国語）、伝統文化、食文化、歴史、宗教、WEBデザイン、統計、地域福祉、地方行政、日米の医療・教育、環境問題、自然、最先端IT、防災、農家の現状、共生社会、経済問題、難民問題、高齢化問題等を学んだ。	プレゼンテーション時の発表の仕方や相手にうったえる力がもっと必要だと感じた。自分の考えをわかりやすくまとめて様々な人に正確に伝えていきたい。
	自分の専門に対する視野が広がった、勉強意欲、興味が高まった。学びが社会と繋がっていることに気づいた。物事を自分の専門分野の視点で見たり考えたりするようになった。	日本にはたくさんの問題があって、もっと視野を広げて行動していきたい。一つの見方に縛られずに様々な視点から見て、考えを増やしていくことが課題だと思った。
	働き方や仕事への責任感を学んだ。将来への意欲が高まった、海外を含め選択肢が広がった、夢や職業が定まった。	事前学修の大切さを知った。学ぶべき所をしっかり理解する必要がある。
	命の尊さ、人の優しさ、他人を助けることの大切さ、人との繋がりや感謝の大切さ、受入先への敬意、自分の限界や意識の低さ、地域貢献の大切さ、日本の素晴らしさ、現場を体験することの大切さ、ボランティア精神の大切さに気付いた。	事前学修が不十分であると感じた。また、事前事後学修・学外学修の事務連絡（日程・場所・教室・内容等）を早めに、詳細に、説明して欲しい。連絡のタイミングが遅い。
	広い視野、積極性、協調性、主体性、コミュニケーション能力（世代を超えて）、思考力、対応力、生活力（集団生活）、ストレス耐性、団結力、集中力、課題発見力・解決力、分析力、リーダーシップ能力、責任感、体力、マナー、礼儀、挨拶、自信、挑戦心、等が身についた。	真面目に取り組んでいる学生とそうでない学生との差がある。プログラム選択では第一希望にならない。プログラムごとに実習内容、費用、学生負担に差がある。

し、広い視野や積極的な行動の大切さに気づいたというような記述が多かった。また、認識課題では、事前課題に時間をかけるべきだった、きちんとした目標を持つべきだった、との意見も挙げられ、事前学修において長期 FS の目的や意義が十分に学生に理解されていなかった可能性があり、次年度への課題となった。

次に平成 30 年度の結果を見てみると、前年同様に、成長感では、他人との関わり方、広い視野、積極的な行動に関する記述が多かった。その他、自分が何に向いているかを考えるきっかけとなったというような自己理解に関する記述も目立った。一方、認識課題では、学生自身の自省だけでなく、事前授業をしっかりして欲しい、プログラム選考では第一希望でないとやる気が出ない、2 学期に実施する FS に行くと 2 学期の科目を履修できない、等の FS の全体運営に係わる要望があった。これらの要望と後述する教員・受入先アンケートの結果を踏まえて、令和元年度に向けては、事前事後授業や全体運営の方法等について改善を図った。

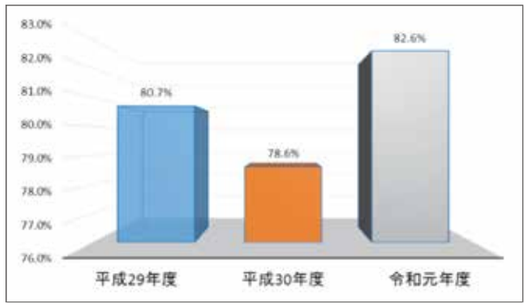
最後に、令和元年度の結果を見てみると、成長感では専門の学びに繋がる FS が増えたことから、多様な分野での学びに繋がったとの意見が多かった。学生によっては、その学びが社会と繋がっていることに気づき、物事を自分の専門分野の視点で見たり考えたりするようになったという意見もあった。その他、社会や人々への感謝や将来の進路への気づき等の記述があり、昨年度に比して成長感へのコメントが多くなった。認識課題については、プレゼンテーションの未熟さや視野・考えの狭さに関する記述が多かった。また、昨年度よりは減っているが、FS の全体運営に関する記述がいくつかあり、令和 2 年度以降の課題として改善に努めていく。

3 年間を通して、長期 FS については、成長感、認識課題共に他人との関わり方や、広い視野・考え方、積極的な行動に関する意見が多かった。これは長い間、学外に出て、他人と共同で問題に取組むことや、時には、知り合って間もない他学部の学生と約 1ヶ月間寝食を共にし、地方課題に取組んでいくことなど、学生のこれまでの人生では経験が無かったことが多く、学生にとって人と深く関わり合うインパクトのある経験となったためであると考えている。この経験が学生の成長の土台となり、4 年間の学びに繋がり、将来の進路を深く考えるきっかけとなることを念じている。

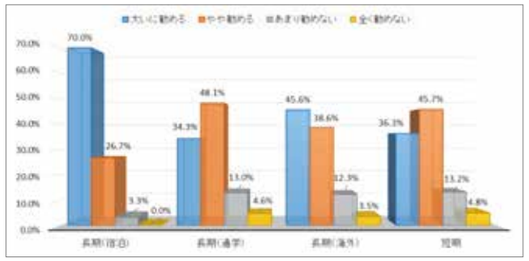
③後輩への推奨度について

FS を先輩が後輩に勧めることが出来る、本学の特色ある教育プログラムとして確立するために、1 年生 FS の参加学生に対して、「後輩に FS 履修を勧めるか」という内容で、アンケートを実施し、後輩への FS 推奨度を調査した。まずは、平成 29 年度から令和元年までの 3 年間について、1 年生 FS（短期 FS 含む）の参加学生の後輩への推奨度を確認する。アンケートでは、後輩に勧めるかという質問に対して「大いに勧める」「やや勧める」「あまり勧めない」「全く勧めない」の 4 段階で回答をしてもらった。「大いに勧める」と「やや勧める」と回答した学生の割合を算出すると、平成 29 年度は 80.7%、平成 30 年度は 78.6%、令和元年度は 82.6%となり、どの年も約 8 割の学生が後輩に FS 履修を勧めると回答している。平成 30 年度の推奨度の減少は、前述した通り、プログラム数増加によるプログラムの質低下が原因であると考えられる。次に、FS プログラムの各区分［長期（宿泊）、長期（通学）、長期（海外）、短期］での推奨度についても確認する。令和元年度の区分別推奨度を見てみると、国内の宿泊型の長期 FS の推奨度が高く、「大いに勧める」が 70.0%で「やや勧める」と合わせると 96.7%となり、ほぼ全ての学生が後輩に勧めるという結果になった。また、海外の長期 FS についても、「大いに勧める」が 45.6%で「やや勧める」と合わせると 84.2%となり、多くの学生が後輩に勧めるプログラムとなっている。学生アンケートや後述する教員・受入先のアンケートでは自由記述にて多くの課題が挙げられているが、学生視点では 8 割以上の学生が FS を後輩に勧めるという結果となった。

平成 29 年度～令和元年度の 1 年生 FS の推奨度



令和元年度の 1 年生 FS の区分別推奨度



（2）担当教員へのアンケートについて

学外学修の学修効果や課題を調査し、授業改善や事業の運営改善に繋げることを目的として、教員にアンケートを実施した。FS 実施後に、プログラム担当教員に対して、学生がどう成長したかや、課題と感じていることについて、自由記述で回答してもらった。その中からいくつかのコメントを抜粋し、まとめた。1 年生の長期 FS が本格稼働した平成 29 年度について、学修効果としては、社会性や協調性、積極性、責任感等が高まり、学生の成長が見られるという意見や、全学部共通科目のため複数学科の学生と長期間の学外学修をすることで、新たな気づきや自分自身の将来を見つめ直す機会となっているという意見が多かった。一方で課題については、初年度ということで、教員と受入先と職員の三者で FS の目的が明確に共有できていない、教員の負担が大きい、学外学修時にどのくらい教員が指導・マネジメントするのが良いか手探りである、学生のマッチングに課題がある、といった多様な意見が挙げられた。これは FS が今までにない授業スタイルと規模（1 年生約 2 千人が全員必修）で新しく実施したため、多くの課題が出て当然であり、より良いプログラムに改善していくために必要な課題であった。学長直轄の教育改革推進会議にて、課題を整理・検証し、FS 事業が本学の特色ある取組みであり、全学を挙げて取組むものであるということを再確認のうえ、学内外に改善点を共有した。教員には FS 事業の目的や意義を FS プログラム担当者説明会や FD 研修を兼ねた学外学修シンポジウム等で丁寧に説明した。各プログラムにおいては、教員と受入先と職員の連携を出来る限り密に行うように努め、今まで職員が企画したプログラムでは教員主導での企画修正及び運営推進を心掛けた。

次に、平成 30 年度のアンケート結果を見てみると、学修効果については、学外学修の体験を通して社会課題と専門の学びが繋がったという意見や、地方での学外学修を通して人の関わり方や地方独自の課題を実感したとの意見が多かった。課題については、昨年度多かった FS の目的が曖昧であるという意見が減り、事前事後授業を充実させる必要がある、学修動機が上がらず活動先で主体的に動けない学生がいる、社会人としての常識や挨拶、時間厳守、礼儀等が出来ない学生がいる、というようなより具体的な意見が挙げられた。これを受け、教育改革推進会議では、事前学修の重要性を確認し、学外学修前にプログラムの目的や内容を丁寧に伝え、学生の学びへの能動的な態度を養うこととした。また、教員が主導する専門の学びに繋がる FS 等の、学生にとって「なぜ学ぶのか」が分かり易く、学外学修がただの勤労奉仕ではない学修効果や付加価値のあるプログラムを増やし、学習者本位の授業運営を推進することとした。

平成 29 年度～令和元年度の
長期 FS のプログラム担当教員へのアンケート結果（自由記述まとめ）

年度	学修効果	課題
平成29年度	学生の成長が感じられる。実施前はバイト経験も無く、消極性や社会性に疑問を感じる学生であったが、事後学修では積極的に経験や学びを取りまとめている。これはFSの大きな成果と考える。1ヶ月間の共同生活を通して、学生が人間性、協調性、忍耐力、コミュニケーション力、規律の遵守等を高められた。今後は、これをそれぞれの学びにどのように生かしていくのかが期待するところである。	初年度ということもあって、FSの目的が明確に共有されてなかった（一歩間違えると、受入先の単純労働の補助をしただけになってしまう危険もある）。手探りの状態で事前準備も十分ではなかった。FSは活動先のプログラム内容にその成否が左右されるため、受入先との協働による開発等、緊密な連携が必要となる。長期的な展望の中でこの体制をどうつくるかが今後は大切になると考える。
	FSを通じて、学生全員、一回りも二回りも大きく、逞しく成長し、積極性や責任感が涵養された。自身が育った都会とは異なる環境の過疎地域で、初対面の地元の人たちの中に入り込んで、積極的な交流を進めたことで、視野が広がり、社会性や環境の変化への適応力も格段と上昇した。全員が力を合わせて一つの取組みを成功させ、その達成感が大きな自信にも繋がった。	教員の負担が大きい。プログラムを進めていく中で業務内容・役割が増えていった。教員の役割や負担について事前の説明が必要である。FS の実施が授業期間中と重なる場合、担当教員はスケジュール調整が困難である。授業や業務負担が少ないなら別だが、そうでない場合は厳しい。FS の実施期間や担当教員の配当のあり方について、改善を図っていただきたい。長期は授業期間との調整が必要である。
	異なる学科の学生と専門領域以外の活動を通して、共に学ぶ経験は学生のみではなく、教員にも新たな学びの機会となった。複数学科の学生がチームとなることで、学生が自分自身を見つめ直す機会にもなっている。	受入先にお願いしている学外学修で、どこまで教員が関わるのか、悩ましいものがあった。ギャップイヤー本来の趣旨をもとに考えると「あまり教員は関わらない（あれをしろ、これをしろとは言わない）」ことが求められる。
	学生自身が自らの成長を実感している。社会人の中に入り、一緒に仕事をする中で、学生の社会性が向上し、仕事をするうえでの自らの課題や強みに理解が深まった。	対人関係能力に課題が見受けられる学生が参加し、実習先には大変なご迷惑をお掛けしてしまった。今後どのように学生とプログラムをマッチングするか大きな課題である。
平成30年度	学びに繋がるFSにすることと、事前事後学修は必須と考えて実施した。学生が大教室講義だけでは身につかない共同実地研究を経験し、社会問題と自身の専門の繋がりを理解したこと、意見集約や発表能力の向上等に明確な進歩を示したこと等の効果を実感できた。	教員がしっかり主導して、専門の学びにつながるFSにすること。全てのFSにおいて事前事後授業を充実させること。十分な事前事後授業なしに長期間外に出してもFSとして適切なものにならない。
	地域で暮らすことで、地域を身近に感じ、現状や課題を考えるようになった。買い物の不便さ等の地域の方と同じ悩みを体験的に抱えることで、問題を考える視点が変わった。	プログラムの内容は非常に良いので、あとは事前学修などの工夫をして学生側のモチベーションをあげていく（教員側の）仕組み作りが課題かと思う。
	通常の授業では絶対に経験できない、貴重で特殊な環境の下で実地体験学習ができ、やや「ショック療法」のようにはなったが、卒業後に社会で活躍するうえで、他では得難い多くの体験と教訓を得ることができた。	1年生全員必修であるため、不本意での参加となる学生も多くいる。学生のモチベーションなどを考慮した運用体制が望まれる。事前授業と現場指導がしっかりと出来ていないと、やらされている感の強い活動に終始してしまう。
	海外研修でのESL、授業聴講、インターンシップ等を通じて、海外文化、海外学生の授業態度、論理的思考等を学ぶことが出来た。	１年生が取り組むということを考えると、適切な挨拶や言葉遣い、仕事への取り組み方、職場での振舞い方等の指導をもっと徹底すべきである。
	学生同士が親密になり、人と親しくなるアプローチが分かり、それが今後のコミュニケーションに繋がると思う。	事前事後学修の日程の調整。学生が所属する学科の科目と授業と重複した場合の対応が困難である点は問題である。
令和元年度	大変意義があり、学生が成長する良い機会であると感じた。自信をつけた、協力し合えるようになった、相手の立場に立ち相手のことを自分事として捉えるようになった、積極的になった、新しい気づきがあった等の成長を感じた。	宿泊型の長期FS での自炊の困難性や1ヵ月の共同生活における自制能力の限界を感じる。空き家を借りて食事や掃除など生活面を学生がやるよりも、民宿等で学生は学びに集中できるようにすべきではないかと感じる。
	社会課題と専門の学び（仏教精神、地方行政、法律、建築、福祉、語学等）との繋がりを実践的に学修し、現実社会の問題に関心を持つようになった。	事前事後学修の日時設定が非常に困難である。調整等の業務量が多い、海外引率の責任が大きい、学科により貢献度・負担度が異なる。教員への公平な評価をお願いしたい。
	社会の実態や海外の発展状況、他者の真剣な態度や意識の違い、ホンモノの文化芸術等を見て体験することで、社会問題を身近に捉え、強い関心と危機感を持ち、将来を考えるきっかけとなった。	参加学生に意識の違いがあった。学生としての基本的マナー等の研修の充実が必要である。学生を見ると、各学科での授業の取組み方に違いがあるのではないかと思うことが多々ある。
	事前事後学修で学びが深まった。特に事後学修は学びを整理し、今後の学びに活かすために重要である。	FS全体の運営では、プログラムの選出条件、学生の選抜方法、履修・単位付与の条件、実習ノートの項目、緊急時対応の体制等について再検討を要望する。

最後に、令和元年度の結果を見てみると、本学 DP2 の関心・態度・人格形成において学生の成長を感じたり、社会課題と専門の学びとの繋がりを体験的に学修することを通して、社会問題や自身の学びに強い関心を持ったりしているとの意見が多かった。課題については、宿泊型の長期 FS における共同生活の困難性や 2 学期における事前学修の日程調整の難しさ、学生の参加意識・態度・基本的マナーの格差等が挙げられた。これらを受け、令和 2 年度以降については、引き続き、教員主導の専門の学びに繋がるとか、人間の土台となる教養教育の学びに繋がるとか、学修効果や付加価値のあるプログラムを増やしていく。また、どのような事前事後学修を実施すれば学修効果が高いのか、好事例を蓄積し、FD 研修等で学内外に展開していく。

この 3 年間の教員の本事業への関与については、平成 29 年度 FS 引率教員数 20 名、平成 30 年度 22 名、令和元年度 33 名と年々関与者が増加しており、大学全体として本事業を推進する基盤が整備されている。そして、AP 事業の主な達成目標の一つである「学生の主体的な活動企画数」については、メインメジャー及びサブメジャー等で実施され、平成 30 年度の目標値 68 に対して、実績値も 68 となっている。今後は、教員が主体的に参加するだけでなく、より多くの学生が FS プログラムの企画・運営に主体的に参加できる教育指導を心掛け、学習者本位のプログラム構築を更に推進していく。令和元年度では一部の FS において、過去に FS に参加した上級生に引率者補助の役割を任せ、担当教員とプログラムに関する意見交換を行うことで、学生の立場に立ったプログラム改善及び構築が行われている。今後も、事前事後学修及び学外学修の授業改善を図り、学生の可能性を発見し、導き出しながら、学修効果や付加価値の高い武蔵野大学独自の学外学修プログラムを目指していく。

（3）受入先へのアンケートについて

本学と受入先との連携を互恵的且つ発展的に推進する

ことを目的として、受入先にアンケートを実施した。受入先にとって本学の学生を受入れることで、どのようなメリットと課題を感じているのか、自由記述で回答いただいた。その中からいくつかのコメントを抜粋し、まとめた。

まず、長期 FS が本格稼働した平成 29 年度については、受入先のメリットとして、活動先と学生との繋がりができ、活動先の目的はある程度達成出来たとの意見が多かった。一方で課題については、初年度ということで、長期 FS の目的や意義が十分に理解されておらず、受入先が学生をマンパワーとして捉えていたり、就職直結のインターンシップとして受入れていたりするケースも見られた。また、実際に約 1ヶ月間受入れた時に分かった、宿泊や交通手段、天候等の運営上の課題も多く挙げられた。これらの意見を踏まえて、受入先には、FS の目的を再度丁寧に伝え、運営上の課題については互いの状況を確認しながら、可能な限り改善を図った。

次に、長期 FS 本格稼働 2 年目の平成 30 年度のアンケート結果を見てみると、FS は教育事業であるということを理解いただき、学外学修中の受入先の丁寧な指導により、最終日に行う成果発表と提案では、大変良かった、参考になったとの意見が多かった。課題としては、互恵的連携を継続的に進めていくことの重要性や、適切な態度や深い興味が見られない学生も多いこと等が挙げられた。この結果を受けて、受入先のニーズを詳細に聞き、学生と教員の意見もフィードバックしながら、連携の深化を図った。また、担当教員に向けては、説明会等を通じて、事前事後学修の重要性を再度伝え、事前学修で目的や意義を伝えることで、学生が主体的に活動に取り組む意識や姿勢を養うよう努めた。

最後に、令和元年度の結果を見てみると、学外学修の目的や内容を事前に担当教員と受入先で議論・共有したプログラムについては、概ねお互いに満足した結果が得られており、今後も継続したいとの意見が多かった。更に、平成 30 年度よりキャンパス周辺のプログラムも増やしてきたが、地域課題への貢献に繋がっているという意見も多く、令和 2 年度以降も今まで身近にありながら気づかなかった地域の社会課題に気づき、体験していくプログラムを重視していく。一方で、受入先との事前調整や事前学修が不十分なプログラムについては、学生の意欲や態度が悪く、受入先の迷惑になった、負担になったという意見が多くあった。今後は、受入先と担当教員との事前の対話を大切にしたプログラム運営と、学生に気づきを与え、主体的に考え行動する力を養う事前学修を探求していきたい。また、実働 20 日間以上という学外学修期間についても、学生が集中でき、受入先が過度な負担にならないように、期間の短縮等を検討して欲しいとの意見があった。学外学修期間については、令和 2 年度は学外学修期間が 10 日間程度の中期 FS を設けることが決まっており、今後も継続して、適切な期間を学生・教員アンケート等より検証していく。

以上の通り、毎年、受入先の意見を聞き、確認・検証しながら、学外学修事業全体及び各プログラムの質向上に努めている。

平成 29 年度～令和元年度の
長期 FS の受入先へのアンケート結果（自由記述まとめ）

年度	受入のメリット・貢献	受入の課題
平成29年度	若者目線での市の魅力PRを目的としていたが、学生という立場での独自の視点や現場での適切な動きがあり、活動としては大変有効であった。課題設定をこなすための一つひとつの作業が現場作業中心であったことも研修環境としてプラスになったと思うが、何よりも研修生３名の積極的な姿勢と素晴らしいチーム力が好結果に結び付いた。	就職に係わるインターシップの受入れは実施してきていたが、今回の目的に対する受入れは初めてだったため、受入れに対する町の目的が不明確なまま進んでいる現状があった。今後は、まちづくりや町民に対する明確な施策、目的に対し、学生の受入れができればと考えている。
	農業と食の大切さの広報が目的であったが、遊休農地活性化に取り組む事業において一定の理解が得られた。	長期の活動であれば、入学したばかりの 1 年生が参加するよりも、就職を考え始める3年生くらいの方が良いのではないか。
	活動においてはマンパワーとして期待通りの貢献が得られた。	受入側として学生の生活拠点や宿泊先確保の整備が必要である。
	４週間の長期間に渡る様々な経験は学生の成長に繋がったと考えられる。	活動先周辺の公共交通機関が乏しいため、車の送迎等の移動手段を確保する必要がある。
	多くの町民と交流したことにより、学生と町民や地域おこし協力隊との繋がりができた。	天候が崩れたときの代替実習を事前に準備する必要があった。
	日報を通して学生の考えや思いを伺い知ることができ、かつ事業所としてその思いなどへの回答をすることで、事業理解が進んだと感じている。学生も意欲的に目的を持って活動してくれた。長期の活動ということで、焦らずに時間をかけて考え・行動することで事業理解が進んだと思う。	学生の生活態度に関しては、履物を揃えない、休日の朝は起きてこない、布団を畳まない、リビングのソファーで寝転がっているなど、下宿先での生活態度としては問題があった。家庭の躾のレベルではあるが、大学側でも事前学習の際に教育いただくようお願いしたい。
平成30年度	外からの視点を持つ武蔵野大学生が「町がよりよくなるための事業案」について、町長・議員をはじめ、町民に提案することができ、今後の町政運営の参考とすることができた。	大学との連携にあたって、当町の目的を達成させるためには、長いスパンで課題に取り組んでいく必要があるため、今後、いかに連携を取り続けられるかが課題になってくる。
	受け入れ農家が真に求めていることが浮かびあがったことやメディア制作・上映会というアウトプットをつくっていただいたことによるインパクト創出の点でメリットがあったと考えている。	学生がここを選んだ目的、目標を達成するための様々な機会を実習中に提供していきたい。そのためにも、現時点での学生の目標や課題をしっかりと聞いていきたい。
	受入農家のアンケートでは、概ね好感触で今後も受入したい、若い人と交流し元気をもらった、若い人の意見を知ることができた等の意見があった。最終日には、活性化に向けての提言発表をしていただき、今後の当会の活動の参考になった。	専門的な関連業務が多い当職場は、一般的な社会・職業体験の場としてはとしては特殊であると思われる。特に興味・関心を持たない学生にとっては、また、大学教育が始まったばかりの 1 年生にとって有益かどうか検討の余地があると思う。
	学生さんだけでなく、自団体のスタッフの育成にもなり、大変良かった。	学生によって課題意識に差がある。こちらが学生に提示する課題をもう少し具体化したい。
	徐々に教育という観点での関わりが増えており、団体としてのメリットは副産物でしかないが、地域との関係が濃くなったり、地域住民の参画が生まれたりと、メリットはあった。学生へのメリットがあれば目的は果たせたと考えている。	毎年学生が変わるため、継続性による事業効果の創出のハードルが高いと感じる。学生の学びの成果と、受入先の課題へのチャレンジとをどう両立させるか、お互いのゴールイメージを共有できればと思う。
令和元年度	町のファンを増やすことができた。町を体感しPR していただいた。	事前授業にて受入先から研修目的や意図を伝える機会があると良かった。
	夏になると地域住民から今年も来たね！と声を掛けられるようになった。学生が来ることにより、受入先のサービス対象者が生き生きと話す姿が見られた。このような活動が今後も続いて行けば良いと感じる。	受入学生数が多すぎると対応できず質が低下する、受入日数が多すぎると学生の体力が持たない。受入団体の負担や学生の体力を考慮し、実習期間の短縮などを検討するべきだと思う。
	事前準備において丁寧にコミュニケーションを取りながらできたので、良い実習となった。	実習ノートがただの感想文になっている。記入方法について事前に指導をして欲しい。
	約1ヶ月間という日程の中で、学生にも活動プログラムの計画・立案・実行をしてもらい、新鮮さがあり、利用者にも好評であった。	大学の担当教員と引率者と受入側がもっと連携を図り、プログラムの目的と内容をしっかり確認し、認識を一つにして受入れる必要性を感じた。
	身近な地域の大学との連携が継続することは、とても意味があることだと思う。	学生の態度、服装、言動に問題があった。受入先のサービス対象者にとって学生かどうかは関係のないことである。残念であった。

3. 入口や出口への効果

平成 24 年度より短期 FS を中心とした 1 年次全員必修の学外学修事業が始まり、平成 29 年度より長期 FS が本格的に開始された。この活動が 8 年間に渡り継続されたことで、活動先のテレビや新聞、ラジオといったマスメディアに取り上げるようになり、学内外で本学の FS の認知が広まった。これにより、FS の履修を希望して入学する高校生も徐々に増えてきている。また、学生が日本全国に学外学修に行くことで、武蔵野大学の名前を知らない地域への広報効果もある。実際に、民泊先のご子息や、現地での活動がきっかけで繋がった日本語学校の生徒等が本学を受験し入学している。また、令和元年度入学生より、高等学校以前での長期学外学修の経験を出願資格とした「武蔵野 FS 入試」を導入し、FS を大学全体の特色ある取組みの一つと位置付け、入試広報に繋げている。

また、1 年生 FS を経験した学生が 2 年次以降のメインメジャー及びサブメジャーによる専門的な長期学外学修プログラムに参加し、その専門性を活かした進路に進むケースも出てきている。サブメジャーゼミにおいて平成 29 年度まで実施していた「ホスピタリティ産業ゼミ」では、平成 27 ～ 29 年度の 3 年間で 35 名の履修者のうち、航空・ホテル・ブライダル等のホスピタリティ業界に進んだのは 18 名となった。そのうち 5 名は航空会社の客室乗務員となっている。また、平成 24 年度より実施している北海道東川町と連携した「地方行政・図書館司書ゼミ」の 5 期生（平成 29 年度卒業生）は、7 名の履修者のうち、3 名が地方公務員、1 名が地方信用金庫、1 名が公益財団法人の団体職員、1 名が学校職員となり、1 期生からの 5 年間では 10 名の公務員を輩出し、その他も多くの学生が地域のために働く進路に進んでいる。また、平成 28 年度より実施している、実務家教員からコピーライティングを学ぶ「コピーライティングゼミ」の 1 期生（平成 30 年度卒業生）は、学生 5 名中 3 名がコピーライターとして就職し、2 期生（令和元年度卒業予定）も 5 名中 2 名が広告関係の就職が内定している。その他のサブメジャーゼミにおいても、学生が自ら選び、深く学んだ専門分野を活かして就職しているケースが多く見られ、2 年生以上の学外学修を通した深い専門の学びが出口にも影響を与えている。

なお、1 年次に実施する長期 FS に参加した学生の出口への効果については、長期 FS の本格稼働が平成 29 年度からであるため、令和 2 年度卒業生の進路が決まってから検証することが可能となる。今後も、AP 事業の人材育成目標である、自発自然型人材、グローバル人材、地域貢献人材の輩出に向け、2 年次以降の発展的な FS を充実させながら、学外学修事業を体系的に推進していく。

4. まとめ

本章では、5 年間の学外学修事業の成果と課題について述べてきた。平成 27 年度に文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅣ長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」に採択され、当時のテーマⅣの目的は、学長を中心とする強固なリーダーシップの下、以下のテーマに対して取り組む事業を対象として、重点的に支援するものであった。

◇ 長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）

課題発見・探求能力、実行力等の「社会人基礎力」や「基礎的汎用的能力」などの社会人として必要な能力を有する人材を育成するため、ギャップイヤー等を活用し、「何のために学ぶのか」という学びの動機付けに資するよう、入学直後等に 1 か月以上の長期の「学外学修プログラム」を開発・実施し、学生が主体的に学ぶことができる体制整備を推進するもの。

そして、この取組みにより、大学教育の質的転換の加速を促し、大学の人材養成機能の抜本的強化を図るものであった。

本学はこの目的に対し、主体的な学びを促進すべく、4 学期制を導入し、1 年次の教養教育課程に FS を配置して、2 学期・夏季休暇を中心に、1 年次全員必修科目の中で長期学外学修プログラムを開発・実施した。更に 2 年次以上には専門の学びを深める発展的な FS を体系的に整備した。

当初は手探りの中、職員主導で構築した FS プログラムも、現在は教員主導で専門の学びに繋がる FS、教養の学びに繋がる FS に改善されていった。事前事後授業も教員主導で行われ、事前学修は全プログラム必須となり、プログラムの目的や意義を明確に伝え、主体的な学びの態度を養う工夫がなされるようになった。また、学生にとって後輩に推奨したい授業となり、1 年生 FS に参加した学生が 2 年次以降の専門的な FS に参加し、体系的な学びを実現できるようになった。更に、今年度は遂に、学生が FS で提案した「町を良くする案」が自治体の計画として正式に事業化されることとなり、受入先との互恵関係構築における良い事例となった。加えて、学生派遣前の準備である約 80 プログラムへの学生振分けや宿泊先・交通手段の手配等の運営上の課題は年々改善され、学外学修時の危機管理体制についても知見を積み重ねながら強化していった。

この 5 年間を通して、武蔵野大学独自の学外学修プログラムの基盤が形成され、ギャップイヤーがなくなったとしても、学外学修の意義は強く引き継がれ、座学だけでは感じることが出来ない生の学びを体験することで、専門の学びの有用性への気づきと主体的な学びの姿勢を少なからず学士課程に加えることとなった。また、この体験で得られた汎用的能力は 4 年間の大学生活だけでなく、将来の進路においても大いに役に立つものになると学生は実感している。

2020 年度からは、本報告書で示された AP 事業 5 年間の成果と課題を踏まえて、新たなフィールド・スタディーズが出発する。2020 年度は本学の有明キャンパス周辺で東京オリンピック・パラリンピックが開催され、有明キャンパスは「2020 ホストタウン・ハウス」となり、全国のホストタウンがこれまで行ってきた相手国・地域との様々な交流の活動経過をアピールする場となる。この半世紀に一度の機会を FS の場として、多くの学生を派遣することを予定している。あらゆる専門の学びと繋がる平和の祭典を通して、学生が自分の専門の学びに引き寄せて、多くの気づきと体験を積み重ねる絶好の機会とする。併せて、全国展開している 1 年生 FS では、更なる互恵的且つ発展的な官学連携を図り、質の高い学外学修を学生に提供していく。2 年次以降の発展的な FS においては、持続可能な開発目標である SDGs の指標を実現するプログラムを構築し、本学のブランドステートメントである「世界の幸せをカタチにする。」ための教育研究環境を整備していく。

これからも平成 30 年 1 月に設置した学外学修推進センターを中心に武蔵野大学独自の全学的な取組みとして、学部学科と協働し、官学連携を互恵的に発展させながら、フィールド・スタディーズを通して世界の幸せのカタチづくりに貢献していく。

最後に、本事業推進にあたっては、文部科学省をはじめ、各地方自治体、関係団体・企業の皆様の多大なるご理解とご協力に心より御礼申し上げたい。また、学内教職員の熱い支援と協力にも心より感謝を申し上げる。

令和元年度　AP 事業報告書　総括

武蔵野大学　学外学修推進センター長　山田　均

平成 27 年度から開始した AP 事業も、本年度で 5 年間の予定を終わり、その成果を振り返るとともに、その経験を未来の教育事業にいかに活かしていくかを考える時期となりました。長いようであっという間の5年間でしたが、終わるにあたってまずこの 5 年間のフィールド・スタディーズ事業にご尽力いただいた教員の皆様、それを献身的な努力で支えてくれた職員の皆様、そして何より学生を受け入れ、多彩な経験を得させてくださった受け入れ団体の皆様に対して、深くお礼を申し上げます。

フィールド・スタディーズ（以下 FS）はもと 2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災に際して教職員学生の有志が行ったボランティア活動に端を発するものです。社会の危機にあたってわれわれが一人一人何かをなさねばならないという使命感がその根底にあります。このことは本学の建学理念にも直結する強い意思であろうと考えます。

AP 事業に参加させていただく機会を得た 5 年間の FS を数字の上から概観してみますと、次のようになります。平成 27 年度には 28 プログラムで参加者 1859 人、平成 28 年度には 37 プログラムで参加者 1869 人、平成 29 年度には 59 プログラムで参加者 1942 人、平成 30 年度には 97 プログラムで参加者 2075 人、そして最終年度である令和元年度には 78 プログラムで参加者 2099 人となります。プログラム数では約 3 倍に増え、参加者数も卒業要件科目として 2000 人を越えて安定した増加をしております。

プログラムを見ていきますと、初期のプログラムとしては、海外ではロサンジェルスでのビジネスシーン体験や台北での体験プログラムがあり、国内では北海道東川町の町役場、長野県信濃町の農協、宮城県石巻の学童保育施設、鹿児島県之島の農業施設などで学ぶプログラムがあり、初期から日本中に大きくネットワークを広げた事業であったことがわかります。最終年度の令和元年では、海外はインドや東南アジアの仏教を体験するプログラムや台湾の文化を知っていくプログラム、オリンピック専門家と行くギリシャ体験プログラムがあり、国内では秋田県上小阿仁村での芸術イベントプログラム、陶芸の専門家について焼き物をつくるプログラム、チューリップの球根を植えて有明地区の都市景観をつくるプログラムなど、非常に多彩なプログラムが実施されました。

学生へのアンケート結果を見ると、自発性、表現・発想力、リーダーシップが伸びたという成長実感があり、毎年 8 割前後の人が後輩にも FS の履修を進めたいとしており、全体として満足度の高いプログラムであることがわかります。

FS のめざすものは、専門の学びの土台をつくることに尽きます。つまり人やしごとや物が結びつき、支えあうことによってこの世界や自分たちの暮らしが成り立っているのだという「ご縁」に気づき、そこに他者の「ご恩」を感じ、それぞれの学問を通じて世界の幸せのために「報いる」という志しと世界観が学びの土台であると思います。

その意味で AP 事業の 5 年間を総括するのなら、学外での体験によって世界観を形づくり、それを機会として学内での学修を進めるという言わば両輪型の学びを武蔵野大学のスタイルとして定着させた 5 年間であったと言えるのではないかと考えます。この度、AP 事業の終了に伴って私たちが考えなければならないことは、この 5 年間の経験をステップとしてどのような未来図を描くのかということです。

具体的には、私たちの周囲にあるモノの背後にある他者の顔に気づくようなプログラム作りであり、世界のすみずみの他者の暮らしと幸せに思いが至るようなプログラム作りであり、そしてできれば多くの学生が参加できるような、費用の掛からないプログラムです。

AP 事業の終了は、本学の事情に即した柔軟なプログラム運営への自由度が増したというように前向きに考えることもできようと思います。FS のように複数の学部を横断的に、毎年 2000 人を越える全員規模での学外学修を実施している大学は日本中で本学だけです。それをできる大学も本学だけです。この事実に誇りをもち、慎重で地道な努力と工夫によって、学生のために効果があり、先生方にも企画しやすく、受け入れ機関の方々にとっても武蔵野大学の学生を受け入れてよかったとメリットを感じていただけるような良質なプログラムを多数生み出していきたいと思うところです。

5 年間のご協力に対し、改めてお礼を申し上げ、総括といたします。

令和元年度 武蔵野大学 フィールド・スタディーズ　学外学修プログラム　事業報告書

2020 年 3 月発行

発　　行　武蔵野大学　大学事務部　学外学修推進センター事務室
有明キャンパス
〒135-8181　東京都江東区有明三丁目 3 番 3 号
武蔵野キャンパス
〒202-8585　東京都西東京市新町一丁目 1 番 20 号

デザイン・装丁　株式会社 創文
印　刷・製　本　株式会社 創文

本書の無断転載を禁じます。
落丁・乱丁の際はお取替えいたします。
©Musashino University